

# 少将滋幹の母

谷崎潤一郎

青空文庫



## その一

此の物語はあの名高い色好みの平中へいじゆうのことから始まる。

源氏物語末摘花すえつむはなの巻の終りの方に、「いといとほしと思して、

寄りて御おんすゞり硯いんの瓶かめの水みちのくがみに陸奥紙むつをぬらしてのごひ給へば、平

中がやうに色どり添へ給ふな、赤からはあへなんと戯たはぶれ給ふ云うんぬん

々」とある。これは源氏がわざと自分の鼻のあたまへ紅べにを塗つ

て、いくら拭ふいても取れないふりをして見せるので、当時十一歳

の紫むらさきうえの上うへが氣きを揉もんで、紙かみを濡ぬらして手てずから源氏の鼻はなのあたま

を拭ふいてやろうとする時に、「平中へいじゆうのように墨すみを塗ぬられたら困り

ますよ、赤いのはまだ我慢しますが」と、源氏が冗談を云うのである。源氏物語の古い注釈書の一つである河海抄かかいしやうに、昔、平中が或る女のもとへ行つて泣く真似をしたが、巧うまい工合に涙が出ないので、あり合う硯すゞりの水指みずさしをそつとふところに入れて眼のふちを濡らしたのを、女が心づいて、水指の中へ墨を磨すつて入れておいた、平中はそうとは知らず、その墨の水で眼を濡らしたので、女が平中に鏡を示して、「われにこそつらさは君が見すれども人にすみつく顔のけしきよ」と詠よんだ故事があつて、源氏の言葉はそれにもとづく由よしが記しるしてある。河海抄は此の故事を今昔物こんじやくもの語がたりから引用し、「大和物語やまとものがたりにも此事あり」と云っているけれども、現存の今昔や大和物語には載のっていない。が、源氏にこ

んな冗談を云わせているのを見ると、此の平中の墨塗りの話は好色漢の失敗談として、既に紫式部の時代に一般に流布していたのであろう。

平中は古今集こきんしゅうその他の勅撰集に多くの和歌を遺のこしているし、系

図も一いちおう往明かであるし、その頃のいろ／＼の物語に現れて来る

ので、実在した人物であることは紛れまぎもないが、死んだのは延長

元年とも六年とも云つて確かでなく、生れた年は何の書にも記し

てない。今昔物語には、「兵衛ひやうゑのすけたひらのさだぶみ佐平定文」と云ふ人ありけ

り、字あざなをば平中とぞ云ひける、御子の孫みこにて賤いやしからぬ人なり、

そのころの色好みにて人の妻め、娘みやづかへびと、宮仕人、見ぬは少くなん

ありける」と云い、又別の所で、「品も賤しからず、形有様も美

しかりけり、けはひなんども物云ひもをかしかりければ、そのころ此の平中に勝れたる者世になかりけり、かゝる者なれば、人の妻、娘、いかに沉んや宮仕人は此の平中に物云はれぬはなくぞありける」とも云つてあるが、こゝに記す通りその本名は平定文（或は貞文）で、桓武天皇の孫の茂世王の孫に当り、右近中将従四位上平好風の男である。平中と云うのは、三人兄弟の中の二番目の子息であるからとも云い、字を仲と云つたからとも云う説があつて、平仲と書いてある例も多い。（弄花抄に依ればへイチユウのチユウは濁りて読むべしとある）蓋し平中とは、なお在原業平のことを在五中将と呼んだ如きであらうか。

そう云えば業平と平中とは、共に皇族の出である点、平安朝初期

の生れである点、美男子で好色家であつた点、歌が上手じょうずで、前者が三十六歌仙かせんの一人、後者が後六々選の一人である点、前者に伊勢物語があるように、後者にも平中物語とか平中日記とか云うものがある点等でよく似ている。たゞ平中は業平よりも時代がやゝ下つており、今の墨塗りの話や、本院の侍従じじゆうに翻弄ほんろうされた話などから想像すると、業平と違つていくらか三枚目的なところがあつたような気がする。平中日記を見ても、その内容は必ずしも花々しい恋愛談ではなく、相手に逃げられたり、体ていよく捌さばかれたり、とゞのつまりは「物も云はでやみにけり」とか、「煩わづらはしとて男やみにけり」とか云う風な終りを告げている挿話そうわが随分ある。又七条の后きさいの宮みやの女房武蔵むさしとの関係のように、たま〜望みかなが叶

つたかと思えば、その翌日から公用で四五日京都を離れるようなことになり、而も不覚にも女に事情を知らしてやるのを怠ったので、女はたよりのないのを歎いて尼になつてしまつたと云うような、そゝつかしい話などもある。

ところで、平中が数ある女たちの中で、一番うつゝを抜かして恋いこがれ、おまけに散々な目に遭わされて、最後には命までも落すようなことになつた相手は、侍従の君、——世に謂う本院の侍従であつた。

此の婦人は、左大臣藤原時平の邸に宮仕えしていた女房であるが、時平のことを本院の左大臣と呼ぶところから、此の女のことを本院の侍従と呼ぶ。その頃平中の官はわずかに兵衛佐であつた。

彼は血統や家柄はよかつたけれども、官職は低かつたのであつた。それに何分なまけ者で、「宮仕へをば苦しき事にして、たゞ<sup>せうえ</sup>逍遙をのみして」と日記にあるから、要するに役所勤めなんか嫌いで、のらりくらりしていたのであろう。帝はそれをお憎みになつて、懲らしめのために一時免官せしめられたことなどもあつた。尤も一説に、彼が免官になつたのは、彼よりも官職の上の或る男が彼と女を争つたところ、女がその男を嫌つて平中の方へ靡いたので、恋の競争に破れた男が平中を恨み、彼のことを何や彼やと朝廷に讒言したからであるとも云う。古今集卷十八雜の下所載「憂き世にはかどさせりとも見えなくなどか我が身の出でがてにする」と云う歌は、「つかさの解けて侍りける時よめる」と云

う詞ことばがき書の通り、その折彼が出家遁世しゅつげとんせいの念を起して詠んだのであるが、帝の御母后おんはゝきさきのもとにも馴染なじみの女房があつたので、「なり果てむ身をまつ山の時ほとゝぎす鳥いまは限りとなき隠れなむ」と云う歌をその女の所へ送つて、一方では御母后に運動をし、一方では父の好風が帝に哀訴したので、間もなく再び官を賜わつたのであつた。

勤めぎらいの平中は、宮中への出仕は怠りがちであつたらしいが、本院の左大臣のもとへは始終御機嫌伺ごきげんに行つた。本院と云うのは、中御門なかみかどの北、堀川の東一丁の所にあつた時平の居館の名で、当時時平は故関白かんぱく太政大臣基経もとつね、——昭宣公しょうせんこうの嫡ちやく男なんとして、時の帝醍醐帝みかだいていの皇后穩子おんしの兄として、権威並びない

地位にあつた。時平（これはトキヒラが本当であろうが、古くからの云い習わしに従つて矢張シやはりヘイと呼ぶことにしよう）が左大臣になつたのは昌泰しやうたい二年、二十九歳の時であつて、初めの二三年の間は右大臣に菅原道真みちざねが控えていたゝめに多少牽制けんせいもされたけれども、昌泰四年の正月にその政敵おとしを陥れることに成功してからは、名実共に天下いちちの一の人ひとであつた。そして此の物語の時代にも、まだ三十を三つか四つ越したぐらゐに過ぎなかつた。今昔物語には、此の大臣もまた「形美麗かたちに有様いみじきこと限りなし」「大臣のおん形音氣かたねはひ薫たきものの香かよりはじめて世に似ずいみじきを云々」と記しているので、われ／＼は富貴と権勢と美貌と若さわかさとに恵まれた驕慢きやうまんな貴公子を、直ちに眼前に描くことが

出来る。従来藤原時平と云うと、あの車くるまびき曳ひの舞台に出る公卿くげ悪あくの標本あおくまのような青隈あおくまの顔を想い浮かべがちで、何となく奸かんね佞邪いじやち智ちな人物のように考えられて来たけれども、それは世人が道真みちまことに同情する餘りあまそうなつたので、多分實際はそれ程ほどの悪党あくどうではなかつたであらう。嘗かつて高山樗ちぎゆう牛うしは菅公論かんこうろんを著わして、道真みちまことが彼を登用して藤原氏の專横せんおうを抑えようとし給うた宇多うたじよ上皇うこうの優渥ゆうあくな寄託そむに背いたのを批難ひなんし、菅公の如きは意氣地いきじなしの泣きみそ詩人で、政治家でも何でもないと言つたことがあるが、そう云う点では時平の方が却かえつて政治的実行力に富んでいたかも知れない。大鏡おほかがみは時平を悪くばかりは云わず、愛すべき点があつたことをも伝えている中に、可笑おかしいことがあると直す

ぐ笑い出して笑いが止まらない癖があつたと云うが如きは、無邪  
気で明朗濶かつたつ達たつな一面があつたことを證するに足りるのであるが、  
その一例として滑稽こっけいな逸話がある。まだ道真が朝ちようにあつて、時  
平と二人で政務を見ていた頃のこと、いつも時平がひとりで非道  
に事を処理して、道真に嘴くちばしを入れさせないので、某なにがしと云う記録係  
の属官が一計を案じ、或る日文案を文挟ふばさみに挟んで左大臣の前に  
捧たげて行き、それを時平に渡そうとするはずみにわざと音高く放ほ  
屁うひをした。時平は途端に噴ふき出してわツはく、腹かを抱かえ始めたが、  
いつ迄たつても笑いやまず、体がふるえてその文案を受取とること  
が出来ないので、その間に道真が悠々と事務を執とり、思いのまゝ  
に裁断を下した、と云うのである。

時平は又なか／＼勇氣があつた。道真の死後、その霊が化して雷神となつて朝臣に讐あだをすると信ぜられていた時分、或る日清涼せいりよ殿うでんに落雷して満廷の公卿くげたちが顔色を失つた折に、時平は凜りんぜ然んと太刀たちを引き抜いて大空を睨にらみ、「あなたは生きておられた時にも私の次の位だつたではないか、たとい神になられても、此の世へ来られたら私を尊敬なさるのが当然ですぞ」と叱咤しつたしたので、その威勢を恐れたかのように、雷鳴が一時静かになつた。されば大鏡の作者も、いろ／＼悪いことをした大臣ではあつたけれども「大和魂やまとだましひなどはいみじくおはしましたるものを」と云つている。

こう云うと、時平はたゞ向う見ずの、お坊ちゃん育ちの餓鬼がき大将

のようにも取れるが、案外そうでない一面もあつて、醍醐帝と此  
 の大臣とが密かに謀つて世間の奢りを戒めたと云う話なども伝わ  
 っている。それは或る時、時平が帝の定め給うた制を破つた華美  
 な装束をして参内したのを、帝が小薮の隙間から御覧になつ  
 て急に機嫌を損ぜられ、職事を召されて、「近頃過差の取締がき  
 びしいのに、左大臣たる者がいかに一の人であるとは云え、殊の  
 ほかきらびやかな装いをして参るとは怪しからぬ、早々退出する  
 ように申し付けよ」と仰せられたので、職事はどうなることやら  
 と案じながら、こわ／＼仰せの趣を伝えると、時平は恐懼措  
 く所を知らず、従者共に先を追わせることをも禁じ、慌てふため  
 いて退出して、以後一箇月ばかりは堅く居館の門を閉じて引籠

つていた。たま／＼人が訪ねて来ても、「お上の御勘当ごかんどうが重いので」と云つて面接せず、御簾みすの外にも出なかつたので、漸ようやく此の事が評判になり、世人おごが奢おごりを慎おごしむようになったが、これは豫あらかじめ時平が帝としめし合わせてしたことなのであつた。

平中が此の時平のところへしば／＼伺候しこうしたのは、権門に媚こびて出世いとぐちつかの緒を掴つかもうと云う世間並な下心もないことはなかつたであらうが、一つには此の大臣と兵衛佐とは話の馬が合うせいでもあつた。二人は官職や位階から云えば大きい隔へだたりがあるけれども、系図や家柄を論ずれば平中も遜そん色しよくはないのだし、趣味や教養も同等であるし、どちらも女好きな貴族の美男子なのである。従つて、二人が常にどんなことを面白がつてしやべり合つていたか、

大凡おおよそ見当がつくのであるが、でも平中は、左大臣のお相手をす  
 るのが唯一の目的で此の邸やしきへ来るのではなかった。いつでも彼は  
 夜が更ふけるまで御前で話し込んでから、頃いまあいを測はかつて暇いとまを告げ  
 るのであるが、そのまゝ真つ直ぐ自分の館やかたへ帰ることなどはめつ  
 たになかった。大臣の前は帰った体ていにしておいて、実はそうつと  
 女房たちの局つぼねの方へ忍んで行き、侍従の君のいるあたりをうろ／  
 々するのが例になつていて、ほんとうは此の方が目的なのであつ  
 た。

しかし甚はなはだ笑止なことに、平中は去年以来此の忍び歩きを繰り返  
 して、或る時はこゝぞと思やう遣戸やりどの外で息を凝こらしてみたり、勾こ  
 欄うらんのほとりに糸たゝずでみたり、根気よく機会をうかゞっているの

であるが、いつもの彼にも似ず、今度ばかりは運が悪くて、未だにその人の心を動かすことが出来ないのみか、世に稀な美女であると噂の高いその容姿を、垣間見たことすらないのであった。これは一つには、運が悪いだけではなく、何故か相手の人が故意に平中に遇うことを避けているらしいからなので、そのために平中は一層懊れていた。こう云う場合、召使われている女、童などを手馴ずけて文の取次をして貰うのが常套手段で、もちろんその辺にぬかりがあるのではなかったが、それも、今日までに二三度持たせて遣ったのに、全然手答えがないのであった。いつも平中は女童を掴まえて、「たしかに渡してくれたかね」と、しつこく念を押すのであるが、「えゝ、お渡しゝたことはしたん

ですけれど、………」と、女童は口ごもりながら気の毒そうに平中の顔を見るのである。

「お受け取りにはなつたんだね」

「えゝ、たしかにお取りになりましたわ」

「是非御返事を戴きたいと、云つてくれたゞらうね」

「それも、そう申上げたんですけれど………」

「そうしたら？」

「何とも仰おつしやらないんですの」

「でも、お読みにはなつたのだろうか」

「えゝ、多分ね、………」

と、平中が問い詰めれば問い詰めるほど、女童はいよく当惑す

るのである。

一度などはこんなことがあつた。

例に依つてこま／＼＼と思いのたけを書き綴つたあとに、せめて私はあなたが此の文を御覧下すつたかどうか、それだけでも知りたいのです、決してねんごろな御言葉をとは申しません、御覧になつたのなら、見たと云う二文字だけの御返事でもお寄越よこしになつて下さい、と、泣かんばかりの口調でした、めたのを持たせてやると、女童はついぞないことにニコ／＼しながら戻つて来て、

「今日は御返事がありましたのよ」

と、一通の文を渡した。平中が胸をときめかしつゝ押し戴いて受け取つたことは云う迄もないが、急いで封を開いて見ると、小さ

な紙きれが一つ這入<sup>はい</sup>っているだけであつた。なおよく見ると、

「見たと云う二文字だけの御返事でもお寄越しになつて下さい」と書いてやった、さっきの彼の文の中の「見た」と云う二字のところを破いて入れてあるのであつた。

これにはさしもの平中も開<sup>あ</sup>いた口が塞<sup>ふさ</sup>がらなかつた。彼も今まで数々の女に恋をしかけたが、こんな意地の悪い、皮肉な相手に懸<sup>か</sup>つたことはなかつた。かりにも此方<sup>こちら</sup>は美男の聞えの隠れもない平中である。大概な女は彼だと分れば訳もなく靡<sup>なび</sup>いてしまうのが常<sup>つね</sup>で、今度のように手きびしい扱いをした者は一人もなかつた。で、いきなりピシヤリと横<sup>よこ</sup>面<sup>つら</sup>を張られたような気がして、さすがにそのあと暫<sup>しばら</sup>くは寄り着こうともしなかつた。

それから二三箇月の間と云うものは、女の所に用がないとなると、現金なもので、左大臣への御機嫌伺いも自然怠りがちにしていた。たまには伺候しこうすることもあつたが、帰りにいつもの局つぼねへは間違つても足を向けず、そつちは鬼門きもんだと、自分で自分に云い聞かして、すうつと出て来るようにしていた。と、その後又幾月か過ぎて、或る五月雨さみだれの降る晩であつた。久ひさし振ふりに御前で夜を更ふかしてから出て来ると、宵よいのうちに入にゆうばい梅ばいらしくしよぼく降つていた雨にわが、俄かに大降りに降り出したので、此の雨を衝ついて自分の家まで帰るのはえらく煩わずらわしい気がしたが、その時ふつと、こう云う晩にかの人のもとを訪れてみたら、と、急に平中はそう思っていた。それと云うのが、考えれば忌ま／＼しいけれども、いった

いかの人の此の間のようなやり方は、悪ふざけにしても少しく念が入り過ぎてゐる。凡そ相手がおよが左様に手の込んだ懐らし方をすると言ふのは、彼を嫌つてゐるのではなくて、彼に興味を抱いてゐる證據ではないのか。あたしはそこらの人たちのように、あなたの名を聞いて直ぐ嬉しがるような女ではない、と言ふところを見せたのであるが、一往その意地を通しさえすればよいのではないか。——平中の腹の底には矢張そう云う風な己惚れがあるので、あれ程にされてもなお懲りず、まだほんとうには諦めていなかつたのであつた。それに、こう云う真つ暗な土砂降りどしゃぶの晩に訪れたら、いかに鬼のような心を持った女でも、哀れを催さない筈はずはあるまい。そう思うと彼はひとりでにそわ／＼して来て、

ふらくくと鬼門の方角へ出かけて行つた。

「まあ、誰方か<sup>どなた</sup>と存じましたら、——」

呼び出された女<sup>めのわらわ</sup>童は、雨の降り込む<sup>すのこ</sup>簀子の板敷にしよんぼり

立っている男の姿を闇<sup>やみ</sup>に透<sup>す</sup>かしながら、さも驚いたらしく云つた。

「暫<sup>しばら</sup>くでございましたわね、おあきらめになつたのかと存じてお

りましたのよ」

「いや、あきらめてよいものかね。男はあゝ云う目に遭わされる

と、猶<sup>なおさら</sup>更恋<sup>つ</sup>しさが募<sup>つ</sup>るものだ。あれからお伺いしなかつたのは、

そうくうるさく附<sup>まと</sup>き纏<sup>まと</sup>うのも失礼だと思つたからだよ」

平中は、餘り醜態にならないように冷静を装つたつもりであつたが、生憎<sup>あいにく</sup>自分でも可笑しいくらい声ふるえているのであつた。

「御無沙汰はしていたけれども、一日だって忘れたことなんぞありはしない。一途いちずに思いつゞけていたのだ」

「お文ふみをお持ちになりましたの」

女童は長たらしい泣きごとには取り合わないで、手紙があるなら取次だけはして上げようと云う調子であつた。

「文なんか持つて来なかつたよ。どうせ御返事が戴けないのに、書いたつて無駄ではないか。——ねえ、君、お願いだ、それよりほんの束つかの間までもよい、一と目でも、いや、物越しにでも、お逢い申してお声を聞かして戴きたいのだ。そう思い立つたらこら忪こらえきれなくなつて、此の雨の中を飛んで来た私を、少しは憐あわれんで下さらないだろうか」

「でもまだお側の人たちが起きていらっしやるので、今は工合が悪いですけど、……」

「待つよ、いくらでも。お側の人が寝てしまふまで。——今夜はお逢い出来るまで此処こゝを動かないつもりなんだ」

平中は一生懸命にそう云つて、

「ねえ、君、お願いだ、ねえ」

と、だゝつ児のように繰り返しつゝ手を取つて放さないの、女童は半ばあき々呆れ、半ばおび々怯えたような眼つきで、氣ちがいじみた男の顔をしげくと視みつめていたが、

「では、ほんとうにお待ちになるの？」

と、しようことなしに云つた。

「お待ちになるなら、お側に人がいなくなつてから、申上げてだけは見ますけれど」

「ありがと有難う、是非ぜひ頼むよ」

「でもまだなか／＼ですよ」

「そんなことは覚悟の上だよ」

「ほんとうにお取次をするだけよ。あとのことはお請うけ合い出来ませんわ」

それなら彼処やりどの遺戸やりどの前で、なるべく人目に付かないようにして待つていらつしやい、と、そう云つて女童が引込んでしまつてから、平中は凡そどのくらいの間立ちつゞけていたことか。だん／＼夜も更けて来て、人々の寝支度をする物音が聞え、やがてひつ

そりと局つぼねの中が寝静まった様子であつたが、その時不意に、平中の凭よりかゝつてゐる戸の内側に人のけはいがして、カタリと懸かけが金を外はずす音がした。

はてな、と思つて試ためしに遣戸に手をかけて見ると、訳なくする／＼と開いてしまった。あゝ、さては今夜はかの人も心を動かして願いを聴き届けてくれたのかと、平中は夢のような気がして、嬉しさにわなゝきながら恐るゝ忍び入り、戸の懸金を内側から掛けた。中は真つ暗で、たつた今人の足音がしたように思えたのに、その辺には誰もいるらしくもなく、たゞ黪おびたゞしい空薫そらだきの香が局のうち一杯に満ちていた。平中は闇の中を手さぐりで一歩々々進みながら、かの人の闇ねやとおぼしいあたりへ漸ようやく這はい寄ることが出

来たが、こゝらであろうと見当を付けてまさぐると、衣きぬを引き被かついで横に長く臥ふしている姿が手に触った。ほつそりした肩つき、可愛らしい頭の恰好かつこう、まさしくかの人に相違ない。髪を撫なで、みると、しなやかな毛の房ふさ々としたのが氷のように冷めたく触る。

「とう／＼逢うて下さいましたね。………」

こう云う場合にふさわしい台詞せりふのいくつかは、常に用意している筈の彼であるのに、今夜はあまりに思い設けぬことだったので、咄嗟とつさに兎角とかくの文句も浮かばず、不覚にもわな／＼するばかりで、辛うじてこんな風に云ったあとは、熱い溜ため息いきをつゞけざまに吹きかけたゞけであった。彼はひたすら髪かみの毛の上から両手で女の

顔を押しさえ、それを自分の顔の方へまともに向けて、美しいと云われる目鼻だちを見きわめようとしたが、顔と顔ををそんなに寄せつけても二人の間には濃い闇があつて、何も見透せないのであつた。でもそう云う風にして暫く一心に視<sup>み</sup>つめていると、何となくぼうつと、ほのじろいものが幻<sup>まぼろし</sup>のように見えて来る気がした。女はその間一<sup>ひ</sup>と<sup>こと</sup>と言も云わず、黙つて平中のするなりにされていた。平中は女の顔じゆうを撫<sup>な</sup>で廻して、その輪廓を触覚に依つて想像しようとするのであつたが、そうされても猶<sup>なほ</sup>柔軟な胸をしなくさせつゝ、全く男のするなりにされているのは、無言のうちにも彼<sup>か</sup>も打ち任せているのだとしか思えなかつた。が、女は男の身じろぎを感じると、急に何と思つたか、

「待つて、……………」

と云いながら体を引いた。

「……………彼処しやうじの障子しょうじの懸金かけがねを掛けて来るのを忘れましたわ。  
ちよつと掛けて参りますわね」

「直ぐすお戻りになるのでしようね」

「えゝ直ぐ、……………」

女が障子と云つたのは、今の世の襖ふすまのことで、隣の局との間仕切まじきりに締めてあるのを云うのであつた。いかさまその懸金かけがねが外れていては、人が這入つて来る懸念けねんがあるので、男が仕方なく手を放すと、女は起きて、上に纏まとっていた衣を脱ぎ、単衣ひとえと袴はかまとを着たなりで出て行つた。その間に平中は装束を解いて臥ねて待つていた

が、たしかにカタリと懸金を掛ける音がしたのに、どう云う訳か女はなか／＼戻つて来ない。間仕切と云つてもついそこであるのに、一体何をしているのか。……そう云えば、今懸金の音がしたあとで、女の足音がだん／＼奥へ遠のいて行くように聞えたが、それきりぱったりと此の室内に人のけはいがしなくなつた。何だか様子がおかしいので、

「どうかなされたのですか、……もし、……」  
と、小声で云つてみたけれども、答がない。

「もし、……」

と云いながら、彼も起き上つて、襖きわの際へ行つてみると、怪けしからぬことには此方こちら側の懸金は外れていて、向う側の懸金が下りて

いるのである。女は隣の部屋へ逃げて、向うから締まりをして、  
 何処どこかへ行つてしまつたのであつた。

又背負い投げを食わしたのか。……平中はそのまま襖に寄り添  
 うて茫然ぼうぜんと闇の中に立ちつくした。それにしてもこれはどう云  
 う意味であろう。こんな夜更けにわざ／＼人を自分の闇ねやまで誘い  
 入れて置きながら、いざと云う時に姿を晦くらましてしまふとは。今  
 迄にしても念が入り過ぎていたけれども、今日のは餘程不思議で  
 ある。折角こゝまで事が運んで、今日と云う今日は日頃の恋が成じ  
 就ようじゆしそうであつたのに、——現に今しがた、あのひやゝか  
 な髪を撫で、あの柔かな頬をさすつた感触が、まだ手のひらに残  
 つているのに、——今一步のところを取り逃がすとは。——

一旦はたしかに握った珠たまが指の間からズリ落ちたとは。——そ  
う思うと平中は口惜くやし涙さえ溢あふれて来た。今考えれば、さつき女  
が立つて行つた時に、自分も附いて行くべきであつた。もう大丈  
夫と氣を許したのが悪かつたのだ。大方おゝかた女は、男にどれほどの  
熱意があるかを試してみようとしたのであろう。男が心しんから今夜  
の逢お瀬せに感激しているなら、片時も女の側を離れまいとするの  
が当り前である。それなのに女をひとり行かして、自分は寝て待  
っているなんて、その料りようけん簡かんが氣に入らない。此方が少し情を  
示すと、直ぐそんな風に附つけ上あがるのでは、まだく懲こらしめてや  
らねばならない。憚はゞかりながらあたし程のものを恋人に持とうと云  
うのには、もつとく忍耐が必要ですよ、と、女はそう云つてい

るのかも知れない。……………

並々ならずひねくれている女の性質から推<sup>お</sup>して、とても戻つて来る筈がないことは分つていながら、なお平中は未練がましく襖の際に耳を澄まして隣室のけはいを窺<sup>うかが</sup>つたりした。そしてとう／＼寢床のところへ引返して来たが、脱ぎ捨て、ある自分の装束を直ぐには取つて着ようともせず、愚かなことであると知りながら、女の衣と枕とが置いてあるのを抱いてみたり、撫で、みたりして、やがてその枕に我が顔を載せ、その衣を我が身に纏うて、長い間打ち伏していた。……………まゝよ、夜が明けたつて構うものか、いつ迄もこうしてやれ、人に見られたら見られた時のことだ。……………こうして強<sup>ごうじよう</sup>情に頑張つていてやったら、かの人も我<sup>が</sup>を

折つて戻つて来ずにはいないであろう。……そんなことを思い  
く、女の匂がまだこまやかに立ち籠めて<sup>こ</sup>いる暗がりの中に佻<sup>わ</sup>び  
しい雨の音を聞きながら、彼は夜もすがらまんじりともせずにい  
たが、次第に明け方が近くなつて来、彼方此方<sup>あちらこちら</sup>でガヤ／＼人声が  
し始めると、矢張<sup>やはり</sup>きまりが悪くなつてコソ／＼逃げ出してしまつ  
たのであつた。

こんなことがあつてから、平中の侍従の君に寄せる思いはいよ／  
＼真剣になつたのであつた。それ迄は幾分遊戯気分<sup>わきめ</sup>で追ひ廻して  
いたものが、それから<sup>わきめ</sup>は傍目もふらずに恋いこがれて、是非とも  
望みを叶<sup>かな</sup>えずには措<sup>お</sup>けないようになつた。そう云う意慾に燃える  
ことは、見す／＼かの人のしかけた罫<sup>わな</sup>に陥ることであつたけれど

も、一歩々々思う壺つぼへ誘い込まれて行きつゝ、どうにも制しようのない気持であつた。そして結局、又あの女めの童のわらわを呼び出しに行つては文をことづけるより外に、此れと云う智慧ちえも浮かばないのであつたが、でもその文の書き方には心を砕いて、此の間の夜の己おのれの越度おちどを詫わびる言葉を、さま／＼な表現で繰り返し／＼綴るようにした。——あなたが私を試そうとしていらつしやることは感づいていたのですが、それでいながらうっかりして、あの晩ばんのような失しつ錯さくをしてしまつたくやしき。それと云うのもあなたを思う熱情が足りない證據だと仰せになるかも知れませんが、去年以来どんなにあなたに嘲ちやうろう弄ろうされてもなお懲こりずまに通かよつて来る私と云うものに、少しでも不憫ふびんをかけて下さるのであつた

ら、せめてもう一度だけ、此の間の晩のような機会を恵んで下さらないであろうか。——と、要旨はそれに盡きるのであるが、それをいろ／＼な殺し文句で書くのであつた。

## その二

そうこうするうち、その年の夏も過ぎ、秋も暮れて、平へいじゆう中の家の籬まがきに咲いた菊の花も色香がうつろう季節になつた。

此の古今に名を馳はせた色好みの男は、人間の花を愛したばかりでなく、植物の花をもいつくしむ心を持っていて、わけても菊を栽培することが相当上じようず手であつたらしい。「又此の男の家には、

前せんざい栽好みて造りければ、面白き菊などいとあまたぞ植つゑたりける」とある平中日記の一段には、或る月の美しい夜に、平中の留守をうかゞつて女たちがひそかに菊の花を見物たけに来、丈の高い花の莖こゝろに歌を結ゆいつけて帰ることなどが記されているが、大和物語にも、仁和寺にんなじの宇多上皇——亭子院ていしんの帝みかどが平中をお召しになつて、「御前に菊を植えたいと思うので、よい菊を献上するように」と云う仰せがあつたことを記している。その時院は、平中が畏かしこまつて退出するのを呼び止めなされて、「その献上の菊の花には歌を添えて参れ。そうでなければ受け取らないぞ」と仰せになつたので、平中はひとしお畏おそまつて退き下り、我が家やの庭に咲き誇ほっている菊の中から優すぐれた数株を選び取つて、それに歌を添

えて差上げた。古今集卷五秋歌の下に、「仁和寺にんなじに菊の花めしける時に、歌そへて奉れと仰せられければよみて奉りける」と云う詞書の附いているのが即ちそれである。――

秋をおきて時こそありけれ菊の花

うつろふからに色のまされば

さて彼が丹精して作ったそれらの菊の花ども、すっかり色香が褪あせてしまったその年の冬の、或る晩のことであつた。平中はその夜も本院の大臣おとぎの許もとに伺候しこうして四方山よもやまの世間話のお相手をしていたが、彼の外にも五六人の公卿くげたちが侍っていて、初めのうちは御前にぎやが賑にぎやかだつたのが、追いく一人減り二人減りして、いつの間にか大臣と彼と二人きりになつた。帰り途みちに目あてのある平中

は、自分も好い加減に退り出たいのであつたが、時平しへいは彼と差向いになると女の噂うわさを持ち出すのがおきまりで、何か最近に収穫はなかつたか、己おれの前で隠すには及ばぬぞ、と云うような風に切り出すので、彼も心ではそわ／＼しながら、ちよつと座を立つしおを失つて、それから又ひとしきり、親しい友達同士でなければ交かわせないような秘話はずんだ。尤ももつと平中は、近頃侍従の君の一件が大臣の耳に這入つていはしないか、今にそのことを持ち出してチクリとやられるのではあるまいか、と云う不安があるところから、その晩はどうも調子が乗らず、内々警戒していたのであつたが、時平は何と思つたか、

「時に、折入つてあなたに聞きたいことがあるんだが、………」

と、俄にわかに上座から席を移して、平中の前へ膝をすり寄せた。

来たな、と思つて平中が胸をどきつかせていると、時平はニヤノ  
薄笑いを浮かべて、

「いや、突然つかぬことをお聞きするようだけれど、あの、帥そちの  
大納言だいなごんの北きたの方かたな？……………」

「はあ、はあ」

平中はそう云つて、まだ薄笑いの消えやらぬ時平の顔を不思議そ  
うに視みつめた。

「あの北の方を、あなたは知つておられるであろうな」

「あの北の方……………でございますか」

「そんなにお恍とほけなさらずと、知つておられるなら知つていると、

正直に云つて下さるがよい」

平中がどきまぎしている様子を見て、時平は一層膝をすゝめた。

「不意にこんなことを云い出して、変にお思いかも知れないが、

あの北の方は世に稀な美人だと云う噂があるが本当かな？……………

なあ、これ、お恍惚なさるなと云うのに。……………」

「いえ、恍けてなんぞおりは致しません」

懸念けねんしていた侍従の君のことではなくて、思いも寄らぬ人のこと

が問題になつてゐるのだと分ると、平中は先まずほつとした。

「これ、知つておられるのであらうな」

「いえ、……………どう致しまして」

「いかん、いかん、隠してもちゃんと種が上つています」

二人の間にこんな工合な問答が交されるのはそう珍しいことではなかつた。いつも時平が冷やかしかゝると、最初のうちは存じませんの一点張りで、しらを切る平中なのであるが、だんく深く問い詰めると、結局「知らないでもない」と云うような所へ落ちる。それから又問い詰めて行くと、「文の遣り取りだけはした」となり、「一度逢つたことがある」となり、「実は五六度、……：」となり、しまいには何も彼も白状する。そして時平が驚くことは、当時世間に評判されている女たちの中で、平中が一往渡りをつけていない者は殆ど一人もないのであつた。で、今夜も時平に詰め寄られると、次第に云うことがしどろもどろに、口の先では否定しながら顔つきでは肯定し始めたのであつたが、時平が

猶も追究すると、

「実は何でございます、あの北の方に仕えておりました女房に、少々ばかり昵懇じっこんの者がございましてな」と、おもむろに口を割り出した。

「ふん、ふん」

「その者から聞いたのでございますが、あの北の方は並びない器量のお人で、年はようよう二十歳はたちばかりでいらつしやる。………」

「ふん、ふん、それくらいは私も聞いていますよ」

「ところが、何分大納言殿はあの通りの老人であられますのでな。………あの方のお歳はいくつになられますか、まあお見受けしたところ、もう七十をずうつと越しておられるように存ぜられます

が、……………」

「左様、七十七か八、くらいになられはしないかな」

「そう致しますと、北の方とは五十以上も違つておいでになると云う訳で、それではあまりあの北の方がおいとおしい。世に珍しい美女にお生れになりながら、選よりに選おつて祖父おか曾祖父ひいおのよ  
うな夫をお持ちなされたのでは、嘸さ御不満さなことがおありであ  
ろ。御自身でもそれをお歎なきになつて、あたしのような不運な  
ものがあるだろうか、お側の者にお洩もらしなされて、人知れず泣  
いておいでになることがある、など、その女房が申したり致し  
ましてな。……………」

「ふん、ふん、それで？」

「それで、と申す訳でもございませんけれども、そんなことから、ついその、何でございます、……………」

「あはゝゝゝゝ」

「どうぞ宜よろしく御推察を、……………」

「大方そんなことだろうと睨にらんでいたんですが、やっぱりそうだったんですね」

「恐れ入ります」

「で、何度ぐらい逢つておられる?」

「何度と申して、そうたびくはございませなんだ。ほんのちよつと、一度か二度、……………」

「謙を云われな」

「いえ、ほんとうで。……その女房なかだちに媒なを頼みまして、一度か二度はそう云うこともございましたか知れませんが、格別打ち解ける、と云うところまでは参りませなんだ」

「ま、そんなことはどうでもよろしい。それより私が聞きたいのは、世評通りの美人に違いないかどうか、と云うことなんです」

「左様でございます、それはまあ、……」

「それはまあ、どうだと云われる？」

「どう申したらよいのでしょうか」

と、平中はわざと気を持たせて、ニタ／＼笑いを噛かみ殺しながら、仔細しさいらしく首を傾かしげた。

こゝで此の二人が噂うわさをしている「帥そちの大納言」とその北の方と云

うのは如何なる人であるか、と云うのに、大納言は藤原国経くにつねのこと、閑院左大臣冬嗣ふゆつぐの孫に当り、権中納言長良ながらの嫡男ちやくなんである。時平は此の国経の弟、長良の三男に当る基経の子であるから、彼と国経とはまさしく伯父甥おじおいの関係になるのであるが、地位から云えば故太政大臣関白基経の長子であり、摂家せつけの正嫡せいちやくである時平の方が遙はるかに上で、すでに左大臣の顯職にある年の若い甥は、老いぼれの伯父の大納言を眼下に見下くだしていたのであつた。

いったい国経はその頃としては大變長寿を保つた人で、延喜八年えんぎに八十一歳を以て歿したのであるが、生来一向働きのない、好人物と云うだけの男で、兎も角とかくも從三位大納言じゆさんみの地位にまで昇り

得たのは、長生きをしたお蔭であろう。嘗てかつ太宰権帥ださいごんのそちに任じていたことがあるので、帥の大納言と呼ばれていたが、その大納言になったのは実に延喜二年の正月、彼が七十五歳の時であつた。彼にたゞ一つの取柄とりえと云えば、非常に健康に恵まれていたことで、肉体的精力が倫りんを絶していたであろうことは、そう云う高齢で二十何歳と云う夫人を擁ようし、男子を生ませていた一事を以てしても想察するに足るのである。これは餘談であるけれども、昭和の現代に於いて、つい此の間、六十八九歳になる或る高名な老歌人が、四十何歳かの某夫人と「おいらくの恋」とやらをして新聞や雑誌に艶種つやだねを提供し、大いに世間を騒がしたことはなおわれ々の記憶に新たなところである。当時此の老歌人の知己友人ちきたちの間

で一番問題になったのは、彼の体力がよく堪え得るであろうかと云うことであつたので、或る物好きな男がそつと夫人に質<sup>たゞ</sup>して見るなどのことがあつたが、その結果、夫人は少しもそう云う方面に不満を感じていない事実が明かにされ、われ／＼は改めて老歌人の精力を羨<sup>うらや</sup>みもすれば驚きもした次第であつた。現代に於いてさえこう云う組み合わせの性生活は類<sup>たぐい</sup>稀<sup>まれ</sup>なこととして世の視聽を惹<sup>ひ</sup>くのであるから、此の老歌人よりなお八九歳の高齡で、五十も歳下な婦人を妻にしていた国経のようなのは、平安朝の昔としたら餘程珍しいことではあるまいか。

次にその北の方と云うのは、筑<sup>ちく</sup>前<sup>ぜん</sup>守<sup>のかみ</sup> 在原<sup>むね</sup>棟<sup>やな</sup>梁<sup>の</sup>女<sup>むすめ</sup>であるから、在五中将業平の孫に当る訳であるが、此の夫人の正確な年齢

は、ほんとうのところよく分らない。大納言と五十も歳が違ふと云うのは、まさかとも思われるけれども、世継物語には「わづか二十ばかりにてぞおはしける」とあり、今昔には「二十に餘る程」とあるので、二十一二歳であつたかと思える。彼女が業平を祖父に持つているからと云つて、美人であつたときめることは出来ないけれども、子の敦忠も美男であつたと云うことであるから、矢張美人系の一族たるに耻じない容姿だったのであろう。時平は何処かゝらそう云う噂を聞き、而もその人が時々夫の眼を忍んで情人を呼び込んでいると云うこと、その情人とは別人ならぬ平中であるらしいことをチラと小耳に挟んだので、それがほんとうなら、左様な美女をよぼくの老翁や位の低い平中如きに

任まかしておくと言ふ手はない、すべからだいこう須く乃公が取つて代るべしである、と、ひそかに野心を燃やしていたところへ、そんなことゝは知らぬ平中がひよっこり今夜御機嫌伺いに罷まかり出たのであつた。

後段に述べるが如く、時平はやがて望みを達して自分よりも十ほど若い此の義理の伯母を、見事伯父から奪い取つて自分のものにしたのであるが、大和物語には此の夫人がまだ国経の妻であつた時代に、平中が彼女に贈つたと云う和歌を載せている。――

春の野に緑にはえるさねかづら

わが君きみざね実とたのむいかにぞ

此の「君実」と云うのは本妻の意であつて、何処まで本気で云つているのか分らないとしても、かよう斯様な文句を書き送るからには、

平中も此の人に対して多少とも真剣な気持があつたのであろう。彼は今、時平に突然みそかごとを発あばき立てられたので、うろたえた返事をしたのであるが、正直を云うと、まだ幾分か此の過去の恋人のことを忘れかねていたのであつた。浮気男のことであるから、今日迄に契ちぎつた女は数を知らず、大部分はその場かぎりで捨て、しまひ、今では顔も名もおぼえていないのが多いのだけれども、此の美しい夫人とは、近頃暫しばらく遠のいているようなものゝ、一時はたしかに並々ならぬ関係にあつたのである。目下のところ、已やむに已まれぬ行きが、りじゆうで侍従きみの君を追い廻すような羽目になり、へんに懊じらされているものだから、一途に心がその方へばかり向いているのであるけれども、前者との縁も決して完全に切

れてしまっている訳ではなかった。殊に思いもかけない時に、そう云う風に時平に尋ねられて見ると、又改めてその人のことが思ひ出されて来るのであった。

「いや、先程も申しました通り、お逢いしたのは一二度でございませので、たしかなことは申せませんけれども、すぐれてめでたい御器量であられることは、先まずほんとうでございますな」

と、まだ平中は何となく胡麻ごま化かしながら、少しずつ出し惜しみを  
するよう云った。

「ふうん、さては世間の噂たがに違たがわず……………」

「こうになりましたら隠さず申し上げますが、あれだけの顔だちのお方は、ちよつと外に見当らない、と申しても宜しゅうございま

しような。憚りながら、わたくしが今までにお逢いしました人々のうちでは、あの北の方が一番お美しゅういらつしやいます」

「ふうん」

と、時平は呻るうなように云つて息を詰めた。

「で、あなたの見たところ、夫婦仲はどんな工合です。矢張老人との間は巧うまく行っていないのでしようね」

「さあ、身の不仕合わせを歎くようなことを申されて、涙ぐんでおられたこともございましたが、大納言殿は世にも親切なお人で、非常に大切にしてくれる、などゝも仰おつしやつておられました。

さればどう云うお心持でおられますか、實際のところは分かりかねます、何しろ可愛い若君もおいでになりますし、……」

「子達は何人おられるのです」

「お一人らしゅうございます。四つか五つぐらいになられる若君ですが、……………」

「ほゝう、では七十を越されてからのお子なのですね」

「えらいものでございますよ」

平中は、なおいろ／＼とその人のことを根掘り葉掘り問われるまゝに、知っている限りは知らしてやるのに吝かやぶさでなかつた。いかさま、思い返して見れば、二度とあゝ云う蘭ろうたけた人に出遇えるかどうか分らないけれども、でもゝう自分は、あの人との恋は一往かな叶えたのである、どう云う相手であつたにしろ、その人の魅力の程は知ってしまった、その人との夢は見つくした、自分はその人

にもはや全く興味が無いとは云わなければ、矢張それよりは未知の女、——次から次へ技巧を構えて自分の情熱を煽らずには措かない人の方へこそ、遙かに強く惹き着けられるのを感じる。

——平中はそんな氣持であつた。漁色家の心理と云うものは、王朝時代の搢紳も江戸時代の通人と同じようなもので、過ぎ去つた女のこと以後々までこだわっているつもりはなかつた。もし左大臣が執心とあるならば、どうなと好きなようにされるもよからう、——と、彼はそれぐらいに思つたでもあろうし、それに又、あの大納言のような好人物の眼を偷んでそうく不義なことをするのは、他人は知らず、彼としては何となく氣が濟まないところもあつた。人の女を寝取ることにかけては常習犯の彼

なのであるが、あの傷々いたたくしい、骸骨がいこつのように瘦やせた老翁が、たま／＼若い美しい妻を贏かち得て、後生大事にその人に冊かしずき、それに満足しきつてゐるらしい様子を見ては、柄にもなく憐愍れんびん愍んの情に似たものを感じていた訳であつた。

なおついでながら、大納言国経と平中との間には、此の北の方の關係を外にして直接深い交渉はなかつたようであるが、或る年の秋、何かちよつとしたことで国経から平中の許もとへ使者が手紙を持つて来た時に、平中が庭に咲いていた菊の一枝を取つて返書に添えて渡したことが、平中日記に見えている。その時菊の花を貰つた国経は、直ぐに次のような歌を詠よんで贈つた。

みよを経てふりたる翁杖おきなえつきて

花のありかを見るよしもがな

平中の返し、

たまぼこに君し来寄らば浅茅生あさぢふに

まじれる菊の香はまさりなむ

これはいつ頃のことであつたか明かでないが、或は平中は、自分が此の翁の秘蔵の花を手折たおつたことを考えて、いくらか皮肉にそんな贈物をしたのであろうか。

### その三

それからと云うもの、時平は宮中で国経と顔を合わすと、急にじ

よさい  
才なく挨拶するようになった。位は下でも、彼には正しく伯  
父に当る高齢の人を、敬うやまいたわるのに不思議はないようなもの  
だけれども、菅公かんこうを失脚せしめて以来、ひとしお態度が驕慢に  
なつて、満廷の朝臣どもに颯爽さつそうたる威容を誇っていた彼は、つ  
いぞ此の伯父の存在などを眼中に置いたことはなかつたのに、ど  
う云う風の吹き廻しか、伯父に出遇うと変なニコ／＼顔をする。  
そして、御壮健で結構であるが、此の頃の寒さはおこたえになり  
はしないか、とか、お風邪かぜを召されぬように、とか、取つて付け  
たような愛想を云う。或る日、分けても寒さの厳しい朝のことで  
あつたが、伯父の大納言の鼻先から水みず漬はなが滴たれているのを見  
ると、彼はそつと寄つて行つて、

「お洩が出ておりますぞ」

と、注意をして、

「お寒かったら綿の物をたくさんお着込みになることですね」と、小声で云った。

長寿の人によくあるように、大納言は少し耳が遠いので、

「綿?……」

と聞き返すと、

「ふん、ふん」

と、時平はひとりうなずいて、何やら老人には聞き取れないことを云ったが、やがて老人が館やかたに帰ると、左大臣からの使者だと云って、雪のような綿を幾いくもち屯と云うほど届けて来た。「あなたの

ように齡八十になん／＼としてなお 嬰 鑠 たる元氣を保ち、壯  
 者を凌ぐ趣しのがおりになるのは羨しい次第である。国に斯か様な朝  
 臣があるのは寔まことにめでたい限りであるから、何卒どうか此の上とも体を  
 大切にされて、一日でも多く長生きをして下さるように」と、使  
 者はそう云う口上と共にくだんの贈物を置いて帰つたが、その二  
 三日後、朝から大雪が降り出して一尺近くも積つた夕方に、又使  
 者があつて、此の雪の白を如何いかように過すこしておられますか、今夜  
 は大方なみ／＼ならず冷えることゝ存じますが、………と云うよ  
 うな言葉を述べ、何やら 衣ころも 筥ばこに収めたものを恭うやしく捧げなが  
 ら運び入れた。そして、「これは唐土とうどから伝来の品で、昔御先代  
 の昭宣公が、冬になると召しておられたものですが、今の左大臣

はまだ年がお若く、斯様なものを着用される折もないので、父君に代つて伯父君に召して戴きたいと仰つしやいまして」と、そう云つてそれを置いて行つたが、衣篋の中から出たものは、立派な貂てかわごころもの裘で、昔の人の薰たきしめた香の匂が、今もなつかしくかおっているのであつた。

贈物はそれからも引きつゞいて数回に及んだ。或る時は錦にしき、綾あや、等々の織物、或る時はこれも唐土から渡つたと云う珍奇な幾種類もの香こうぼく木、或る時は葡萄染えびぞめ、山吹、等々の御衣おんぞい幾いく襲かさね、――  
 一折にふれて何とか彼とか口実を設けては、矢継ぎ早やに使者が来るのであつた。大納言は時平に格別な考があるのだらうなど、は疑つてもみず、たゞもう有難かたじけなさと忝かたじけなさで一杯であつた。誰しも

老年になると、若い人からちよつとしたいたわりの言葉をかけられても、つい嬉しさが身にこたえてほろりとするものであるのに、まして生れつきおめでたい、気の弱い国経なのである。殊に相手は甥おいと云つても、天下のいちひと一人の人であり、昭宣公の跡を継いでせつし撰政ようにも関かん白ぱくにもなるべき人であるのが、さすがに骨こつ肉にくの親しみを忘れず、何の取柄もない老いたる伯父に斯かくまで眼をかけてくれるとは。

「やっぱり長生きはするものですね」  
と、或る晩老人は、北の方のゆたかな頬しわに皺しわだらけな顔を擦りつけて云つた。

「わたしはあなたのような人を妻に持って、自分の幸福はもう十

分だと思つていましたのに、そのうえ近頃は左大臣のようなお人から、斯かのように優やさしくして戴ける。……ほんとうに、人はいつでもどんな時にどんな好運にありつくか分らないものです」

老人は、北の方が黙つてうなずいたのを自分の額で感じながら、一層つよく顔を擦り着け、両手で項うなじを抱きかゝえるようにして彼女の髪を長い間愛撫した。二三年前まではそうでもなかつたのであるが、最近になつて老人はだん／＼愛し方が執しつ拗ようになり、冬の間は毎夜北の方を片時も離さず、一と晩じゆう少しの隙間も出ないようにびったり体を喰つ着けて寝る。そこへ持つて来て、左大臣が好意を示すようになってからは、その感激のせいでつい酒すこを過し、酩めいて酩いしてから床に這入るので、なおさらしつツこく

手足に絡み着くようにする。それにもう一つ、此の老人の癖は、  
闇の中の暗いのを厭うて、なるべく燈火をあかるくしたがるので  
あつた。と云うのは、老人は北の方を手を以て愛撫するだけでは  
足らず、とき／＼一二尺の距離に我が顔を退いて、彼女の美貌  
を讃嘆するように眺め入ることが好きなので、そのためにはあた  
りを明るくしておくことが必要なのであつた。

「ですが、もうわたしなどは何を着ようと差支えない。あなたこ  
そあの綿や錦を召して下さい」

「それでも大臣は、殿がお風邪を召さぬようにと仰っしゃって、  
下されましたものを、………」

低い声でしかものを云わない北の方は、耳の遠い老人に分らせる

ことが困難なので、自然夫に対しては言葉数が少く、分けても聞  
に這入つてからは殆ど無言で通すので、此の夫婦の間では寝物語  
が交かわされることはめつたになく、大概老人の方がひとりでしやべ  
りつゞけるのであつた。そして北の方はたゞうなずくか、たまに  
一と言か二と言、老人の耳の端はたへ口を寄せて、唇が耳みみたぶ朶へ触れ  
るくらいにして云うのであつた。

「いゝや、わたしは何も要いりはしない。何も彼かもあなたに進まぜま  
す。……わたしには此の人さえあれば……」

そう云つて老人は又自分の顔を妻の顔から遠ざけながら、妻の額  
の上にかゝる髪かみの毛を搔かきのけ、その目鼻だちへ燈火のあかりが  
ほんのり当るようにした。こう云う時、いつも北の方は老人の節ふし

くれだつた歪ゆがんだ指がわなゝきながら髪をいじくつたり頬をさす  
つたりするのを感じつゝ、おとなしく老人のするまゝになつて眼  
を閉じているのである。それは顔の上にさす明りの晴れがましさを  
避けるため、と云うよりは、老人の貪むさぼるような瞳の凝ぎようし視を避  
けるため、と云つた方が適當であるかも知れない。八十に近い老  
人に斯様な熱情があることは、不思議と云えば不思議であるが、  
実はさしにも頑がんけん健を誇つた此の老人も、一二年此のかた漸ようやく体  
力が衰え始め、何よりも性生活の上に争われない證據が見え出し  
て来たので、それを自覚する老人は、一つには遣やる瀬せなさの餘り  
変に慍じれているのであつた。尤もつとも彼の場合、その遣やる瀬せなさは、  
自分の悦えつらく樂が思うように叶かなえられないと云うよりは、此の若い

妻に申訳ないと云う氣持から来る方が多いのではあつたが、……

：

「いゝえ、そんなお心づかいはなさらないで、——」

老人がその胸中を率直に打ち明けて、あなたに濟まないと思つて  
いる、と云う風に詫<sup>わ</sup>び言<sup>ご</sup>めかして云うと、北の方はしずかに頭<sup>こうべ</sup>を  
振つて、却つて夫を氣の毒がるのが常であつた。お年を召せばそ  
れが当り前なのであるから、何も氣になさることはない、その当  
り前の生理に背<sup>そむ</sup>いて無理なことをなさるのこそ、お体のために宜  
しくない、そんなことより、殿<sup>せつせい</sup>が攝生<sup>せつせい</sup>をお守りなされて一年で  
も多く長寿を保つて下さる方が私もうれしい、と、北の方はそう  
云う意味に取れることを云う。

「そう云つて下さるのは忝かたじけないが」

老人は、そんな工合に北の方から優しい言葉で慰められると、一層北の方の心こころ根ねがいとおしくなるのであつた。そして、又しても眼をつぶつてしまつた北の方の顔を見守りながら思うことは、いったい此の人は心の奥でどんなことを考えているのだろうか、と云うことであつた。それと云うのも、此の人がこんなにもすぐれた器量を持ちながら、五十以上も歳の違ふ夫に添たわされた我が身の悲運を、それほどにも自覚していないように見えるのが不思議で、何か自分が世間知らずの妻を欺だましているような気がするばかりでなく、妻の犠牲の上に自分の幸福が築かれていると云う意識があるからなのであるが、内心にそう云う訝あやしみを蔵なしつゝ、眺

めると、ひとしお此の顔が神秘に満ち、謎なぞのように見えて来るのである。老人は、自分がこれほどの宝物を独りひと占めじにしていること、世にこれほどの美女がいることを知っているのは自分だけで、当人さえもそれをはつきりとは知っていないらしいことを思うと、何となく得意の念の禁じ難いものがあり、どうかすると、此のような妻を持っているのを誰かに見せて、自慢してやりたい衝動をさえ感じるのであった。又ひるがえ翻かえつて思うのに、もし此の人が口で云う通りのことを考えているのであったら、——みずからの性的不満などは意に介せず、ひたすらに老いたる夫の命長かれとのみ願っているのが本心であるなら、——その有難い志に対して自分は何を報いたらよいのか、自分は此の後、たゞ此の顔を眺める

だけで満足しつゝ死んで行きもしようけれども、此の若い人の肉  
体を、自分と共に朽ち果てさせてしまうのは餘りにも不憫ふびんであり  
惜しくもある。で、両手の間にその宝物をしつかりと挟んで視みつ  
めていると、いつそ自分のようなものは一日も早く消えてなくな  
つて、此の人を自由にさせてやりたいと云う怪しい気持にもなる  
のであつた。

「どうなさいましたの」

老人の眼に浮かんだ涙が、自分の睫毛まつげに伝わって来たのを感じる  
と、北の方ははつとして眼を開あけたが、

「いや、何でもない、く」

と、老人はひとりごとのように云つて口を噤つぶんだ。

そんなことがあつてから数日後、はやその年も残り少なくなつた十二月の二十日頃に、又しても時平の許もとから数々の贈物が届けられた。「大納言殿も来年は更に齡を加えられ、いよ／＼八十路やそじに近くなられると承うけたまわるにつけても、縁につながるわれ／＼共は慶賀に堪えない。これは些いさゝかながら、そのおよろこびのしるしまでに差上げるのですが、何卒どうぞこれらの品々を御受納なされて、よき初春をお迎えになつて下さい」と、使者はそう云う口上を述べたが、なお附たけ足して、時平が正月の三箇日のうちに、大納言の館やかたへ年賀に見えるであろうと云う意を伝えた。「大臣が仰せられますには、自分の伯父おじご御にこう云う長寿の人があるのは返す／＼も一門の榮譽である。自分はかね／＼此の伯父御とゆつくり酒を酌く

み交して、共によろこびを分ち、且は養生の術をも授かり、且は健康にあやからせて戴きたいと存じながら、今日まで折がなくて過して来たので、是非近々にその念願を遂げたいのであるが、それには此の正月がよい機会である。自分は毎年伯父御の邸へ年賀に参上したことがないのを、済まなく存じていた際でもあるから、来春から改めて御挨拶に伺い、年来の無礼をも詫びたいのである。と、左様に仰つしやつておいでになりました、三箇日のうちには必ず参上致すからお含みおきを願うようにと、申し付かつて参りました——使者はそう云つて帰つたのであつたが、此の申越しはいやが上にも国経を驚喜せしめた。事実、時平が此の大納言の所へ年頭の礼を述べに来るなど、云うことは、嘗て前例がない

ばかりでなく、前代未聞みもんの事件と云つても差支えない。此の恵み深い青年の左大臣は、一門の年長者たるの故を以て一介いっかいの老ろうこ骨つに結構な財宝をあまた、び贈つてくれた上に、今度は自身その邸宅に駕がを枉まげると云う光栄を授けてくれるのである。——

ありていに云うと国経は、先せん達だつてから左大臣の測り知られぬ温情に対して何がな報いる道はないだろうか、寝ても覚さめてもそのことを気に懸かけていた矢先であつた。そして、大臣の邸とは比べものにならない手狭てざまな館ではあるけれども、一いつ夕せき我が方へ臨席を仰いで饗きやう宴えんを催し、心の限りもてなしをして、感謝の念の萬分の一でも酌み取つて貰えないであろうかと云うことも、考えないではなかつたのであるが、なか／＼大納言風情ふうせいの所へなど

来てくれそうなる人ではないので、申し出ても無駄であろう、却つて身の程を弁えぬ失礼な奴と、物笑いになるだけであろう、と、そう思つて差控えていた際であつたのに、はか図らずもその人が自ら望んで客まろうど人になろうと云い出したのであつた。

その翌日から国経の邸は俄にわかに活気づき、大勢の人夫共が出入りし始めた。もう正月に餘日もないので、大切な客人を迎えるために急いで工匠や園丁を雇い、殿舎の修繕や林泉の手入れにかゝつたのである。家の中では板の間や柱をつや／＼と拭き込み、畳建具たてぐを新しく調え、とゝの屏風びょうぶや几帳きちょうを動かして座敷の模様かえをする。家司けいしや老女などが指図をしつゝ、あゝでもない、こゝでもない、一つ調度を何回となく彼方あちらへ持つて行かしたり、此方こちらへ持つて来

させたりしている。前栽せんざいでは樹木を掘り起し、池の水を堰せき止め、築つきやま山の一部を崩しなどしているが、此処では国経が自ら庭に下り立って、木や石の布置をいろ／＼に工夫して見たりしている。国経にして見ればまことに一世一代の面目で、老後に花を咲かせるのであるから、此の支度のためにどれ程の人力と財力とを傾けても惜しくはなかつた。

左大臣家からは正月の二日に前触れがあつて、明くる三日に、きらびやかな車や騎馬の列が大納言の邸へ乗り入れた。餘りぎょうろ仰々、しくならないように、供ともの人数なども目立たぬ程にして参る、と云うことであつたけれども、右大将定国、式部しきぶのたゆう大輔菅根など、云つた人々、——いつも時平の腰巾着こしぎんちやくを勤める末社まつしゃども

の顔ぶれを始め、てんじようびと殿上人やかんだちめ上達部がなお猶相当にこしよう扈従して、また平中も亦その中に加わっていた。客人たちの座に着いたのが申さるの刻を少し過ぎた時分で、宴が開かれると間もなく日が暮れたが、その晩は特に酒杯の進行が激しく、主客共に酔いのまわ循環りが速かであったのは、むね旨をふく啣んでいた定国や菅根たちの取持ちのせいもあつたであろう。やがて時平が、

「酒ばかりでは面白うない、……………」

と、末座の方へこなしたのを合図に、或る少納言が横笛を取り出して吹き始める。それに合わせて誰かきん琴の事をひ弾く。扇で拍子を取りながら唱歌をうたう。つゞいてそう箏のことや、わごん和琴や、び琵琶わが運び出された。

「御老体々々々、まずあなたからもつとお重ねにならなければ、

………」

「御主人公がそう慎しんでおいでになる手はありませんな。それではわれ々も酒がさめます」

「いや忝かたじけない〜、………愚老はたゞもう忝かたじけなうて〜、………こんな

嬉しいことは八十年来始めて〜、………」

国経が酔い泣きしそうな口調で云うのを、

「あは〜〜〜」

と、時平が持ち前の潤かつたつ達な笑いで打ち消した。

「そんなことはお置きなされい。それよりもつと浮き〜と騒さわうじやないですか」

「いかにもく〜」

と云つて、国経は突然声を張り上げて謡つた。

「我に酒を勧む、我辞せず、請ふ君歌へ、歌うて遅きこと莫れ。

………」

老人は白氏文集を愛読して、興に乗ずると、こんな工合

に文句を暗誦するのであるが、これが出る時はそろそろ酒が循つ

て来た証拠であつた。

「………洛陽の兒女面は花に似たり、河南の大尹頭は雪の如

し。………」

老来量を節してはいても、もとく下地は好きな方で、過せば

いくらでも過せる国経は、今宵は自分が主人役として容易ならぬ

人を迎え、粗相そこうがあつてはならぬと思うところから、最初のうちは努めて引き締めていたのであつたが、何分胸中に抑えきれない喜びあふが溢れてい、而も客人たちの方から頻しきりに杯を強しいられるので、いつか心の緊張ゆゑが弛んで、上機嫌になつて行つた。

「いや、頭は雪の如しでも、御精力のお盛んなことはお羨しい限りですな」

そう云つたのは式部大輔の菅根であつた。

「わたくしなどは、老人と申しましても明けて五十歳になつたばかり、御老体から見ますれば孫のようなものですが、近頃めつきり衰えを感じておりますよ」

「そう云つて下さるのは忝いが、もう此の老人もとんと駄目だし

て、……」

「駄目とは何が駄目なのです」

と、時平が云った。

「何も彼も駄目でございりますが、二三年來特に駄目になったものがございましてな」

「あツはゝゝゝゝ」

「玲瓏れいろう々々老いたるを奈何いかにせん」

と、老人が又白詩はくしを唱えた。

二三人の公卿たちが代る／＼立って舞い出した頃から、宴はだん／＼たけなわ闌たけなわになって行つた。春とは云つてもまだ冬の感じの、うすら寒い宵であるのに、此処ばかりは陽気に花やいで、笑い声と歌

声と歓語の聲が沸き返り、人々は皆上衣の襟を外したり、片袖を脱いで下着を出したり、行儀作法を打ち忘れて騒いでいた。

## その四

主人の妻、大納言の北の方はこう云う座敷の有様を、御簾のうちにいてさつきから隙見していた。初めのうちは、客人の席のうしろを囲っていた屏風が邪魔になつて見えにくかつたのであるが、故意にか偶然にか、追い々騒ぎがはげしくなり、人々が起つたり居たりするにつれて、その屏風の端が少しずつ畳まれて行き、斜かいに開いたので、今は左大臣の姿形がほゞ正面に見える

ようになった。御簾越しにはあるけれども、左大臣はついそこに、北の方とはなゝめに畳三四畳を隔てたあたりに、此方を向いて坐っているのが、ちようどその前に燈台が据えてあるので、残るところなく分るのであるが、色白のふつくらした顔が酔いのために紅く火照ほてっていて、眉まゆの付け根をとき／＼かん瘡癬ぺきが強あいきそうにふるわせるくせはあるけれども、笑うとひどく愛嬌あいきようがあつて、眼もとや口もとに子供のような無邪気さが溢れる。

「まあ、何と云うお立派な、……………」

「やっぱりあゝ云うお方は何処か違つていらつしやいますのね」  
お側の女房たちがそつと袖を引き合つて溜息を洩らしたのは、北の方の同感を求めるためであつたらしいが、北の方は眼顔でそれ

をたしなめて、ただ吸い寄せられるように御簾の方へ体を擦りつ  
 けていた。北の方が先ず驚いたのは、主人の国経が常になく酔すいた  
 態いをさらけ出し、だらしない恰好で何か呂律ろれつの廻らない濁だみこえ声  
 を挙げていることであつたが、左大臣もそれに劣らず酔つてい  
 らしい。だが此の方はさすがに夫の大納言のような見つともない  
 態さまはしていない。大納言は坐つていても彼方へよろ／＼此方へよ  
 ろ／＼し、眼がどろんとして何を見ているのやら分らないが、左  
 大臣は居すまいも正しく、しやんとして、酔つても威容を崩  
 さない。それでいて絶えず杯に満を引いて、いくらでも酒を呷あおつ  
 ている。管絃かんげんの合間々々に皆が催馬楽さいばらを謡うたうのであるが、左大  
 臣の声の美しさと節廻ふしまわしの巧うまさには、誰も及ぶ者がなくように

感ぜられる。——但し、これは北の方や附添いの女房たちが左さ様によう感じた迄であつて、時平が果して音おんぎよく曲の才を備えていたかどうか、別段それを證據立てるような記録があるのではない。が、時平の弟の兼平は琵琶びわの上手じょうずで、琵琶宮内卿びわくないきようと云われた人であつたこと、悴せがれの敦忠も管絃の名手で、博雅はくがのさんみ二位に劣らない人であつたこと、などを思い合わせると、或は時平にも多少その方面の天分があつたかも知れず、満まんざら更まこれらの婦人たちの鼻ひ眞目いきめではなかつたでもあろうか。——

北の方がなお気を付けて見ていると、左大臣はさつきから時々ちらくくと御簾ぬすの方へ流ながしめ眇めを使う。それも最初は遠慮がちな眼つきで、こつそりぬす偷ぬすむように視線を投げ、すぐ又しらを切つていた

が、酔いがすゝむに従つてその眼づかいが大胆になり、いかにも様子ありげな、色気たつぷりな表情をたゞえて見るのであつた。

我が門かどを

とさんかうさん練ねる男

よしこさるらしや

よしこさるらしや

これは催馬楽の「我門わがかど乎」の文句であるが、左大臣はこれを謡

いながら、「よしこさるらしや」の繰り返しのところへ来ると、

一段と声に力をこめて唱えた。そして訴えるような眼まなざしを、臆おく

するところなく真つ直ぐ御簾うちの裡へ注いだ。北の方は、自分が左

大臣すきみを隙見すきみしていることを、左大臣が知っているかどうか半ば疑

問にしていたのであつたが、今は疑う餘地もないと思うと、自分の顔が俄かに赧あかくなるのを感じた。現に左大臣の装束に薰たきしめてある香こうの匂においが、此の御簾のうちへかぐわしく匂においつて来るのを見れば、彼女の衣の薰たきもの物の香も左大臣の席へ匂においつているに違いない。事に依るとあの屏風の畳まれたのも、誰かゞ左大臣の意を酌くんで、わざとあんな風に動かしたのであるかも知れない。それかあらぬか、左大臣は御簾のうちにある北の方の顔を、何とかして見届けようとする如く、探るような瞳を挙げてしきりにキョロ／＼するのであつた。

左大臣の席からはずっと離れた遙かな末座に、別にもう一人、矢張此の御簾のあたりへ密ひそかな視線を注いでいる男があるのを、北

の方は疾とうから意識していたが、それは云う迄もなく平へい中じゆうで  
 あつた。女房たちは勿もちろん論ろんそれに気が付いていたのであるが、今  
 の場合北の方に憚はッかつて、此の優やさ男おとこの噂うわさをするのを差控さくえな  
 がら、心の中では左大臣と比較して、孰方どちらがより美男子であるか  
 を批判ひはんしていたでもあろう。北の方は、嘗かつて幾夜となくうす暗い  
 闇ねやの燈ともしび火びのはためく蔭かげに、夫の大納言の眼をかすめて此の男の  
 抱擁ぶように身をゆだねたおぼえはあるが、こう云う晴れの席上で、歴  
 々の人々の間に伍ごしている彼を見るのは始めてゞあつた。が、さ  
 しもの平中もこう云う座敷では、堂々たる時平の貫禄に押されて、  
 別人のように貧弱に見え、蘭らん燈とうなまめかしき帳とばりの奥で逢う時の  
 ような魅力がない。それに今宵は誰も彼もが羽目を外はずして燥はしいで

いるのに、どう云うわけか平中はひとり沈んで、自分だけは酒が甘くないと云いたげな様子をしているのであった。

と、時平がそれに眼をつけて、

「すけどの佐殿」

と、遠く隔たった席から呼んだ。

「あなたは今日は妙にしよ萎げておられるね。何か仔細しさいがあるんですか」

時平の顔にいたずら好きなき供がするような、意地悪な微笑が浮かんだのを、平中は世にも恨めしそうに横眼で見たが、

「いや、そんなことはございませんが、……………」

と、強しいて苦しそうな愛想笑いを洩らして云った。

「でも可笑しいですね、酒がちつとも行かんようじやないですか、もつと飲み給え〜」

「十分載っているのでございます」

「そんなら一つ、得意の猥談わいだんでも聴かせ給え」

「御、御冗談を仰おつしやつては、……………」

「あツは、……、どうですか方々かたがた」

と、時平は一座を見廻して、平中を指さしながら、

「此の人は猥談じんと惚気話のろけが頗すこぶる得意なんです、一席こゝでやつて貰おうじやないですか」

「ようよう！」

「謹聴々々！」

と、皆が拍手したが、平中は泣き出しそんな顔をして、

「御勘弁を〜」

と、頻りに首を振るのであった。時平はいよ〜意地悪な笑いを露骨に示して、いつも私に聴かしてくるのに、なぜ此の席ではやれないのか、聞かれて困る人でもいるのか、どうしてもやらな  
いなら、私が素ツ葉す抜くがよいか、此の間のあの話を、代りに披ひ  
露ろうしてやるぞ、など、云つて脅迫する。平中はいよ〜ベそを搔  
いて、拜まんばかりの恰好をして、

「御勘弁を〜」

を繰り返すのであった。

夜はすっかり更ふけ渡つたが、宴はいつ終るとも見えず、馬鹿騒ぎ

は一層盛んになつて行つた。左大臣は又「我が駒」を謡い出して、

待まつちやま乳山

待つらん人を

行きてはや

あはれ

行きてはや見ん

と云いながら、しまいには伸び上るような風をして御簾の方へ秋しゅう波なみを送つた。それから誰かゞ「東屋あづまや」の文句を謡つたり「我わ家いへん」の文句を謡つたりした。

「押開いて来ませ、我や人妻、……………」

「鮑あはびさだをか石陰子かかげよけん、……………」

「りらららりるろ、……………」

そのあとはみんな勝手に、てん／＼ばら／＼に好きなことを我が鳴り散らして、誰も他人の云うことなんぞに耳を傾ける者はなかつた。

国経の取り乱し方は一段と甚はなはだしかった。坐っていても倒れそうになる上半身を辛うじて支えて、

「玲瓏れいろう々々老いたるを奈何いかにせん」

と、まだあの文句を世迷よまい言ごとのように口号くちずさむかと思うと、誰彼の区別なく傍に來た者を掴まえては、

「愚老はたゞもう忝かたじけうてく、……………こんな嬉しいことは八十年

来……………」



御酩酊ごめいていではないか」

そう云う時平は、これも正体なく酔つていて、車が勾欄こうらんの際きわへ  
 ぴったりと引き寄せられても、そこまで歩いて行くことさえ困難  
 に見えた。そして、二三歩足を運んだところで、どしんと臀餅しりもち  
 をついてしまった。

「あ、これはいかん、……………」

「それ、それ、そのようにふらくしておいでなされて、……………」  
 「何でもない、くく」

そう云つて時平は立ちかけたが、立つと又すぐ臀餅をついた。

「これはく、我ながら醜態きわ極まる」

「それではとても御車にはお召しになれませんな」

定国がそう云うと、

「左様々々」

と、菅根が応じた。

「いっそのこと、今暫く酔いをお覚ましなされてからお帰りになることですか」

「いや、あまり長座をしては主あるじどの殿が御迷惑だ」

「何を仰っしゃる！　こんなむさくろしい所ですが、お気に召したらいつ迄でも御ゆつくり願いたい！」

いつの間にか国経は時平に体を擦り寄せて坐つて、その手を執とらんばかりにして口説くどいていた。

「殿々、愚老はあなたを無理にでもお引き止めしますぞ、帰ろう

と仰つしやつても決してお歸し申しませんぞ」

「ほゝう、長座をしてもよいと云われるか」

「よいどころの段ではござらぬ」

「しかし私をお引き止めになるなら、もそつと何か、特別のおもてなしをなさる必要がありますな。——」

突然時平の声の調子が変わつたので、国経が見ると、さつきまで赤味を帯びていた顔の色が蒼そうはく白になり、唇の端を神経質にピクピクさせているのであつた。

「——今宵は至れり盡せりの御饗応ごきようおうに与りあずか、結構な引出物まで頂戴したことはしましたが、まだこれだけでは、憚りはゞかながら此の左大臣を引き止めるには足りませんな」

「そう仰つしやられると穴へでも這入りたい！ 愚老としましては此れが精一杯なのですが、……………」

「あなたは此れで精一杯だと仰つしやるが、失礼ながらあの箏そうのことゝ馬二匹では、まだ引出物が不足ですな」

「と仰つしやいますと、外に何ぞ御所望ごしよもうの品がおりでしようか」

「それをわたくしに云わせないでも、何かそちらにお心あたりがありそうなものじゃありませんか。——ねえ、御老体、そう物惜しみをなさるなよ」

「物惜しみとは心外な！ 愚老は何とかして日頃の御恩報じがしたい、御満足が得られますなら、どんな物でも差上げたいんです」

「どんな物でも！　ですか、あツはゝゝゝゝ」

と、時平は体を仰のげ反ぞらして、さすがにいくらか照れ臭いらしく、例の豪傑笑いをした。

「でははつきりと申しますぞ」

「どうぞ〜」

「もしほんとうに、あなたが口で仰のつしやるように、私の日頃の好意に対して、感謝しておいでになるならば、——ですな。——

「はい、はい」

「あツはゝゝゝゝ、なんぼう酔よつ払はつておつても、ちと物狂おしいようで、此の先は申しにくい」

「そう仰つしやらずに、どうぞく」

「それは私の館やかたには勿論もちろん、やんごとない九重ここのえの奥にさえない

もので、御老体のお手もとにだけあるもの。——御老体に取つ

て命より大切な、天にも地にもかけがえのないもの。——箏そうの

ことだの、馬なんかとは比較にならない宝たからもの物。——」

「そんなものが愚老の所にございませうか」

「あります！ たった一つあります！——さ、御老体、それを

引出物に下さい！」

時平はそう云つて、愕然がくぜんとしている老人の眼の中を視据みすえた。

「さ、それを下さい、物惜しみをなさらない證據に！」

「おゝ、物惜しみをしない證據に！」

何と思つたか国経は、鸚鵡返おうむがえしに云つた。そして次の瞬間に、座敷のうしろを囲つていた屏風びょうぶの方へ歩み寄つて、それを手早く押し畳むと、御簾みすの隙間へ手を挿し入れて、中に隠れていた人の袂たもとの端をぐいと捉とらえた。

「左大臣殿、御覧下さい。——愚老の命より大切な、天にも地にもかけがえのない物、あらゆる宝物にまさる宝物、愚老の館より外に、何処を尋ねてもない宝物は此れなのです。——」

今までぐでんぐに酔いしれていた国経は、急に活かつを入られたようにしやんとして立っていた。言葉も呂律ろれつが廻らなかつたのが、てきぱきした物云いで、りんぐと響き渡るように云つた。たゞその大きく見開かれた眼には、何か発狂したような怪しい輝きが

満ちていた。

「殿、物惜しみをしない證據に、これを引出物に差上げます。お受け取り下さい！」

時平を始め満座の公卿たちは一言も発せず、眼前に展開した思いがけない光景に恍惚こうこつとしていた。——最初、国経が御簾の陰

へ手をさし入ると、御簾おもての面が中からふくらんで盛り上つて来、

紫や紅梅こうばいや薄紅梅やさま／＼な色を重ねた袖口が、夜目よめにも

しるくこぼれ出して来た。それは北きたの方かたの着ている衣裳いしやうの一部

だったのであるが、そんな工合に隙間からわずかに洩れている有

様は、萬華鏡まんげきやうのようにきら／＼した眼まぐるしい色彩を持った

波がうねり出したようでもあり、非常に嵩かさのある罌粟けしか牡丹ぼたんの花

が揺ぎ出たようでもあつた。そして、その、人間の大ききさを持つた一輪の花の如きものは、漸ようよう半身を現わしたところで、まだ国経に袂をとらえられたまゝ静止して、それ以上姿を現わすことを拒んでいるように見えた。国経はやおらその肩へ手を廻して抱きかゝえるようにしながら、もつとその人を客人たちの方へ引つ張つて来ようとする風であつたが、そうされるとなおその人は、御簾のかげに身を潜めようとした。顔に扇をかざしているので、目鼻うかゞだけは窺うよしもなく、扇を支えている指先さえも袖の中に隠れていて、たゞ両肩からすべっている髪の毛だけが見えるのであつたが、

「おゝ！」

と叫んで、時平は恰も美しい夢魔から解き放たれたように、つと御簾の傍へ走り寄ると、大納言の手を振り払って、自分がその袂をしつかりと掴んだ。

「帥殿そち、此の引出物はたしかに頂戴しましたぞ。これでこそ今宵参つた甲斐がありました。心からお礼を申します！」

「おゝ、世に二つとない宝物が始めて所を得たのです。愚老こそお礼を申さなければ！」

国経は時平に席を譲ると、屏風の此方へ引き下つて来て、

「方々かたがた！」

と、事のなりゆきを呆然と眺めていた公卿や上達部かんだちめたちに声をかけた。

「さあ、方々、——御一同はもはや御用はございますまい。そうして待つておいでになつても、恐らく大臣おとしは急にはお出ましになるまいと存ずる。どうぞ御遠慮なく、御自由にお引き取りになつて下さい」

そう云いながら、畳んだ屏風を再びひろげて、御簾の前を囲つてしまつた。

意外なことがつきくと起るのに、客人たちは度胆どぎもを抜かれて、やかあるじ館の主から「帰れ」と云われても直ぐには動くけしきもなく、興奮しきつた主の顔の、喜んでいるのか泣いているのか判断のつかない眼つきを見ていた。

「さあ、どうぞお引き取りを」

と、重ねて主が促すと、人々の間に漸くざわめきが湧き上つたが、それでもなお、あつさりその場を出て行った者は幾人もいなくつた。不承々に立ち上つたものゝ、大部分はへんな眼をして顔を見合わせ、ちよつと出て行きそうにして又立ち止つてしまつたり、柱や戸の蔭にひそんだりして、事件の落着を見届けなければ気が済まないと言ふ風であつた。

此の人たちの好奇心に充ちた視線が、期せずして屏風に囲まれた御簾の方に注がれていた時、屏風の向う側ではどんなことが起つゝあつたか。——時平は国経が袂の端を彼に渡して彼方へ逃げて行つたのを知ると、無言でその袂を自分の方へしずかに引いた。そして、今しがた国経がしていた通りに、御簾の隙間へ半身

を入れて、うしろから此の大輪たいりんの花の如きものを抱きかゝえた。と、さつき屏風の彼方で嗅かいた、あの甘いほのかな薫かおりが今はしたゝか咽むせ返るように鼻を撲うつのであつた。女はその時までお扇をかざしていたが、

「憚りながら、もうわたくしのものにおなりになつたのですよ。

お顔をお見せになつて下さい」

と、そう云つて時平がそつと袂の上から手をとらえると、手はわなくとふるえながら扇ひざを膝のあたりへ置いた。御簾の間まには燈火がないので、うたげの席にもつている大殿油おおとなぶらの穂先が、屏風に遮さへぎられながら遠く此方側へまたゝきを送つているのであるが、そのうすら明りの中に匂うほのじろいものが始めて接するその人

の面輪おもわであることが分ると、時平は自分の計畫がいみじくも此処まで運んだことに云いようのない満足をおぼえた。

「さあ、御一緒に、わたくしの館やかたへ参りましょう」

彼はいきなりその人の腕かいなを取つて肩にかけた。女は引き立てられながらさすがに躊躇ちゅうちよするらしく見えたが、でもしなやかに少し抵抗したゞけで、やがてする／＼と体を起して行くのであつた。屏風の外で待つていた人々は、急には出て来ないであろうと思へた左大臣が、忽ち恐ろしく嵩高かさだかな、色彩のゆたかなものを肩にかけながら物々しい衣きぬずれの音をひゞかして出て来たのに、又驚きを新たにしした。左大臣の肩にあるものは、よく見ると一人の上じ

藤とうろう、

——此の館の主が「宝物」だと云つたその人に違いな

かつた。その人は右の腕を左大臣の右の肩にかけ、面を深く左大臣の背に打つ俯せて、死んだようにぐったりとなりながら、それでもどうやら自分の力で歩みを運んでいるのであったが、さつき御簾からこぼれて見えたきらびやかな袂や裾が、丈なす髪とよじれ合いもつれ合いつゝ床を引きずって行く間、左大臣の装束とその人の五衣いっぎぬとが一つの大きなかたまりになって、さや／＼と鳴りわたりながら階はしがくし隱くしの方へうねって行くのに、人々はさつと道を開いた。

「帥殿そち、それでは戴いて帰ります！」

「はっ」

と云つて国経は、畏かしこまつて頭を下げたが、すぐ立ち上つて、

「御車、御車」

と云いながら、自分が先に階きざはしを下りると、車の簾すだれを両手で高くかぎ持った。時平が重くて美しい肩の荷物を持って扱あいながら、喘あえぎ々々車の際きわまで辿たどり着くと、雑色ぞうしきや舍人とねりたちが手に々々かざす松明たいまつの火のゆらめく中で定国や菅根やその他の人々が力を添え、両側すくから掬すくい上げるようにして辛うじてその嵩張かさばるものを車へ入れた。国経は簾をおろす時に、

「私をお忘れにならないで」

と、一と言云ったが、生憎あいにくなことに車の中は真つ暗で、もうその人の顔は見えず、せめて別れの言葉ぐらい聞かしてくれるかと思つてゐるうちに、あとから乗り込んだ時平の姿で、眼の前が一

杯に塞ふさがれてしまった。

その時、——と云うのは、北の方のあとに続いて時平が車に乗

った時、下した襲がさねの尻が簾から食はみ出して地に垂れたのを、誰か

混雑に紛れつゝ寄つて来て、手に取り上げて、簾の中へ押し入れ

てやった者があつたが、それが平中であつたのに気づいた人は殆ほとん

どなかつた。その夜平中は席にいたゝまれない心持で暫く席を外

していたのであつたが、昔の恋人が時平に拉らし去られるのを見て

は恠こらえきれなくなつたのであろう。あり合う陸奥紙みちのくがみに、

物をこそいはねの松の岩つゝじ

いはねばこそあれ恋しきものを

と、走り書きをして、小さく畳んで、不意に何処からか左大臣の

車の側に現れ、下襲の尻を簾の中へ押し込むのと一緒に、人知れずそれを北の方の袖の下へ挿し入れたのであった。

## その五

国経は、北の方を乗せた時平の車が供の人数を従えて去つて行くのを見送つたまでは、幾分か意識がはつきりしていたけれども、車の影が見えなくなると、俄かに緊張が弛んだせいか、内攻していた酔いが発して、勾欄のもとにくたくとくずおれてしまった。そしてそのまま、簀子の板敷に倒れ伏して寝入りかけたのを、女房たちが扶け起して寢所へ連れて行き、装束を脱がしたり、床

に就かしたり、枕まくらをあてがったりしたのであつたが、当人は一切前後不覚で、それきりぐつすりと一と息に眠つた。が、およそ何時間ぐらい過ぎた時分か、へんに襟えりもとがうすら寒く、何処からか蓐しとねの中へすう／＼風が入り込むようなので、ふと眼を覚ますと、もう閨ねやの中がしら／＼と暁に近いほの明るさになっていた。国経はぞつと身ぶるいをして、なぜこう今朝けさは寒いのか、自分は何処に寝ているのか、此処はいつもの自分の寢所と違うのか、——

—と思ひながら、そこらあたりを見廻すと、眼に触れる帳とぼりや蓐や、それらに沁しみ着いている香こゝろの匂や、すべて朝ゆう馴染なじみの深い我が家の閨であることは疑うべくもないのであつたが、一ついつもと違ふところは、今朝は自分がひとりぼっちで寝ているのであつた。

彼も世間の老人なみに早くから眼が覚める方なので、夜明け方の鶏とりの鳴く音を聞きながら、まだすやくくと眠っている妻の顔を、ちようど今朝ぐらいのうすら明りの中で打ち眺めるのが常なのであるが、今朝はその顔のあるべきところに、主ぬしのない枕まくらが空しく置いてあるばかり。いや、それより何より、いつもはしっかりと北の方に纏まつわり着き、隙間もなく手足を絡からみ着かせて、二つの体が一つ塊かたまりのようになって寝ているのに、今朝は襟えりくびや腋わきの下や方々に隙間が出来、そこをすうくした風が通り抜けるので、これではいかさま肌寒いのも道理であつた。……

今朝に限つてあの人ひとが此処こゝに、自分の腕うでの中に抱かれていないのはどう云う訳か。あの人ひとは何処どこへ行つたのか。——国経くにつねはそう

考えると、何か奇怪な幻影げんえいのようなものが頭の隅にこびりついていて、それが少しずつ髣髴ほうふつとよみがえつて来、朝の光が次第に明るさを増すのにつれて、その幻影もいよ／＼あざやかな輪郭を取つて浮かび上つて来るのを覚えた。彼は何とかしてその幻影を、酔餘すいよの揚句あげくに見た一場の悪夢である、と云う風に思い做なそうとしてみたが、昨日の夕方からの出来事の記憶を、一つ／＼氣を落ち着けてじっくりと呼び返しつゝ吟味してみると、どうやらそれは夢ではなくて事実であるらしいことが、否いなみ難くなつて来るのであつた。

「讚岐さぬき、……………」

と、国経は次の間まに控えている筈の老女を呼んだ。これはむかし

北の方の乳人めのとをしたことのある、四十あまりになる女で、嘗かつて讃岐介の妻になり任国へ下つて暮すうちに、夫に死なれたので北の方の縁を頼つて来、こゝ数年来大納言家に奉公をしているのであるが、大納言にすれば年の若い北の方を娘のように思うところから、どうかした折には此の女房を娘の母親のように思い、夫婦間のことは勿論、家事ばんたん萬端の相談をしたりするのであつた。

「もうお眼ざめでいらつしやいますか」

と、讃岐はそう云つて枕まくらもと許もとに畏まつたが、国経は顔を夜着の襟に埋めたまゝ、

「うむ」

と一言、不機嫌に答えた。

「いかゞでいらつしやいますか、御気分は」

「頭痛がして、胸がむか／＼する。わしは二日酔いをしたようだ。

……」

「何ぞお薬を持って参りましょうか」

「昨夜は大分過すげしたらしいが、どのくらい飲んだであろうか」

「さあ、どのくらい召上りましたやら。………あんなにお酔い遊ばしたのを、ついぞ見たことはございません」

「そうか、そんなに酔っておったか」

「国経はそこで顔を出して、

「讃岐」

と、少し調子を変えて云った。

「今朝眼がさめたら、わしはひとりで寝ている。……………」

「はい」

「これはどう云うことなのか。上は何処へ行かれたのか<sup>うえ</sup>」

「はい、……………」

「はいでは分らん。いったいどう云う訳なのだ。……………」

「昨夜のことを、おぼえておいでにならないのでございませうか」

「今少しずつ思い出しているのだが、……………上はもう此の館<sup>やかた</sup>におられないのだろうか。……………あれは夢ではなかったのだろうか。

……………わしは左大臣がお帰りになろうとするのを、無理にお引き止めした。そうしたら左大臣が、<sup>そう</sup>箏のこと、馬だけでは物足らぬ、

もつと立派な引出物をせい、物惜しみをするなど仰せになった。そこでわしはあの命よりも大切な人を、引出物として差上げた。

……あれは夢ではなかったのだろうか」

「ほんとうに、お夢であつたらようございませうものを。……」  
不意に、何だか鼻をすゝるような音がしたので、国経が顔を上げてみると、讚岐は袖で面を隠して、じつと俯向うつむいているのであつた。

「それでは、夢ではなかつたのか。……」

「はゞか憚りながら、何ぼう酔うていらつしやつたにしましても、どうしてあんな物狂おしい真似をなさいましたか。……」

「もうそんなことを云うのは止め。今更いまさら取返しらのつかないこと

だ」

「でも、左大臣とも云われるお方が、本気で人妻を奪い取るようなことをなさいますでしょうか。昨夜のことはお戯れたわむで、今朝はきつとお返し下さるのではございますまいか」

「そうであつてくれたらよいが、……………」

「何なら、お迎えの人を出して御覧になりましたら、……………」

「そんなことが出来るものか。……………」

国経は又すつぽりと夜着を被かぶつて、

「もうよい、彼方へ行つてくれ」

と、聞き取りにくい濁だみごえ声で云つた。

今になつて考えれば、なるほどそれは自分の胸に正まさしく覚えのあ

ることである。氣狂いじみた行為ではあるが、左様なことを仕出しだ  
 来かした心理については、自分には説明が付かないでもない。自分  
 は昨夜の饗宴を、平素の左大臣の恩に報いる絶好の機会であると  
 思い、出来るだけのもてなしをしたには違ひなかつたが、一方では、  
 自分の力に限りがあつて、到底左大臣を満足させる程の款かんだ  
 待いをなし得ないのを、耻はずかしくも齒痒はがゆくも感ずる念が一杯であ  
 った。自分にそう云う自責の心持、——こんな貧弱な饗応をし  
 たのでは相済まない、何がなもつと喜んで戴くことは、——と  
 云う心持があつた矢先に、左大臣からあゝ云う風に云われ、剩あまつさえ  
 「物惜しみをするな」とまで云われたのがぐつと答えて、左大臣  
 が所望しよもうとあらば、どんな物でも差出す料りようけん簡かんになつたのであ

った。それに自分は、謎をかけられるまでもなく、左大臣の所望するものが何であるかを、大凡おおよそ察し得たのであった。昨夜の左大臣は、あの御簾の方へ始終横眼を使つてばかりいた。最初はそれも控え目であつたが、だん／＼露骨になり、しまいには夫である自分の見ている前で、伸び上つて秋しゅう波うはを送つたりした。……

…自分がいかに老ろう耄もうし、血のめぐりが悪くなっているからと云つて、あんなにまでされて気が付かずにいられようか。……

………国経はこゝまで記憶を辿たどつて来て、さて、昨夜のあの時の自分の感情が妙な風に動いたことを思い出すのであった。と云うのは、時平のそう云う眼に餘る行動を見ながら、奇怪にも彼はその無礼を不愉快に感ぜず、却かえつて幾分かうれいような気がして

いたのであつた。……………

……………なぜ自分は嬉うれしかつたのか。……………なぜ嫉妬しつとを感じないで、得意に感じたのだろうか。……………自分は前から、あゝ云う世にも稀な人を自分が妻にしていることを、無上の幸福としていたのであるが、正直を云うと、世間がその事実に関心でいることが物足りなくもあつたのだ。自分は誰かに、時々自分の此の幸福を見せびらかして、羨せんぼうましがらせてやりたかつたのだ。だから左大臣が羨望せんぼうに堪えぬ顔つきをして簾の奥へ流なが眊しめを送つたのを見ては、大いに満足したわけであつた。自分は斯か様に老耄しし、官位は漸ようやく正三位大納言を以て終る運命にあるけれども、而しかも自分は、此の年の若い美男子の左大臣にさえ缺かけているものを持っている、

いや、恐らくは、九重の奥にまします帝でさえも、此れほどの人  
を後ことうきゆう宮みやに持つてはおられないであろう。自分はそう思うこと  
で云うに云われぬ誇りを感じ、それで嬉しかったのであった。：  
……が、それだけならば誰に話しても分つて貰えることだけれど  
も、実は自分の胸の中には、又もう一つの感情があつた。つまり  
自分は、二三年來生理的に夫たる資格を失いかけているところか  
ら、此のまゝでは、——何とかしてやらなければ、——妻に  
申訳がないと云う気持が、昂ことうじて来ていたのであつた。自分は自  
分を幸福だと感ずる半面に、自分のような老いぼれを夫に持った  
人の不幸を、だん／＼強く感じつゝあつたのだ。尤もつとも世には悲惨  
な運命に泣く女はいくらもあるので、そのくらいなことを一々ふ

憫びんがつていては際限がないけれども、これは普通の、ありふれた女ではないのである。左大臣はおろか、帝きていの后と云つてもよい程の容貌と品威に恵まれた人が、相手もあろうに無能力者の老翁はんりよの伴ばん侶となつたのである。自分は最初はその人の不幸を、努めて見えないふりをしていたのであつたが、その人のめでたさ、いみじさが、肝きもに銘じて分つて来るに従い、自分のようなものがこれだけの人を独占している罪の深さを、反省しないではいられなくなつた。自分は天下に自分ほどの仕合わせ者はないと思つていなければならない、妻の方では何と思つていられるであらう。自分がどんなにその人を大切にし、いつくしんだにしよう、妻は内心迷惑こそすれ、決して有難いとは感じていまい。妻は此方が何を問

うてもはつきり答えない人なので、お腹なかの中は知るよしもないが、ひよつとすると、此の老翁が早く死んでさえくれたらと、いつまでも長寿を保っている夫を恨み、その存在を呪のろっているのではなからうか。……………

……………自分はそれに気が付くにつれ、もし適当な相手があつて、此の気の毒な、いとしい人を、今の不幸な境涯から救い上げ、真に仕合わせにしてやる事が出来るのであるなら、進んでその人に彼女を譲つてやってもよい、いや、譲るべきが至当である、と思うようになったのであつた。どうせ自分の餘命はいくばくもないのであるから、晩おそかれ早かれ、彼女にそう云う運命が廻つて来ることであろうけれども、女の若さと美しさにも自らおのずか限りがある

ことを思えば、彼女のためには一日も早くそうなた方がよいのである。自分も彼女から死ぬのを待たれているくらいなら、今から死んだつもりになって、彼女の半生を明るくしてやりたい。恋しい人を此の世に遺<sup>のこ</sup>して死んだ人間が、草葉の蔭からその人の将来を絶えず見守つてやるように、自分は生きながら死んだと同じ心持になるのだ。そうしてやったら、彼女も始めて、此の老人の愛情がいかに献身的なものであつたかと云うことを、理解するであらう。その暁にこそ、彼女は此の老人に向つて無限の感謝と萬<sup>ば</sup>斛<sup>んこく</sup>の涙をそゞぐであらう。彼女は恰<sup>あた</sup>も、故人の墓に額<sup>ぬか</sup>ずくような気持で、あゝあの人は私のためにこんなに親切にしてくれた、ほんとうに可哀そうな老人であつたと、泣いて礼を云つてくれる

であろう。自分は何処か、彼女からは見えない所に身を隠して、餘所よそながら彼女のその涙を見、その声を聞いて餘生を送る。その方が、いとしい人から恨まれたり呪われたりして暮すよりは、自分としてもどんなに幸福であるか知れない。……

自分は昨夜、左大臣のあのしつっこい所作しぐさを見ているうちに、平素胸中にわだかまっていたそう云ういろ／＼なもや／＼が、酔いが発するのと共に次第に湧き上つて来るのを覚えた。いったい此の人が、そんなにも自分の妻に気があるのだろうか。もしそうならば、自分が日頃夢見ていたことが、或は実現あるされるかも知れない。自分が本気で、その計畫を実行に移すつもりなら、今こそ無二の機会であり、此の人こそその資格のある人物である。官位、

才能、容貌、年齢、あらゆる点から云つて、此の人こそ、自分の妻にふさわしい相手である。此の人ならば、ほんとうにあの人を幸福にしてやる事が出来るのである、と、自分はそう思ったのであつた。

自分の心にそう云う考が萌きざしていたところへ、左大臣があんな工合に積極的に出て来たので、自分は一も二もなかつた。自分の願と左大臣の念願とが図はからず合致したことに、自分はひどく感激した。一つには左大臣の恩に報い、一つにはいとしい人への罪のつぐないが出来ると思うと、自分は有頂天になつた。そして咄とつ嗟さにあゝ云う行動に出てしまった。……あの瞬間にも、お前はそんなことをしてよいのか、いくら恩返しをすると云つても、餘り

寛大過ぎはしないか、……：酔った勢で飛んだことをして、覚めてから地団じだん太踏たふむのではないか、……：お前が愛する人のために献身的になるのはよいが、果してお前はその後の孤独に堪えられるのか、と云う囁ささやきが聞えないでもなかつたのであるが、なに構うものか、後のことは後のことだ、善と信じて疑われないなら、酒の勢を借りてゞも断行すべきだ、生きながら死んだ人間になる覚悟をした者が、何で孤独こわが恐いものか、……：と、強しいて自ら危き懼ぐの念あざけを嘲あざけつて、とう／＼あの人の袂たもとの端はを、左大臣に執とらせてしまったのであつた。……：

国経は、昨夜の自分の行動がどう云う動機に基づいていたかを、今は詳細に突き止めることが出来るのであつたが、でもそのため

に少しでも心の憂鬱ゆううつが軽くなるのではなかった。彼はしずかに夜着の中に顔を埋めて、ひし／＼と迫る悔恨の情に身を委ねた。ゆだ

あゝ、己おれは何と云う軽卒なことをしたのか。……………いくら恩返しのためだからと云つて、恋しい妻を人に譲るなんと云う馬鹿をする者があるだろうか。……………こんなことが世間に知れたら、全く物笑いの種でしかない。……………左大臣だつて感謝するよりは舌を出して可笑しがつておられるだろう。あの人にしたつて、熱狂的な愛情から出た行動であることを理解しないで、却つて己の薄情を恨んでいるだろう。……………実際、左大臣のような人なら他にいくらでも美しい妻を求めることが出来るけれども、自分があの人を逸してしまつたら、二度と再びこんな所へ誰が来てくれよう。

それを考えたら、自分こそ最もあの人を必要としたのだ。自分は死んでもあの人を手放すべきではなかったのだ。……昨夜は一時の興奮に駆られて、孤独なんか恐くはないような気がしたけれども、今朝覚めてからの数時間でさえこんなに辛いのに、此れからずっと此の淋しさがつゞくとしたら、何として堪えて行けるであらう。……国経はそう思つた途端に、涙がほろ／＼とこぼれて来た。老いれば小児しょうにに復かえると云うが、八十翁の大納言は、子供が母を呼ぶように大きな声で泣き喚わめきたかつた。

## その六

妻を奪われた国経が、恋慕と絶望に苛さいまれつゝその後なお三年半の歳月を生きた間のことは、後段滋幹しげもとのくだりに於おいてやゝ詳細に触れる折がある。今は暫しばらく筆を転じて、あの夜あの車の中へ「物をこそ」の歌を投げ入れた平中へいじゅうの方へ叙述を移そう。平中も亦また、国経ほどではなかつたにしても、やゝそれに似た、或る後味のほろ苦いものを嘗なめさせられたのであつた。もとゝ此の事の起りは、去年の冬の或る夜、彼が本院の館しんこうに伺候した折、左大臣からあの北の方のことをいろゝゝ尋ねられたので、ついつかりと、好い氣になつておしやべりをしたのが始まりであることを思えば、彼は誰を恨むよりも、己おのれの浅慮せんりょを恨まねばならぬ。いったい彼は、「われこそは当代一の色事師いろごとしである」と己う

惚ぬぼれているところへ持つて来て、おつちよこちよいの癖があるの  
で、しば／＼時平に巧い工合におだてられて、泥を吐かされるの  
であるが、それにしても、もしあの当時時平があゝ云う暴挙に出  
るであらうことが豫想されたら、あんなおしやべりはしなかつた  
筈であつた。彼も、此の道にかけては油断のならない左大臣が、  
あの北の方のことを知つたら何かいたずらをしはしないか、と云  
う懸念けねんは抱いたけれども、自分のような官位の低い輕輩と違つて、  
まさかに朝廷の重臣である人が、そう軽々しく夜遊びに出かけ、  
他人の家に忍び込んで北の方の閨ねやへ這はい寄る、と云う訳にも行く  
まい、そこは一介の左兵衛佐すけの方が氣樂だと、そう思つて安心し  
ていたので、あんな工合に、衆人環視の中に於いて堂々と人妻を

浚さらつて行くような派手なことが可能であろうとは、全く考え及ば  
 なかったのであった。彼に云わせれば、妻は夫の眼を掠かすめ、夫は  
 妻の眼を掠かすめて、無理な首尾をし、危い瀬戸を渡り、こつそりと  
 切せつない逢う瀬を楽しむところにこそ恋の面白味は存するのである。  
 地位や権勢を利用して他人の所有物を強ごう奪だつするのでは、身みも蓋ふた  
 もない野暮やぼな話で、自慢にも何もなりはしない。左大臣のやり方  
 は、他人の面目や世間の掟おきてを踏にじみ躪ふつた傍ぼう若じやく無ぶ人じんな行為であ  
 るのみか、色道の方でも仲間の仁義を無視した仕方で、あれでは  
 色事師の資格はないと云うべきである。そう思うと平中は、何か  
 知ら不愉快なものが胸に残るのであった。女に好かれる男の常と  
 して、なまけ者ではあるけれども、洒しや脱だつで、のんきで、人あた

りがよくて、めったに物にこだわらない彼なのであるが、今度は例になく、時平のしたことが腹が立つてならなかった。

元来彼があゝの北の方に寄せていた感情は、前にも云うように通り一遍の色恋よりは深いものがあつたので、あの当時もしあゝのまゝで進んだならば、まだもつと関係が続いたかも知れないのに、彼にしては柄がらにもなくあゝの好人物の老犬納言に惻隱そくいんの情を催して、これ以上罪を重ねることが厭いとわしくなつたところから、努めて彼女のことを忘れるようにして、遠のいたのであつた。時平は勿論彼のそう云う胸中を知つていよう筈はないけれども、それにしても平中は、時平のためにその折角の心づかいを無駄にされてしまつたのである。平中は罪を重ねると云つても、たゞ内々で大納言

の妻である人と契り、とき／＼数時間逢つていたに過ぎないの  
 であるが、時平は大納言に僅かばかりの恩を売り、あの老人を前  
 後不覺に酔わしておいて、彼が命よりも大切にしているものを、  
 あつさりと自分の所有に移した。平中の場合と時平の場合と、老  
 人に取つて執方が餘計残酷であるかは言を俟たない。平中は今、  
 自分の過去の恋人がたま／＼彼の手の届かない貴人の許へ拉し去  
 られたと云うだけのことに、遣る方ない忿懣を感じているので  
 あるが、老大納言の災厄はなか／＼そんな生やさしいものではな  
 い。而もあの老人がそう云う災厄を蒙るに至つたのは、平中が  
 時平に詰まらぬおしやべりをしたからなのである。平中は、老人  
 を不幸に陥れた元兇は自分であり、老人は何もそのことを知

らずにいるのだと思うと、何と詫び言を云つてよいか分らないのであつた。

だが人間は身勝手なもので、平中にして見れば、自分よりは老人の方が比較にならぬほど気の毒なことは分つていながら、馬鹿を見たのは誰よりも自分であると云う気がして、ひどく忌ま／＼しいのであつた。それと云うのが、何分今云つたような事情もあつて疎遠になつたのであるから、もはやその人に興味を失つたとは云つても、実のところはまだ心底から忘れ去つていたのではなかつた。もつとはつきり云うならば、一往は忘れていたのだけれども、時平がその人に好奇心を抱いていることが明かになるや否や、意地悪くも一旦失いかけていた興味が、猛然と復活して来たので

あつた。彼は去年のあの晩以来、時平が急に伯父の大納言に接近し始め、しきりに歡心を求めるようになり出したのを、何となく不安な氣持で眺めながら、それにしてもどう云う積りつもであろうかと、密ひそかに時平の意図を疑い、事件のなりゆきに注意を怠らなかつたのであるが、恰あたかもその矢先に、あの饗宴の話が持ち上り、自分もそれに随行するように命ぜられたのであつた。

あの晩、平中は虫が知らすと云うのか、今に何かゞ起るのではないかと云う豫覺があつて、最初から憂鬱になつていた。彼は左大臣が自分を此の席に加えたことを、必ず訳がありそうに感じていたが、宴が始まると非常な速力で酒が進行し、左大臣や取巻き連中が寄つてたかつて老翁を酔わせるようにしたり、左大臣が一方

ではあの御簾みすの方へ頻々ひんびんと色目を使い、一方では平中を掴つかまえて変な皮肉を浴びせたりしたので、一層不安が募つつたのであつた。彼は時平が腕白小僧のように眼を光らして、泥酔した顔を火照ほてらし、喚わめき、唄い、笑うのを見ると、いよ／＼何か大きな危険が御簾の中の人の上に迫りつゝあるように思え、それにつれてだん／＼昔の愛情が、昔と同じ強さを以て蘇よみがえ生なまつて来るのを覺えた。

そして時平が簾れんちゆう中に闖ちんにゆう入した時は、座に堪えられず慌わづて、席を外したのであつたが、やがてその人が車に乗せられて連れて行かれようとするけはいに、又じつとしていられないで、車の際へ走り寄つて、夢中であの歌を投げ込んだのであつた。

その夜平中は、再び警固けいごの人数に加わつて車の跡に付き随い、左

大臣の邸まで供をして行つて、そこからひとりどぼくと深夜の街を家路に就いたが、その途々も、一步は一步毎ごとに恋しさが増して行つた。行列が本院の館やかたに着いて、その人が車から下りる時に、せめて一と眼逢えもしようかと願つていたのに、とうとうその望みも空しく終り、もはや永久に隔絶し去つたことを思うと、更にその人を愛惜あいせきする念が燃え上つて来るのであつた。自分はあの人をまだこんなにも恋していたのか、あの人へ寄せる熱情が、どうしてこんなにも消えずにいたのかと、彼は自分を訝あやしきまらずにはいられなかつたが、蓋しけだ平中の思慕の情は、夫人が彼の及び難い高根たかねの花になつたと云う事實に依つて、挑ちようはつ発はつされたところもあろう。つまり夫人が老大納言の北の方であるうちは、いつでも

自分の欲する時に撚よりを戻すことが出来たのに、今やそのことが不可能になったので、そのための口惜おもしさが重おもな原因であつたのだと、云えなくもあるまい。

ちな因みに云うが、前掲の平中の「物をこそ」の歌は、古今集には読よみびと

人しらずとして載つており、「物をこそいはねの松の」が「思ひ出づるときはの山の」となっている。又十訓抄じっしんしょうは此の歌の作者を国経としているが、その文に曰いわく、

時平公はすべておごれる人にておはしけるにや、御をぢの国経大納言の室しつは在原棟梁ありわらむねやなの女なりけるを、たばかりとりて我が北の方にし給ひけり、敦忠卿の母なり、国経卿歎き給ひけれども、世のきこえにはゞかりてちから及ばざりけり

思ひ出づるときはの山の岩つゝじ

いはねばこそあれ恋しきものを

此の歌は、国経卿その比こころよみ給ひけるとぞ

と。なるほど、歌としては「物をこそ」より「思ひ出づる」の方

が格調が高いように感じられるし、又これを国経老人が詠んだと

云う風に考えて見るのも哀れが深いせんぎだが、そう云う詮議立ては此の

小説の埒らちがい外であるから、今は孰方どちらでもよいとしておこう。たゞ、

こゝにもある通り、時平は夫人在原氏をたばかり取る目的で連れ

去つたのであるから、もちろん明るる朝になつても大納言の所へ

返して寄越しはしなかつた。それどころか、豫あらかじめしつらえて置い

た寢殿の奥の一と間に住まわせて寵ちようあい愛したので、翌年には早

くも後の中納言敦忠である男子を生むに至り、遂には世人も此の夫人を貴んで「本院の北の方」と呼ぶようになった。気の弱い国経はそんな有様を見ながらどうすることも出来ず、今昔物語の叙述に従えば、「妬ねたく悔しく悲しく恋しく、人目には我が心としたる事のやうに思はせて、心のうちにはわりなく恋しく」思いつゝ遣やる瀬せない日を送つたのであるが、平中はなおあきらめ切れず、大胆にも今は左大臣の妻である人に、隙ひそがあつたら密かに云い寄ろうとしたのであつた。後撰集ごせんしゅう卷十一恋三の部に、「大納言国経あそん朝臣あそんの家に侍りける女はべに、いと忍びて語らひ侍りて行末ちぎまで契りける比こころ、此の女俄かに贈太政大臣（時平）に迎へられて渡り侍りにければ、文だにも通はず方なくなりにければ、かの女の子の

五つばかりなる、本院の西の対たいに遊びあり歩あきけるを呼び寄せて、母に見せ奉れとて腕かひなに書きつけ侍りける。平たひら定のさだ文ぶみ」として、

昔せしわがかねごとの悲しきは

いかに契りし名残なごりなるらん

と云う歌が載っているのは、その何よりの證據であるが、この歌のあとに又、「返し、読人しらず」として次のような歌が見えるのは注目に値する。——

うつゝにて誰ちぎりけん定めなき

夢路にまよふ我は我かは

時平は国経や平中とのいきさつがあるので、新夫人の身边を油断なく見張らせ、めったな人は寄せつけぬように用心したであろう

ことは想像に難くないのであるが、平中はいかにかして警戒の目をくゞり、幼童を手馴ずけて歌の取次をさせることには成功したのである。此の幼童と云うのは、十訓抄には「かの女の若君の、とし五つばかりなるが」とあり、世継物語にも「若君のかひなに書いて」とあつて、夫人在原氏と国経との間に生れた男の子、後の少将滋幹しげもとのことなのであるが、蓋しけだ此の児だけは、母なる人が本院の館へ連れ去られた後も、乳人めのとなどに伴われて自由に出入りすることを許されていたか、又は大目に見て貰っていたのであつた。如才じよさいのない平中はかねてからそれに眼をつけ、巧く此の児に取入つていて、或る日此の児が本院の館へ来、母が住んでいゝる寝殿の、西の対屋たいのやで遊んでいゝるところへ行き通わして、すか

さず取次を頼んだのであろう。それにつけても、彼が何とかしてその人に近づこうと思ひ、暇があれば此のあたりをうろくしていた情況が察しられるが、少年の腕に歌を書いたとは、急の場合で紙などの持ち合わせがなかったのか、紙では却つて落ち散る恐れがあつたからであらうか。北の方は、我が子の腕に書いてある昔の男の歌を読んで、ひどく泣いたが、やがてその文字を拭い取つて、「うつゝにて」の返歌を、同じように腕に書き記し、「これをその方にお見せ」と云つて我が子突き遣ると、自分は慌てあわて、きちよう几帳のかげに身を隠した。

今を時めく左大臣の北の方に、こんな工合にして平中が取次を頼んだのは一度や二度ではなかつたと見えて、大和物語には又別な

歌が伝わっている。——

ゆくすゑの宿世すくせも知らず我がむかし

契りしことはおもほゆや君

北の方はこれにも返歌を与えたらしいのであるが、生憎あいにくその歌は残っていない。が、文を通わすことは出来ても逢うことは許されなかつたので、さしもの平中も次第に望みを失つて匙さじをなげたらしく、やがて此の夫人との関係は果敢はかない終りを告げたのであつたが、そうなると自然、此の好色漢の心は、再び嘗かつてのもう一人の恋人、あの侍従の君の方へと傾いて行つた。それと云うのが、此の人も左大臣家の女房として、同じ本院の館のうちにいるのであるから、夫人の方が脈がないと極きまれれば、平中としては手ぶら

ですごく引込む気になれず、もとく嫌きらいでも何でもなかつた此の人を、せめて此の際物にしなければ自分の男が廃すたつてしまうように、恐らくは考えたことでもあろう。しかし意地の悪いことにかけては一と通りでない侍従の君が、今となつては尚更おいそれと平中に靡なびく筈はなかつた。もし平中があの時翻弄ひんりやうされながらも一途いちぢずに熱意を失わないで追い廻したら、結局試験に及第したところになつて、許されたのに違ひないのであるが、途中で脇道そへ外れたゝめに、相手はすっかり機嫌を損じて一層旋毛つむじを曲げてしまひ、もう何を云つて来ても鼻であしらつて、てんで取り上げないのであつた。

一人の恋人は他人に奪われ、もう一人の恋人には手きびしくはね

つけられた平中が、色事師いろごとしの面目にかけてもと、必死になつて侍従の君に泣きを入れたいきさつは、煩わしいので茲こゝに詳述するのを避けよう。読者は世にも自尊心の高い、男を憫じらすことに特別な興味を抱く侍従の君が、再び前と同じような、或は前よりも何層倍か苛酷かこくな試練を平中に課したのであるうことを、そして平中が、今度は実に辛抱強く一つ一つの試練に堪えて、兎とにも角かくにも彼女の誇りを満足させ、許しを得る迄に漕こぎ着けたやゝこしい経路を、宜しく想像すべきである。が、漸く平中も思いを遂げて、長い間のあこがれの的であつた人と逢う瀬を楽しむ境きよう涯がいになつたものゝ、それから後も皮肉屋の女の癖は改まらず、やゝもすれば意想外な悪戯いたずらを考え出して嬲なぶりものにし、目的を果たさず

に帰って行く男のあとから舌を出したり、べかこうをしたりすることが、三度に一度ぐらひは必ずあるので、平中もしまいには業ごうを煮やして、糞くそ、忌ま／＼しい、いつ迄馬鹿にされているのだ、こんな女を思い切れないなんてことがあるものかと、何度か決心をしては、何度か誘惑に負ける、と云うようなことを繰り返していたのであつたが、あの今こんじやく昔物語や宇治拾遺物語に出ている有名な逸話は、多分その頃の出来事だったのであろう。聞くところに依れば、此の逸話は故芥川龍之介氏の著書にも紹介されているそうであるから、読者の多くは既に知っておられるであろうが、それを読まない人々のために、今その大要を物語ることにしよう。さて平中は、何とかして侍従の君のアラを捜し出してやりたい、

いくらあの女が非の打ちどころのない美婦人であるからと云つて、結局は普通の人間に過ぎないのだと云う證據を見たら、これほどに迷い込んだ夢もさめて、愛憎あいそを盡つかすことが出来るであろう、と、そう思つた末に考えついたのは、あのようなみめうるわしい女であつても、その体から排泄はいせつするものは、われ／＼と同じ汚物ぶつであろう、ついでには何とかしてあの女のお虎子まるを盗み出し、中にしてあるものを見届けてやりたい、そうしたら己も、あんな顔をしてこんなむさい物を出すかと思つて、一遍に厭氣いやげがさすであろう、と云うことであつた。

ついでながら、筆者はその時分のお虎子まるがどんなものであつたかを知らない。今昔にはたゞ「筥はこ」と云つてあるが、宇治拾遺には

「かはご」とあるので、皮で造った筥が普通だったのであろうか。何にしてもそう云う地位の女房たちは、筥の中に用を足して、それを時々召使の女に捨てに行かしたのであった。で、平中が例の局つぼねのあたりへ行つて物蔭にひそみながら、筥の始末をする召使の出て来るのを待っていると、或る日、年の頃十七八の、可愛らしい姿形をした、髪あこめの長さは袖たけの丈に二三寸足りない程なのが、瞿なでしこ麦重こねの薄物の袖を着、濃はい袴かまをしどけなく引き上げて、問題の筥を香染めの布に包み、紅いろがみい色紙いろがみに絵を書いた扇でさし隠しながら出て来たので、こっそり跡をつけて行つて、人目のない所へ来た時、不意に駈かけ寄つて筥に手をかけた。

「あれ！ 何なさいますの」

「ちよつと！　ちよつと此れを……………」

「あれ！　此れはあなた……………」

「いゝんだよ、分つてるよ！　ちよつと寄越し給え」

女が呆あきれている隙に、平中はすばやく筥を奪い取つて一目散に走り去つた。

後生大事にその品物を袂のかけに抱えながら、我が家へ逃げ帰つた平中は、一と間のうちに閉じ籠つてあたりに誰もいないのを確かめてから、先ずそれを恭うやしく座敷にすえて、とみこうみした。

これが自分の深くも心を打ち込んだ人の物を入れてある容器かと思つと、直ぐには蓋ふたを開けるのが惜しい気がして、なおよく見ると、普通にあるような皮籠かわごではなくて、金色の漆うるしの塗つてある立

派な筈であつた。彼は改めてそれを手に取り、上げて見たり、下げて見たり、廻して見たり、中の重みを測つて見たりしていたが、やがて恐るゝ蓋を除けると、丁子の香に似た馥郁たる匂が鼻を撲つた。不思議に思つて中を覗くと、香の色をした液体が半分ばかり澱んでゐる底の方に、親指ぐらいの太さの二三寸の長さの黒っぽい黄色い固形物が、三きれほど圓くかたまつていた。が、何しろそう云うものらしくない世にもかぐわしい匂がするので、試みに木の端きれに突き刺して、鼻の先に持つて来て見ると、あの黒方と云う薰物、——沈と、丁子と、甲香と、白檀と、麝香とを煉り合わせて作つた香の匂にそっくりなのであつた。

「中を突き刺して鼻にあて、嗅げば、えも云はず馥<sup>かぐは</sup>しき黒方の香にてあり、すべて心も及ばず、これは世の人にあらぬなりけりと思ひて、これを見るにつけても、いかで此の人に馴<sup>な</sup>れ睦<sup>むつ</sup>びんと思ふ心狂ふやうにつきぬ」とは今昔の描写であるが、要するに、たゞの人間に過ぎないと云う證據を見てあきらめようとしてかゝつたのが、却つて反対の結果を生み、なか／＼愛憎を盡かすどころではなかつたのであつた。でも平中は、あまり不思議でたまらないので、その筈を引き寄せて、中にある液体を少し啜<sup>す</sup>つて見た。と、やはり非常に濃い丁子の匂がした。平中は又、棒ぎれに突き刺したものをちよつぴり舌に載せて見ると、苦い甘い味がした。で、よく／＼舌で味わいながら考えると、尿<sup>によう</sup>のように見えた液体は、

丁子を煮出した汁であるらしく、糞のように見えた固形物は、野と  
ころ老やあわせ合たきもの薰物をあますら甘葛の汁で煉り固めて、大きな筆のつかに入れ  
 て押し出したものらしいのであつたが、しかしそうと分つてみて  
 も、いみじくも此方の心を見抜いてお虎子まるにこれだけの趣向を凝こ  
 らし、男を悩殺するようなことをたく工むとは、何と云う機智に長けた  
 た女か、矢張やはり彼女は尋常の人ではあり得ない、と云う風に思えて、  
 いよくあきら諦めがつきにくく、恋しさはまさるのみであつた。  
 人間の運は、一遍悪い方へ曲り始めると何処まで曲るか分らない  
 もので、さすがの平中も、侍従の君のお虎子まるの匂を嗅いでからと  
 云うものは、何処へ行つても色事が成功せず、こと悉く失敗つゞきで  
 あつた。まして侍従の君はますくきようまん驕慢に、残酷になり、彼

が熱を上げれば上げるほど冷かな仕打をし、もう少しと云う所へ来ては突つ放すので、可哀そうな平中は、とう／＼それが原因で病氣になり、悩み死に、死んでしまった。——「いかで此の人に逢はで止みなんと思ひ迷ひける程に、平中病み付きにけり、さて悩みける程に死に、けり」と、今昔物語ではそうなっているのである。尤も、こゝに一つ書き洩らしてならないことは、十訓抄に依ると、侍従の君は本来平中の女であつたのを、これも時平が邪魔をして横取りをした、と云うことになっている。そこで筆者が想像するのに、もと／＼此の婦人は本院の館に仕えていた女房なのであるから、恐らくは早くから時平が手を着けていなかつた筈はなく、平中はそれを知らずにか、或は知りつゝか、三角關係

を結んだのであろう。されば、お虎子まるの一件を始めとして侍従の君の彼に対するさま／＼な悪戯の数々は、ひよつとすると背後で此の女を操っていた左大臣の入れ智慧ちえであつたかも知れない。そうだとすれば、平中を殺したのは時平であると云うことにもなる。

## その七

筆者は前に、平へいしゅう中の歿年は延長元年とも六年とも云われていて、確かでないと言ふことを記した。今、侍従の君のことが原因で病死したと云う今こんじやく昔の記事に従えば、何となく平中の方が

時平しへいより先に死んだような感じを受けるが、前掲の後撰集の詞ことば

書がきなどを読むと、矢張平中は後まで生きていたのであるうか。

だがまあそれも執方でもよいとして、北の方奪取事件があつてから四五年の後、延喜えんぎ九年四月四日に、時平が三十九歳の若さを以もつて卒そつきよ去したことははつきりしている。

此の左大臣が有為ゆういの材を抱いて早死はやじにをしたのは、積る悪業の報いであるように当時の人々は見たのであるが、就なかんずく中ちゆうその報い

の最たるものは、菅公かんこうの怨おんりよう靈たまの祟りたまたであるとされたのであ

つた。これより先、菅公が筑紫の配所で薨こうじたのは延喜三年二月

二十五日であるが、同六年の七月二日には、時平と共に菅公さんそ讒ざん

奏うの謀議に加わつた右大将大納言定国が四十一歳を以て卒しゆつし、

同八年十月七日には、これも時平の一味であつた参議式部大輔菅根が五十三歳を以て卒した。而も菅根の場合は、雷神と化した菅公の靈に蹴殺されたことになつてゐるが、菅公が雷になつて生前の怨みうらみを報じたと云う怪異談のうち、時平とその一族に係のあつた部分を、以下に少しく述べて見よう。

菅公の靈が始めて姿を現したのは、こうきよ薨去の年の夏、或る月の明かな夜、ごころう五更が過ぎて天がまだ全く明けきらない頃、えんりやくじ延暦寺第十三世の座主ざす法性房ほつしやうぼう尊意そんいが四明が嶽の頂に於いてさんみつ三密の觀想を凝こらしている時であつた。中門のあたりと覺おぼしい所にほとくと戸を叩たく者があるので、開けて見ると、亡くなつた筈の菅丞相たゝずがゐんでいた。尊意は胸騒ぎを隠しながら、うやく恭しく持佛堂に

請しょうじ入れて、深夜の御光臨は何御用にて候そうろうや哉と問うと、丞相  
 の靈が答えて、自分は口惜しくも濁じよくせ世に生れ合わせて無実の讒  
 奏を蒙こうむり、左遷流罪させんるざいの身となつたについては、その怨みを報ぜん  
 ために雷神となつて都の空を翔あまがけり、鳳闕ほうけつに近づき奉らうと思つ  
 ている、此の事は既に梵ぼんてん天、四王、閻魔えんま、帝たい釈しやく、五道冥みよう  
 官かん、司令、司録等の許しを得ているので、誰に憚はづかるところもな  
 いのだが、たゞ貴僧は法ほうげん験がめでたくなつたので、貴僧の  
 法ほうりき力で抑えられるのが一番恐ろしい、何卒年来の師壇ちぎの契ちぎりを  
 思つて、たといその折朝廷からお召しがあつても、お請うけになら  
 ないように願ねがひたい、自分は此のことを申上げたいと存じて、只  
 今態々わざわざ筑紫から参つたのです、と云うのであつた。

そこで尊意は、おん歎きの次第は御尤もであるけれども、古えよいにしり賢人が小人のために禍を蒙った例は珍しからず、貴下御一人に限った運命ではないのであるし、凡そ世の中は無道なものなのであるから、左様にお恨みなさるのは浅ましゆう存ずる、どうかそのようなお考は思い止って戴きたい、だが、そう云つても貴下と愚僧とは年来のよしみも深いことなので、折角のお頼みとあるなら、たとい眼まなこを抜かれてもお言葉に従つて、宣旨せんじを御請けしないことに致しましょう、但し天下は皆王土であり、愚僧も王民の一人である上は、もしお召しの宣旨が数度に及んだら、二度まではお断り申上げるけれども、三度目にはお請けしなければなりませんまい、と、そう答えると、丞相の霊たちまが忽ち顔色を変じて凄じすさまい形ぎ

ようそう

相のどになつた。尊意が、咽喉かわが渴かいておいでしようと思つて

柘榴ざくろをすゝめたのを、丞相は取つて口に啣ふくんでひしひしと噛かみ砕

き、妻戸のふちに吐きかけたかと思つと、見るく一条の火焰と

なつて燃え上つたが、尊意が灑水しやすいの印いんを結ぶと、たちどころに

その火が消えた。

それから間もなく洛中らくちゆうの空に黒雲が蔽おひ廣ひろがつて大雷雨が襲

来し、風を起し雹ひようを降らして、宮中の此処こゝ彼処かしこに落雷した。満廷

の朝臣たちが戦おのき恐れ、或は板敷の下に這はい入り、或は唐櫃からびつの

底に隠れ、或は畳かを担いで泣き、或は普門品ふもんほんを誦ずしなどする中

で、時平がひとり毅然きぜんとして剣を抜き放ち、空に向つて雷霆らいていを

叱咤しったしたのは此の時の話であるが、その後風雨がなお止まず、遂

に鴨川の洪水こうずいを見るに至つた。法性房尊意も宣旨が三度に及んだので、已むやを得ず参内して、法力を以て雷電を取り鎮め、帝のおん悩みを除いたのであつたが、その時尊意の乗つた車が鴨川の浜にさしかゝると、水が自然に退ひいて車を通した。又宮中に於いて尊意が加持祈祷かじきとうしている時、帝は夢に不動明王ふどうみやうおうが火焰の中で声を厲はげまして呪文じゆもんを唱えていると見給い、おん眼がさめて御覧になると、それは尊意の誑どきよう経きやうの声であつたと云う。

しかし尊意の法力も度重なつては効を奏さなかつたのか、その後五年を経へ、八年の十月には菅根朝臣が電撃を受けて震死した。時平は九年の三月頃から何となく所労の気味で床についたが、菅丞相の怨霊がしばく枕頭ちんとうに現れて呪いの言葉を洩らすので、陰お

んみようじ

陽師や医師を招いて、さま／＼の祈祷、療治、灸治等をし

て見るけれども一向に利き目がなく、今はたゞ死を待つばかりの

状態となった。一家一門の悲歎やる方なく、此の上は高德の聖を

聘してその法力に継ろうと云うことになったが、それには当時天

下にその名が著聞していた浄蔵法師を措いて他になかった。此の

浄蔵と云う僧は、昌泰三年の昔、菅公がまだ右大臣として時平と

昇進を競っていた頃、「離朱の明も 暁 上の塵を視る能はず、

仲尼の智も 篋 中の物を知る能はず云々」の句のある一書を

菅公に呈して、明年必ず公に禍の及ぶであろうことを告げ、早く

官を退いて保身の術を講ずべきことを諷した文章博士三善清

行の第八子で、母は弘仁天皇の孫女であった。幼にして聡敏比

なく、四歳にして千字文せんじもんを読み、七歳にして出家せんことを求めたが、十二歳の時宇多上皇に見出されて、上皇の法の弟子となつた。その後上皇は勅して彼を叡山えいざんに上らせて登壇受戒せしめ給い、玄昭律師に附して密教を学ばしめ給うたが、生来多才多藝の人で、顕密けんみつの両宗は勿論もちろんのこと、十種に餘る学問技術を身につけていたと云われ、医道、天文、悉曇しつたん、相人そうにん、管絃、文章、卜筮ぼくぜい、占相、舟師、絵師、驗者げんざ、持経者等々の道に練達して、音曲おんぎよくなどの諸藝にかけても肩を並べる人がなかつたと云われる。左大臣家では此の淨藏を懇請したので、淨藏が行つてみると、既に時平の面上に死相が現れているので、もはや定じょうご業うは免れ難く、たといいかよの術を施しても萬死に一生を得

ることはむずかしい旨を申したのであったが、病人も、附き添う  
 家族の人々も、頻りに乞うて止まないの、辞するに由なく、兎  
 も角も加持祈祷に努めた。折柄浄蔵の父の清行も見舞いに行つて  
 枕頭に坐していたが、浄蔵が一心に祈りつゞけると、病人の左右  
 の耳から青龍が出て口より火焰を吐き、清行に向つて云うのに、  
 自分は生前尊閣の諷諫を用いなかつたゝめに左遷の憂き目を見、  
 筑紫の空に流寓して果敢ない最後を遂げたのであるが、今、梵  
 天帝釈の許しを得、雷となつて自分に辛かつた人々に怨み  
 を報じようとしているのに、尊閣の息浄蔵が法力を以て妨げをな  
 し、自分を降伏させようとするのは心外である、尊閣願わくは浄  
 蔵法師を制せられよ、と云うのであった。清行はそれを聞いて恐

れかしこ畏み、浄蔵に命じて直ちに祈祷を中止せしめたが、浄蔵が病室を退去するや、須臾しゆゆにして時平は事切こときれてしまった。

宇多上皇は、上皇の法の弟子である浄蔵が左大臣の邸に於いて最後まで加持祈祷の勤めをせず、途中で退出したことを聞きこ召しめされ、大いに御気色みけしきを損みぜられたので、浄蔵は深く勅ちよつかん勘かんの身を慎つしみ、三箇年よかわの間横川よかわの首楞嚴院しゆりようごんいんに籠居ろうきよして修練苦行の日を送つたと云うが、世間一般の人々は、時平がそう云う死に方をしたことを当然のように考えて、あまり同情する者はなかつた。而も報いは時平一人に止まらず、長く子孫にまで及んだのであつて、彼の三人の子息のうち、長男の八条大将保忠は、承平六年七月十四日に四十七歳を以て歿し、三男の中納言敦忠、——あの新夫

人在原氏が生んだ晩年の子は、天<sup>てんぎよう</sup>慶六年三月七日に三十八歳を以て歿した。尤も保忠の歿年は四十七歳と云うのであるから、その頃として若死とは云えないかも知れないが、事實は菅公のたゞりを氣に病む餘り病氣に取り憑<sup>つ</sup>かれ、枕<sup>まくらもと</sup>許に験者を招いて薬師經を読み上げさせていたところ、經の中に宮毘羅大将と云う文句があつたのを、「汝を縊<sup>くび</sup>る」と聞き違えて悶<sup>もんぜつ</sup>絶し、それきりになつてしまつたと云うので、矢張尋常の死に方ではなかつた。そのほか、宇多天皇の女御<sup>にようご</sup>に上つて京極御息所<sup>きやうごくのみやすどころ</sup>と云われた女子があつたが、これも短命を以て終り、他の一人の女子仁善子と醍醐<sup>だいご</sup>天皇の皇太子保明親王との間に生れた康頼王は、時平の外孫に当り、保明親王の薨去後に皇太子に立つたが、これも延長

三年六月十八日に、僅わすか五歳を以て薨こうじた。たゞ二男の富小路右大臣顯忠が、康保二年四月廿四日を以て六十八歳で歿したのは例外であるが、此の人は心がけのよい人で、平へい生せい菅公の靈を畏おそれ敬い、毎夜庭に出て天神てんじんを拝した。又身を持じすること謹厳で、儉約を旨とし、大臣の位に六年の間いたけれども、家にあつても、外にあつても、大臣の作法を振舞わず、外出の時は前驅を具して行くことはめつたになく、車ぞいにも四人の供は召連れず、いつも車の尻の方に乗った。食事をするにも贅ぜいたく沢うな器うつわを用いず、土か器わらけに盛つて、台などもなしに、折敷おしきに載せて直じかに畳の上に置いた。手水ちようずを使うにも半挿はんそう盥だらひを用うることはなく、寢殿ひがくしの間に棚を作らせて、小桶に小さい柄杓ひしやくをつけておき、

毎朝仕丁じちようがそれに湯を入れるだけで、手を洗う時は自ら水をか  
 けに行くようにし、人手を煩わづらわすことはなかつた。そう云う人であ  
 ったから、右大臣にまで昇進し、後に正二位を贈られたのであ  
 るが、此の大臣の孫たちのうちで、三井寺の心誉、興福寺の扶公  
 等、佛門に入った者は恙つがなきことを得て、大僧都だいそうずや権僧正ごんそうじよう  
 の地位に至つた。僧になつた者は、此の外にも敦忠中納言の子右  
 兵衛佐理すけまさ、その子の岩倉の菩提房文慶等があり、これらは執いざ  
 れも佛道に帰依きえしたお蔭で禍を免れることが出来たのであるが、  
 結局昭宣公の長男たる時平の後裔ごうえいは榮えずにしまつて、四男の  
 忠平が、後に従一位摂政関白太政大臣になつたのみならず、その  
 一門は皆出世して顯要けんようの職に就ついた。それは菅公が左遷の時、

右大弁であつた忠平は密かに菅公に同情して兄に与せず、その後も絶えず配所へ消息を通わして、慇懃を結んでいたからであると云われる。

時平の三男の敦忠は、三十六歌仙の一人であつて、本院中納言とも、枇杷中納言とも、又土御門中納言とも云われ、百人一首の、「あひ見ての後の心にくらぶれば」の作者として知られているが、「此の権中納言は本院の大臣の在原の北の方の腹に生まれ給へる子也、年は四十ばかりにて形有様美麗になんありける、人柄もよかりければ世のおぼえも花やかにて」と今昔物語も書いているように、時平とは違つて、優しい、人好きのする人物であり、一面には母方の曾祖父業平の血を引いた、多感で情熱に富む詩人でも

あつた。但し百人一首いつせきわ一夕話に、夫人在原氏は国経の館から時平に拉らっし去られる時に、既に敦忠を懐妊していた、されば敦忠はまことは国経の胤たねであるが、夫人が本院へ移つてから生れたゝめに、時平の子として育てられたのであると云う記事が見える。そうだとすれば、敦忠は少将滋幹の実弟になる訳であるが、一夕話の記事は何に基づいているものか、筆者はその出所を詳つまびらかにしなけれども、或は当時世上にそう云う風説もあつたのであろうか。此の敦忠が天慶六年に早世そうせいしてからは、禁中で管絃の御遊ぎょゆうがある時は博雅三位がなくてはならない人になり、三位に差支えがあるとその日の御遊を中止し給うようになったが、故老たちはそれを聞いて、今は世が末で管絃の名手もいなくなった、敦忠中納

言が存生中は、博雅三位が左様に重んぜられることはなかつたのに、と云つて歎いたと云う。此の一事を以ても、敦忠の死が人々に惜しまれたこと、又敦忠が和歌ばかりでなく、管絃の道にも秀ひいでゝいたことが偲しのばれるのである。

参議藤原玄はるかみ上の女子で、皇太子保明親王の御息所みやすどころに上つた人

があつたが、敦忠がまだ左近少将であつた時分に、お二人の間の

後きぬ朝の使を勤めさせられたものであつた。そんな縁故ちぎから、

そのうち親王がおかくなると、御息所は敦忠と契ちぎるようになり、敦忠は限りもなく此のお方をいとしい人に思つたのであつたが、或る時、「わたくしの一族は皆短命でございますから、私もそう長いことはございませぬ。わたくしが死にましたら、あな

たはあの文範ふんのりのものになられまずでしよう」と云ったことがあつた。文範と云うのは民部卿播磨守で、敦忠の家の家司けいしをしている男だつたので、御息所が、「まあ、そんなことがあるものですか」と云われると、「いゝえ、きつとそうなります、私は空から見ておりますよ」と敦忠は云つたが、果してその豫言の通りになつた。時平の子たちや孫たちが天神たの崇りと云うことを神経に痛んで、始終安き心地もなかつたことは、保忠の例を見ても察しられるが、敦忠も亦また、自分が到底長生きの出来ない運命を担になつてゐることを知り、ひそかに諦めていたのであつた。

前記の御息所の外に、敦忠にはなお数人の思い人があつた。今、敦忠集を見ると、その大部分は恋歌であつて、中にも齋さいくう宮雅子

内親王との贈答が多く、此のおん方とは随分長く契り交していたことが想像されるが、後撰集卷十三恋五の部には、宮が齋宮にならせられて伊勢へお下りになった時の敦忠の歌が、次のような詞書と共に載っている。――

西四条の前齋宮よさきのまだみこにもものし給ひし時心ざしありて思ふこと侍りける間に、齋宮に走り給ひにければ、その明くる朝あしをかきに榊の枝につけてさしおかせ侍りける

伊勢の海の千尋ちひろの浜に拾ふとも

今は何てふかひかあるべき

又、小野宮左大臣実頼の女子で、彼が「みくしげ殿の別当」と呼んでいる人を、久しく恋いわたりながらなか／＼逢うことが出来

ないので、或る年の師走しわすの晦日つごもりに、

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに

今年もけふに果てぬとか聞く

と書いて送ったが、父の左大臣が事情を嗅かぎつけていよく逢わせないようにしたので、又次のように書いて送った。

いかにしてかく思ふてふことをだに

人づてならで君に語らん

季すえなわ繩なわの少将の女子の右近うこんと云う人とも、此の女がまだ宮中に奉

公をしていた頃に云い交したことがあったが、後に宮仕えを止めて里へ帰つてからは、ふつつり訪ねても来ないようになったので、女の方から、

忘れじと頼めし人はありときく

いひしことの葉いづちいにけん

と云つてやると、矢張何とも返事はしないで、雉子きじを贈つてよこしたので、女が重ねて云つてやった。——

栗駒の山に朝たつ雉子よりも

かりにあはじと思ひしものを

此の外に、長男の助信の母に当る人で、参議みなもとのひとし源等のの女子

もいるが、なお敦忠集に、「はじめの北の方」と呼ばれている女や、「すけまさの母君」と呼ばれている女が見えるのは、前記の女たちの中の人々か別の人々かよく分らない。「すけまさ」と云うのは二男の佐理のことであるが、これはあの行成こうせいや道風とうふうと

並び称せられた能書家の佐理とは違う。敦忠集に依ると、佐理の母は佐理を生んで死去したので、子は小母のところに預けられて、「あづま」と云う幼名で呼ばれていたが、あづまが二つになった時に敦忠がその子を見に行つて、たいそう泣いて、下のような歌を詠んだ。——

むつごともまだいひ出でゝ別れにし

人のかたみはあづまなりけり

此のあづまの佐理が後に出家をしたことは、前に記した通りである。

## その八

平中、時平、及びその子孫たちの後日譚はあらまじ以上の

如くであるが、あの可哀そうな老大納言と、彼が夫人在原氏の腹に儲けた子の滋幹は、その後どうなったことであらうか。

国経には滋幹の外に三人の男子があつて、尊卑分脈所載の

順序に従えば、長男が滋幹、次男が世光、三男が忠幹、四男が保

命となつてゐる。此のうち、忠幹の母は在原氏ではなく、伊豫守

未並と云う者の女子としてあつて、此の後裔は後まで長くつゞ

いたらしいが、世光と保命には後がなく、且その母は誰であると

も記してない。しかし滋幹は、あの事件の時に五歳ぐらいであつ

たとすれば、老大納言が七十二三歳頃の子でなければならぬが、

それ以後国経は八十一歳で死ぬ迄の間に、更に三人もの子を生ませたり、他の婦人と契ちぎつたりしたのであるうか。それとも尊卑分脈所載の順序は出鱈目でたらめで、世光以下三人の男子は滋幹より前か、同時ぐらいに生れた庶子しよしでもあるのだろうか。そう云えば国経は、五十歳も年の違う在原氏を妻にする前には、誰かを妻にしていたのであるうか、その人には子がなかつたのであるうか。それらのいろ／＼な不審については、今は何事をも明かにする手が、りがない。なお、滋幹は、尊卑分脈に従五位上左近少将と肩書がしてあつて、亮明、正明、忠明と云う三人の男子を儲けたことになつてゐるが、此の子供たちの母も誰であるか分らず、且三人ながら跡が絶えていて、子孫がない。それに滋幹の名は、公卿くぎようふに補

任等には全く見えていないので、彼がいつ従五位になり、いつ左近少将になったのかは明かでなく、生年月日や歿年等も知るよしが無い。尊卑分脈以外のもので滋幹に關した記事を拾えば、大和物語に、

しげもとの少將に、女、

恋しさに死ぬる命を思ひいで、

とふ人あらばなしとこたへよ

少將かへし

骸からにだに我きたりてへ露の身の

消えばともにと契りおきてき

と云うのが見え、後撰集卷十一恋三の部に、藤原滋幹として、

宵に女にあひて必ず後にあはんとちかごとをたてさせてあした  
つかはに遣しける

ちはやぶる千早振神ひきかけて誓ひてし

こともゆゝしくあらがふなゆめ

と云うのが見えるのが、普通に知られているのであるが、此のほかに、餘り世間に読まれていないものに、しゅうこかくぶんこ 迺古閣文庫所蔵の写本の滋幹の日記がある。これは残ざんけつ缺で、迺古閣本以外にも写本が二三あるようだけれども、何処にも完本は伝わっておらず、大體に於いて天慶五年の春頃から以後七八年の間にわた互つて、折々書き継がれたらしく思われるものが、部分的に残っているだけであるが、その内容は、ほん殆ど全部が母を恋い慕う文字で埋まっている

のである。

ところで、滋幹の生母は即ち敦忠の生母であることは読者も御承知の通りであるが、此の母はいつ頃まで生きていたのであろうか。われ／＼は拾遺集しゅういしゅう卷五賀の部所載源公忠の、「萬代よろづよもなほこそあかね」の歌の詞書に依つて、権中納言敦忠が母のために賀筵えんを設けたことがあるのを知り、その賀は多分五十の賀であろうことを推定するのであるが、滋幹の日記を見ると、敦忠の死んだ明くる年、天慶七年にもまだ此の母はながらえていたのであつて、それは実に、彼女の第二の夫であつた贈太政大臣時平の死後三十五年の星霜せいそうを経て、彼女は当時六十歳前後、滋幹は四十四五歳に達していたであらう。滋幹がそう云う齡になつてもなお、母

のことが忘れられず、折にふれては面影を想い浮かべてなつかしがっていたと云うのには、尤もな理由が存するのであつて、昔、あの事件のあつた当座、五つ六つの幼童の頃にこそ彼も本院の館へ出入りすることを許されていたものゝ、七八歳になつた頃から早くもさま／＼な浮世の掟おきてに制せられてそうも行かなくなつたらしく、その後ずつと、母が健在であることは聞き及びながら、親しく会う機会に恵まれずにいたのであつた。いったい誰の場合でも、母の顔を全く知らないのなら格別、頑是がんぜない時分におぼろげながら母を見た記憶があり、而も間もなくその母が餘所よその男の所へ走つてしまつたと云うようなことに出遭うと、その子の母を思慕する情は尋常一様でないのであるが、い況わんやその母が世にも

稀なる美女であつた場合、又況んや、よう／＼物心のついた年頃に、今は他人の妻になつてゐる母の許を訪れたり、その母の手で腕へ歌を書かれたりした、異常な思い出を持つ場合に於いてをや、そして又況んや、その母が現に存命中であることが分つてゐる場合に於いてをや、である。かく考えて来れば、滋幹の日記が母恋しさの餘りに綴られた文章のような觀があるのも道理であつて、現存しているのは断片的な部分々に過ぎないけれども、その他の部分も必ずや母への憧憬で埋まつていたことであろう。いや、事に依ると、滋幹は、四十二三歳に及んでから、いよ／＼母を思う念が切になつて、生れて始めてこう云うものを筆にする氣になつたのではなからうか。實際それは、日記と云えば日記であるが、

幼くして母に生き別れ、やがて父に死に別れた少年時代の悲しい回想から説き起して、それより四十年の後、天慶某年の春のゆうぐれに、西坂本に故敦忠の山荘の跡を訪ねて、たず 図はからずも昔の母にめぐり逢う迄のいきさつを書いた、一篇の物語であると云つてもよいのである。

日記に依つて想像するのに、滋幹の母の記憶は、彼が四つぐらいの時から少しずつ残っているらしいのであるが、最初の頃のは極きわめておぼろげな、霞かすみのように淡いものであるに過ぎない。彼は自分の身に取つても、父の国経に取つても、一生涯の大事件であつたあの夜のこと、——母が本院の大臣に連れて行かれた夜のこゝについて、何もおぼえていないのであつて、たゞいつからか、

母がもう自分の家にいないようになったことを、誰かに聞かされて、急に大変悲しくなつて泣いたのであつた。彼にその話をしてくれたのは、多分老女の讚岐さぬきであつたか、乳人の衛門めのとであつたか、孰方どちらかであろう。その時分、彼は夜なく、乳人に抱かれて眠つたのであつたが、乳人は彼がいつ迄も母の名を呼んで泣き止まないのに当惑して、

「さあ、おとなしくお眠みやす遊ばせ。お母さまはこゝにはいらつしやいませんけれども、そう遠くない所にいらつしやるのですよ。おとなしくしていらつしやれば、きつとお母さまの所へ連れて行つて上げますよ」

と、そう云つたので、幼い滋幹はたとえようもなく嬉しくて、

「ではいつ？」

と、聞くと、

「そのうちに」

と、云うのであつた。

「きつとだね」

「きつとでございます」

「きつと、きつと？——うそではないね」

こんな問答を毎夜のように繰り返しつゝ寝かされながら、乳人はあゝ云っているけれども、気休めに云うのであろうと、子供心に疑いを挟んでいたのであつたが、それでも乳人はそのことについて讃岐と話し合つたものらしく、或る日ほんとうに、讃岐が彼の

手を引いて母の所へ連れて行つてくれたのであった。が、幼童の記憶と云うものは全くたわいのないものなので、どう云う訳か、そんな大事の日のことを、まるきり彼は思い出すことが出来ないのである。彼の記憶は古い映畫のフィルムのようにきれ／＼で、前後につながりのない場面々々が、或るものはぼんやりと、或るものは怪しいほどくつきりと、映像をとゞめているのであるが、それらの数々の映像のうちで、今もしば／＼浮かんで来るのは、本院の館の、とある渡殿わたどのの勾欄こうらんのもとにうずくまって、所在なさそうに前栽せんざいのけしきを眺めている自分の童姿であった。

彼はその渡殿の向うにある寢殿に、母が住んでいることを知っており、自分はその母に会うためにそこで待たされていたのであつ

たが、いつも、やゝ久しく待つっていると讃岐が出て来て、此方へ入らつしやいと云う合図をした。母はめつたに端はしぢか近いあたりへ姿を現わすことはなく、母屋おもやの奥の方の一と間に垂たれ籠こめていて、彼が行くと必ず膝の上に載せて頭を撫で、頬ほずりをしてくれるので、

「お母さま」

と云うと、

「和子わこ」

と云つて、ぎゅつと抱きしめてくれるのであつた。だが、それだけ、一と言二と言やさしい言葉はかけてくれたけれども、しみ／＼とした話などを聞かしてくれることがなかつたのは、まだ

何を話しても理解の行かない年頃だったからであろうか。彼はたまにしか会えない母の顔を、そう云う折にしつかり見覚えて置きたかったので、抱かれながら仰向あおもむいて見たが、残念なことには部屋が暗いのと、額から垂れたゆたかな髪が輪郭を覆おい隠しているので、厨子ずしの中にある御佛みほとけを拝むようで、心ゆくまで見きわめたことはなかった。母のようにみめかたちのすぐれた人は稀であると云うことは、女房たちが噂うわさするのを聞いて知っていたので、うつくしいと云うのはこう云う顔のことなのかと思つてはいたが、ほんとうにそうと得とく心しんが行つていたのではなかった。たゞ母の衣には、何と云うものか特別に甘い匂のする香たが薫たきしめてあつたので、じつと無言で抱きしめられている間が好い気持であつた。

そして家に帰ってからも、なお二三日はその移り香が頬や掌てのひらもとや袂たもとなどに沁しみ着いていたので、母が自分の身に付き添つうているように思えた。

幼年の彼が母をほんとうに美しいと感じたのは、あの、平中につか掴まえられて腕うでに歌を書かれた時のことであつた。あれは渡殿の軒のきに近く紅梅べんばいが綻ほこびていたことを思うと、或る春の日のことであつたのは間違まちがひないが、彼が西の対たい屋のやの簀す子のこのところところで、二三人の女め童のわらわを相手に遊あそんでいると、大人おとなの男がニコ／＼しながら傍へ寄よつて来て、

「もし、……もうお母さまにお会いになつたんですかと、そう云つて彼の肩へ手を置いたので、滋幹は、

「まだ、……………」

と云おうとしたけれども、そんなことを云つてよいかどうか分らないので、黙つてその大人の顔を見上げた。彼はその大人が平中であつたことを後に至つて知つたのであるが、でもその時も全然見覚えのない人ではなく、前からたび／＼見かけたことのある顔であつた。

「まだなんですね」

と、男は滋幹が不安そうにもじ／＼している様子を見て、大凡おおよそ察したらしく云つた。それから、あたりに気をかねながら、中腰をかゞめて、耳の端はたへ口を寄せて、

「和子わこは賢いお子ですね、ほんとうに賢い／＼」

と、そう云つてから、

「お母さまにお会いになるのでしたら、はゞか憚りながら、私がお願いしたいことがあるんですよ。……ねえ、和子、き聴いて下さいませでしょうね」

「どんなこと？」

と、滋幹が云うと、

「あの、ちよつと、……」

と、背中の方へ手を廻して、女童たちのいる所から二三間離れた方へ連れて行つて、

「お母さまに歌を差上げたいんですが、届けて下さいますか知ら」  
滋幹は、自分が母に会うことは内證なのであるから、決して人に

しやべつてはいけないと、讃岐や乳人に云いつけられていたので、返事に窮してためらっていると、男はしきりに、そう云う心配には及ばないこと、自分は和子の母上をよく知っているので、和子が取次をしてくれたら母上もきつと喜ばれるであろうことを、さま／＼に言葉をかえて繰り返して云い、和子はそう云つても聞き分けのよい賢いお子であると、二た言目にはそれを云い添えた。最初は幼い子供を不安がらすまいと、努めて愛想あいそ笑いを浮かべて、あやすように云つていたのであるが、しやべつているうちにいつか真剣さの溢あふれた表情になり、どうにかして納得なつとくさせようと一生懸命になつているのが、滋幹にも分つた。普通そう云う時の大人の顔は、子供には恐こわいものなので、滋幹もいくらか脅やかされ

て薄気味悪く感じたのであつたが、その半面に、さも思い詰めた、子供にも同情心を起させないでは措かないような哀願的な態度が見えた。

男は子供が頷いたので、又「賢い〜」を云いながら、注意深くあたりを見廻して、

「ちよつと、ちよつと、……」

と、滋幹の手を曳いて、とある一と間の屏風の蔭へ引つ張つて行つた。と、その机に置いてあつた筆を取つて硯にひたすと、

「じつとして下さいよ」

と云いながら、滋幹の右の袂を肩の方までまくり上げて、二の腕から手頸の方へかけて、考え〜歌の文句を二行に書いた。

書いてしまつても、墨の乾くのを待つ間手を握つたまゝ放さずにいるので、まだ何かされるのではないかと云う気がしたが、墨が乾くと、まくり上げた袂をていねいにおろして、

「さあ、これをお母さまにお見せして下さい、誰も外の人のいないところで。……ようございますね、お分りになりましたね」  
滋幹は点頭てんとうしたゞけであつたが、

「お母さまにだけお見せになるんですよ、ほかの人には何卒どうかお見せにならないで」

と、男は重ねて念を押した。

それから多分滋幹は、いつものように渡殿で讃岐が合図してくれ  
るのを待つてから、母に会いに行つたのであろう。そのところ

は記憶がうすれているのであるが、几帳きちょうのかけに這入って行って、膝の上に抱かれた時、

「お母さま」

と云つて、袂をまくつて見せたのであつた。母は一と眼で直ぐに事情を悟つたらしかつたが、部屋が暗いので、几帳を押し除のけて、外の明りを入れた。そして我が子を膝からおろして、明るい方へ腕を向けさせて、何度もくく繰り返して読んだ。滋幹は、誰がこれを書いたかとも、誰に頼まれたのかとも、母が一切そう云うことを尋ねないで、何も彼かも分つているらしいのが不思議であつたが、ふと、眼の前をきらりと落ちたものがあるので、訝あやしみながら振り仰ぐと、母が涙を一杯ためてあらぬ方角を視詰みつめていた。

母の容貌を心から美しいと思ったのは、その一瞬のことであったが、それはちょうどその時に、春の日ざしの照り返しが、まともに母の顔の上にたゞよつていて、いつも奥深い暗いところではかり見ていた輪郭が、くつきり浮き出していたせいであつた。母は子供に気付かれたと思うと、慌あわてゝ顔を子供の顔にぴつたりと擦りつけたので、却つて何も見えなくなつてしまつたが、その代り睫毛まつげにたまつていた涙の玉が子供の頬に冷めたく触れた。滋幹は、後にも先にも母の顔をまぎくと見たのはその一瞬間だけであつたが、而もその時の目鼻立の印象と、その美しさの感銘とが、長く脳裡に焼きつけられて、生涯消えずにいたのであつた。

母がそうして顔を押しつけていたのは、どのくらいの時間であつ

たか、その間母は泣いていたのか、考えごとをしていたのか、等々のことも滋幹には思い出せないのであるが、やがて母は女房に半挿はんそうを持って来させて、滋幹の腕にある文字を拭ぬぐった。女房が拭い取ろうとするのを制して、母が自分で拭ったのであったが、拭い取る時にいかにも惜しそうに、一字々々、頭へ刻みつけるように視みすえつゝ消した。それから母は、さつき平中がしたように我が子の袂をまくり上げて、左の手で彼の手を握り、前の文字を消したあとへ、前と同じくらいの長さに文字を走らした。

初めに滋幹が腕をまくって見せた時は、母のほかには誰もいなかったのであるが、知らぬ間にそこへ女房が二三人来ていたので、滋幹は平中に云われたことが気にかゝったが、でもその人たちは

母に信頼されていて、総べてのことを知らされていたらしいのであつた。彼は母が自分の腕に字を書いたことはよく覚えていられるけれども、母にどんなことを云われたかは覚えがなく、事に依ると、母は黙つてそれらのことをしていたようにも思えるのであつた。母が文字を書いてしまうと、

「若様」

と、いつからか傍に来ていた讃岐が云つた。

「あのお方にお母さまの此のお歌を見せてお上げなさいませ。いえ、まだきつとその辺においでになります。さっきの所へ早くいらしつて御覧遊ばせ」

彼がそう云われて、西の対屋たいのやへ戻つて来ると、果してあの男が

簀子のこ  
簀子のところに待ち構えていて、

「おゝ、何か御返事があつたでしょうか。——おゝおゝ、賢い

く」

と、跳とび着くように寄つて来て、わくくした口調で云つた。

滋幹は後に、その時の自分が母と平中との間に恋の取次をしたのであること、自分は平中に利用されたのであつたこと、等を知つたのであるが、少くとも当時、母の側近に仕えていた女房たちと讃岐だけは、そのことを知つていたのであろうし、ひよつとしたら、讃岐こそ平中の同情者であつて、母との間の連絡に滋幹を利用することを平中に教えたのも、彼女であつたかも知れない。なぜなら、それもはつきりとは覚えていないのだけれども、滋幹が

又あの屏風のある部屋へ連れ込まれて、母の筆の跡を平中に示した時、たしかその場に讃岐が居合わせたのみならず、これを消すのは勿<sup>もつたい</sup>体のうごぎいますねと云いながら、文字をきれいに拭<sup>ふ</sup>いてくれたのも、どうやら彼女であつたような気がするのである。腕へ文字を書かれたのはその時一遍だけであつたか、それからも一二遍そんなことがあつたか、そのところはおぼろげであるが、その後も西の対へ行くと、平中がうろくして、彼を呼びとめて文を托<sup>たく</sup>したことはあつた。滋幹がそれを持って行くと、母は返事を書いたこともあり、書かなかつたこともあつたが、だん／＼最初の時のような感動を示さないようになり、厭<sup>いと</sup>わしいと云う顔つきをすることもあつたので、しまいには彼は平中に使を頼ま



なかつた。而もその記憶と感覚とは、四十年の間彼の頭の中で大切に育はぐくまれつゝ、次第に理想的なものに美化され、浄化されて、実物とは遥かに違つたものになつて行つたのであつた。

滋幹の父に関する思い出は、母のそれに比べると晩おそく、いつから記憶が始まつているか確かでない。が、多分その時期は彼が母に会えなくなつた頃からであらう。それと云うのが、そうなる迄は父に接触する折がめつたになく、それから後に父の存在が急にはつきりして来たからであつた。彼のおぼえている父は、徹頭徹尾、恋しい人に捨てられた、世にも氣の毒な老人と云う印象に盡いっききるのであるが、そう云えば一体、我が子の腕にある平中の歌に一い掬くの涙を惜しまなかつた母は、父と云うものをどう思つていた

のであろうか、滋幹はついぞ母からそれを聞かされたことはなかった。彼は几帳のかけで母の膝に抱かれた時、自分の方からも父のことを云い出したことはなかったが、母も、お父さまはどうしていらつしやる、と云うようなことを、嘗て一度も問うたことはなかった。それに、あの讃岐にしても、外の女房たちにしても、平中には妙に同情していたらしいのに、国経のことは誰もあまり口にした者はなかったが、その中で乳人の衛門だけが例外であった。

## その九

乳人めのとは滋幹に、若様がお母さまをお慕いになるのは御ごもつと尤もですが、ほんとうにおいとおしいのはお父さままでございますよ、と云い、お父さまは淋しがつておいでゞすから、大切にして、慰めてお上げにならなければいけませんよなども云った。彼女は別段母を悪くは云わなかったが、平へいじゆう中ちゆうとのことを知っていて、彼と母との媒介をする讃岐に対しては反感を持つていたようであった。そして、滋幹までがその媒介に利用されていることに気がついてからは、いよく讃岐を憎み出したようであったが、滋幹が母の館やかたへ行けないようになったのは、或はそんな関係から乳人が左様に取計らったのもあろうか。若様がお母さまに会いにいらつしやるのは致し方がございませんが、人に頼まれてお取次など

をなさつてはいけませんよ、と、滋幹は乳人にそう云われて、恐い眼で睨にらまれたこともあつた。

母が亡くなってからの父は、出仕を怠っている日が多く、晝間ひるまから一と間に閉じ籠つて病人のようになっていることがしばしばであつたし、餘所目よそめにもひどく憔悴しょうすいして、鬱々うつくとしているように見えたので、そう云う父が子供にはひとしお薄気味悪く、近づきにくい感じがして、なか／＼慰めに行くどころではなかつたのであるが、お父さまはお優しい人なのですよ、若様が行つてお上げになればどんなにお喜びになりますことか、と、乳人は云つて、或る日滋幹の手を執とつて、父の部屋の前まで引つ張つて行き、さあ、と、障子を開けて無理に中へ押し込んだことがあつた。もと

から瘦やせていた父は、一層瘦せて眼が落ち窪くぼみ、銀色の鬚ひげをぼうくと生なやして、今まで臥ねていたのが起きたところらしく、狼おのような恰かつこう好こうをして枕もとにすわっていたが、その眼でジロリと見られた途端に、滋幹は体がすくんで、口もとに出かゝっていたお父さま、と云う声が、咽喉のどの奥つかに痞つかえた。

親子はしばらく、互に眼で探りを入れながら見合っていたが、でもそのうちに、滋幹の心を壓おさしていた恐怖感が次第やわに和やわらいで、或る云い知れぬ甘いなつかしい感覚に代った。それが何に原因するのかわかりず、最初は分らなかつたが、間もなく彼は、あの、母が常に薫たきしめていた薫物たきものの香かが、此の部屋の中に満ちかゝっていることに気づいた。そして、よく見ると、父がすわっているあ

なりに、むかし母が身に着けていた桂うちきや、単衣ひとえや、小袖や、さま

／＼な衣裳が取りちらかしてあるのであつた。と、突然父が、

「和子はこれを覚えてるかね」

と云いながら、鉄の棒のようにコチ／＼した腕を伸ばして、花やかな一枚の衣の衿えりをつまんだ。

滋幹が傍へ寄ると、父はその衣を両手で捧げるようにして滋幹の前へ突き出したが、次にはそれに自分の顔を押しあて、長い間身動きもせず<sup>に</sup>いた。それから漸く顔を上げると、

「和子もお母さんに会いたいだらうね」

と、しんみりした、同感を求めるような口調で云つた。滋幹は父の容貌を、それほど仔細しさいに見たことはなかつたのであるが、眼の

ふちには眼やにが溜り、前歯があらかた脱け落ちていて、そのう  
え声が皺しわが喰くれているので、何を云うのか、ちよつとは聞き取りに  
くかった。それに、父はそんな風に云うのだけれども、その顔は  
笑つてもいなければ泣いてもいかなかった。たゞもう一途いちずな、執しゆう  
心しんの強い生真きまじめ面目な表情で、じつと此方の眼の中を視すえてい  
るので、滋幹は又気味悪くなつて来て、

「うん」

と、頷うなずいたきり立っていた。すると父はだん／＼深く眉根を寄せ  
て、

「もうよい、彼方あちらへおいで」

と、不機嫌そうに云い切つた。

そんなことがあつてから、又滋幹は当分父の傍へ寄り着いたことはなかつた。お父さまは今日もお内にいらつしやいますよ、と云われると、却<sup>かえ</sup>つて父の部屋の方へは行かないようにしたくらいであつたが、父は一日閉じ籠つて、殆ど姿を見せないのであつた。たま／＼部屋の前を通り過ぎる時、耳をすまして中の様子を窺<sup>うかが</sup>つても、生きているのか死んでいるのか、コトリとの音も聞えなかつたが、恐らく此の間のように、母の衣裳の数々を取り出して、そのなまめかしいかおりの中に埋まつているのであらうと、滋幹は推した。

その／＼ち、その同じ年であつたか、明くる年であつたか、晴れた秋の日の爽<sup>さわ</sup>やかな午<sup>ひる</sup>過ぎに、父が珍しくも前<sup>せんざい</sup>裁に出で、萩がた

わゝに咲いている遣り水やみずのほとりに、ぼんやりと石に腰かけていたことがあつた。滋幹はその時ほんとうに久ひさし振ぶりに父を見かけたのであつたが、そうして石に憩いこうている父の恰好には、長い道中を歩いて来て、くたびれ切つて道ばたに休んでいる旅人のようなどころがあつた。衣服などもひどく垢あかづいて、よれよれになつていて、袂まわや裾ほころが綻ほころびたりちぎれたりしていたのは、もうその時分、身の周りまわの世話をする女房などがいなくなつていたのか、いてもそう云う女たちに手を触れさせることを厭いとつたのであろう。滋幹は、少しく傾きかけた日があか／＼と父の半身を照らして、痩せ衰えた頬がつや／＼にかゞやいているのを見ながら、それでも敢あえて近寄ろうとはせず、五六歩離れて彳たゞんではいると、父が小声

で何かぶつ／＼つぶや呟いているのが聞えた。

その、呟いているものが、普通の言葉ではなくて、何かの文句にふし節をつけて、口のうちに暗誦しているのであるらしいことは察しられたが、滋幹が傍で聞いているのには全く気が付かないかのようには、何となく水の面へ眼を落して、同じ文句を二三遍も繰り返していたかと思うと、

「和子」

と云つて、やっと少年の方を向いた。

「わしは和子に此の詩をからうた教えて上げる。此れは唐土のもろこし白楽天と云う人の作ったもので、子供にはむずかし過ぎて意味が分らないであろうが、そんなことはどうでもよい。わしが云う通りに覚え

さえしたらよいのだ。今に和子が大人になったら、自然に分る時  
 が来る」

滋幹は、

「さ、こゝへおかけ」

と云われて、父と並んでその石の端へ腰をかけた。父は最初、子供に覚え易い<sup>やす</sup>ように、一句ずつ句切つてゆつくりと云い、滋幹が一句を唱え終るのを待つて次に進むようにしたが、そうしているうちにだんくく教えていると云う心持を忘れ、己<sup>おの</sup>れの感情の赴<sup>おもむ</sup>くまゝに声を張り上げ、抑揚をつけて朗吟し出した。――

失うて庭の前の雪となり

飛んで海の上の風に因<sup>よ</sup>る

きうせうまぎ<sup>とも</sup>  
九 霄 応に侶を得たるなるべし

ろうこう  
三夜籠に帰らず

みどり  
声は碧の雲の外に断え

あきら  
影は明けき月の中に沈む

ぐんさい  
郡 斎これより後は

たれ  
誰か白頭の翁に伴はん

滋幹は他日成長してから、此の詩が白氏はくしもんじんじゅう文集にある「鶴を失

ふ」と云う題の五言律詩であることを発見したので、当時は何の

ことか解し得なかつたのであるが、しかし此の文句はそれから後

も、父がたび／＼酒に酔つては口号くちがうんでいたことがあるので、

耳に胼胝たこが出来るほど聞かされたものであつた。今になつて考え

れば、父は逃げ去った母を鶴になぞらえ、悶々もんげんの情を此の詩に托していた訳であるが、父がこれを吟ずる時の悲痛な声の調子を聞けば、子供心にも父の胸にある断腸の思いが自分に伝わりて来るのを感じた。前にも云うように、父の声は皺しわ噎がれていて高い音が出せなかつたし、息切れがするので声を長く引くことも出来なかつたので、その吟じ方は技巧的には拙劣であつたが、「九霄応に侶を得たるなるべし」と云う句、「声は碧の雲の外に断え、影は明けき月の中に沈む」と云う句、「誰か白頭の翁に伴はん」と云う句などを誦する時は、技巧を超絶した凄せい愴そうな実感が籠つて、そゞろに人を動かさないでは措おかないものがあつた。

父は滋幹がその詩を暗誦し得るようになったのを見て、

「それが覚えられたら、もつと長いのを教えて上げよう」

と云つて、もう一つ、ほんとうに前のよりはずっと長いのを授けてくれたが、それは「我念ふ所われおもの人あり」と云う「夜雨」の詩であつた。――

我念ふ所の人あり

隔たりて遠きく郷さとにあり

我感ずる所の事あり

結ぼれて深きく腸はらわたにあり

郷は遠くして去くゆことを得ざれども

日として瞻あふぎ望まざることなし

腸は深くして解くことを得ざれども

ゆふべ  
夕として思ひ量らざることなし

いは  
況んや此の残燈の夜に

ひと  
独り宿りて空堂にあるをや

そら  
秋の天殊に未だ暁けず

さうさう  
風と雨と正に蒼々

づだ  
頭陀の法を学ばざれば

いづく  
前よりの心安んぞ忘る可けん

此の終りの句の、「頭陀の法を学ばざれば、前よりの心安んぞ忘る可けん」と云う言葉を、父はやゝもすれば独語のように詠じていたが、それから間もなく佛道に心を傾けるようになったのは、恐らく此の句などに影響されたせいであろう。なお滋幹は、何と

云う題の詩か不明であるが、「夜深うして方に独り臥したり、誰  
 が為めにか塵の牀を払はん」「形羸れて朝食の減ずるを覚ゆ、  
 睡り少うして偏へに夜漏の長きを知る」「二毛暁に落ちて頭を梳  
 ること懶し、両眼春昏くして薬を点ずること頻りなり」「須く酒  
 を傾けて腸に入るべし、酔うて倒るゝも亦何ぞ妨げん」等々、い  
 ろゝとそれに似たような句があつたことを、きれ／＼に覚え  
 ているのである。父はそれらの句を、悄然として庭の片隅に  
 佇みながらこつそり吟誦していることもあり、人を遠ざけて独り  
 で酒杯を挙げながら、感極まつた声を放つて泣いて謡っているこ  
 ともあつたが、そんな折には父の両頬に涙が縷々と糸を引いてい  
 だ。

その時分、讚岐さぬきはいつからか館にいないようになっていたのであるが、思うに彼女は母が逃げ去ると間もなく、自分も父を見限つて母の方へ身を寄せたのではあるまいか。滋幹の記憶する限りでは、乳人めのとの衛門が滋幹のことも父のことも、何くれとなく面倒を見てくれていた。どうかすると彼女は、頑是がんぜない滋幹をたしなめるのと同じ口調で父をたしなめたりしたが、彼女が最もやかましく云つたのは父の飲酒のことであつた。

「お年を召して、外には何もお楽しみがおありにならないのでございませうから、少しはお宜よろしゅうございますけれども、……」  
乳人がそんな風に云うと、父はしおくと、子供が母に叱しかられたようにうなだれて、

「心配をかけて済まないな」

と云いながら、大人おとなしく聴いているのであつた。全く、老年に及んでいとしい人に背そむかれた父が、前から好きであつた酒を一層嗜たしなむようになり、それを唯一の伴はんりよ侶とするに至つたのは是非もないことだけれども、その酔い方がだん／＼狂暴に、常軌じょうぎを逸するようになつて行つたので、乳人が案じるのも無理はなかつた。父は乳人に諫いさめられると、その時は素直に詫いびるのであるが、その日のうちに直ぐもう正体もなく酔いしれると云う有様で、詩を吟じたり、泣き喚わめいたりするくらいはまだしも、夜中にふらくくと何処どこかへ出て行つて、二三日も歸つて来ないことがしば／＼だつたので、

「何処へおいでになったのでしよう」

と、乳人や女房たちが額を鳩あつめて相談しながら溜息をついたり、それとなく人を出して搜索させたりしていることも珍しくなかった。滋幹もそんな時には、子供は子供なりに胸を痛めたものであったが、二三日すると、夕方にひとりでひよっこり帰って来たこともあり、誰も気が付かぬうちに、部屋に戻って臥ねていたこともあり、人に見付けられて連れて来られたこともあった。一度などは、都を離れた遠い野末のずえに行き倒れていたのを捜し出されたことや、戻った時の姿を見ると、髪は乱れ、衣は破れ、手足は泥にまみれて、乞食坊主こじきぼうずのようになっていた。乳人は呆あきれて、

「まあ」

と云つたきり、涙をぼろ／＼零こぼしているばかりであつたが、父も極きまり悪そうに下を向いて何も云わず、こそ／＼と部屋へ逃げ込んで、夜着よぎに顔を埋めてしまった。

「あんな風にしていらつしやったら、しまいにはほんとうに氣狂いにおなり遊ばすか、体をお損じ遊ばすか、……」

と、乳人は蔭で云い暮らしていたが、そう云う父が、それほど溺で愛きあいしていた酒を、或る時からふつつり止めてしまったのであつた。

滋幹は、父がどう云う動機から酒を断たつに至つたのか、その間かんの事情を詳つまびらかにしないのであるが、彼がそれに氣が付いたのは、

「お父さまは近頃殊しゆしやう勝しょうにおなりなされて、一日しずかにお経

を読んでいらつしやいます」

と、乳人が彼に語つたことがあるからであつた。思うに父は、母恋しさに堪えかねて、酒の力で紛らそうとしたのであつたが、酒では到底紛らしきれないことを感じて、佛の慈悲に縋すがろうとしたのであろうか。つまり、「頭陀の法を学ばざれば、前よりの心安んぞ忘るべけん」と云う白詩はくしの示唆しきに従つた訳なので、それは父の死ぬ一年ほど前、滋幹が七つぐらいの時のことであつた。その時分になると、父はもう狂暴性がないようになり、終日佛間ぶつまにいて、冥想めいそうに耽ふけるとか、看經かんきんするとか、何処かの貴い大徳だいとくを招いて佛法の講義を聴ちやうもん聞もんするとか、云うような日が多くなつたので、乳人や女房たちは愁眉しゆうびを開いて、どうやら殿も落ちつ

いておいでになった、あの御様子なら安心ですと云つて喜んでいたのであつたが、しかし滋幹には、そうなつてからでも矢張何となく近づきにくい、薄気味の悪い父であることに変りはなかつた。乳人はよく、佛間が餘りひつそりしていることがあると、

「若様、お父さまの所へいらしつて、何をなすつていらつしやいますか、そうつと覗のぞいて御覽遊ばせ」

と、そう云つたので、滋幹が恐るゝ佛間の前へ行つて、しきいぎ 闕い際わにひざまず跪ひざまずいて、音を立てぬように障子に手をかけて、いっすん一寸ばか

りするゝと開けて見ると、正面に普賢菩薩ふげんぼさつのえぞう絵像えぞうを懸かけ、父はそれに向い合つて寂然と端坐していた。滋幹の方には後姿しか見えなうかゞいのだけれども、暫くじつと窺うかゞつていても、父は経を読むの

でも、書を繙くひもとのでも、香を薰くたのでもなく、たゞ黙然と坐つて  
いるだけなので、

「お父さまはあゝして何をしていらつしやるの？」

と、或る時乳人に尋ねると、

「あれは、不浄観ふじようかんと云うことをなすつていらつしやるのです」  
と、乳人が云つた。

その不浄観と云うのは大変むずかしい理窟りくつのあることなので、乳  
人にも委くわしい説明は出来ないのであつたが、要するに、それをす  
ると、人間のいろ／＼な官能的快樂が、一時の迷いに過ぎないこ  
とを悟るようになる、そして、今まで恋しい／＼と思つていた人  
も恋しくなくなり、見て美しいとか、食べておいしいとか、嗅かい

で芳かんばしいとか感じた物が、実は美しくも、おいしくも、芳しくもない、汚けがらわしい物であることが分つて来る。お父さまは何とかしてお母さまのことをお諦あきらめになろうとして、その修しゆぎ行ようをなすつていらつしやるのですよ、と云うのであつた。

そう云えば滋幹は、父について生涯忘れることの出来ない或る恐ろしい思い出を持つているのであるが、それはちようどその前後のことであつた。その頃父は幾日間も、晝夜の別なく静坐と沈思をつゞけていて、いつ食事をし、いつ眠るのであるうかと、滋幹は不審に堪えかね、夜中乳人に気付かれぬように寝間を忍び出て、佛間のところへ行つて見ると、障子の中にはかすかに燈火がともつてい、父は晝間と同じ姿勢で坐つていた。例の如く隙間すきまから覗のぞ

いていた滋幹は、いつ迄たつても父の姿が彫像のように動かないので、再びそうつと障子を締めて、部屋へ戻つて寝てしまつたが、その明くる晩も気になつて覗きに行くと、依然として父は昨夜の通りにしていた。が、たしか三日目の夜中のこと、又しても好奇心に駆られて、足音をさせないように爪つまさき先立て、歩いて行つて、障子をいつも程に細目に開け、じつと息を凝こらしていると、燈台の灯先ほさきが風のないのにゆらくとしたと思つた途端に、父が俄にわかに両肩を揺がして、身じろぎをした。父の動作は甚しく緩慢なので、どう云う目的で動き出したのか最初は察しが付かなかつたが、やがて、片手を床につき、非常に重い物を引きあ上げるような息づかいをして、自分の身をそろくと真つすぐ起して、立ち上

るのであつた。老年の結果、それでなくても立ち居がのろくなつてゐるのに、長い間端坐の形を崩さずにいたので、そう云う風にしなければ急には立てなかつたのであろうが、さて立ち上ると、よろけるように歩きながら部屋の外へ出るのであつた。

滋幹が訝あやしみながら跡をつけると、父は脇目もふらずに前方を視つめ、階きざしを下りて、金剛草履こんごうぞうりを穿はいて、地上に立つた。月が皎こうくと冴さえていたのと、そこらに虫の音が聞えていたのとで、季節が秋であつたことは確かであるが、つゞいて庭に下りた滋幹は、自分もあり合う大人の草履を突っかけてたけれども、足のうらが冷えくとして、水の中を渉わたつてゐるような感じがし、月の光で地面が霜を置いたように真っ白だったので、冬ではなかつたかと云

う気もするのである。父が歩くにつれて、地上にくつきり映つて  
いる父の影が揺れて行つたが、滋幹はそれを踏ふまないように可かな  
り離れて附いて行つた。父がうしろを振り返つたら見付けられた  
かも知れなかつたが、父の様子は、歩きつゝなお冥想に沈んでい  
るような工合で、いつの間にか館やかたの門を出て、何かはつきり目指  
すところがあるらしく、すうつと歩いて行くのであつた。

八十歳の老翁と七八歳の幼童の足であるから、そう遠くまで行つ  
たのではないであろうが、それでも相当の道のりを来たように滋  
幹は感じた。彼は父からはずつとおくれて見え隠れに跡をつけた  
が、深夜の路上には親子の外に全く人影が絶えていたし、父の姿  
が遙かに白く月光を反射していたので、見失う恐れはなかつた。

路は、初めはいかめしい築地ついでの邸がつゞいていたのが、だんく  
 みすぼらしい網代あしろの扉へいや、屋根に石ころを置いた佗わびしい低い板  
たふき 葺たふきの家などになったが、それも次第まばに疎まばらに、ところ／＼に  
 水たまりだの空地だのが多くなり、芒すゝきやその他の秋草が丈高く伸  
 びていたりした。そしてそれらの叢くさむらにすだく虫の音が、二人が近  
 づくかまびすとふつと止み、遠のくと又鳴き出しながら、町はずれへ行け  
 ば行くほど雨のようにしげく喧かまびすしくなつて行つた。そのうちに、  
 家が一軒もなくなつて、見渡す限りぼう／＼と草の生えた中に、  
 細い野道がひとすじうねっている所へ出た。一本道であるけれど  
あちら も彼方へ曲り此方こちらへ曲りしている上に、草が人間の背よりも高く、  
 父の姿がとき／＼＼それに没してしまふので、今度は滋幹は一二

間の距離まで近寄って行つたが、両側から路の方へ蔽おいかぶさつてゐる草を掻き分けながら行くので、袂たもとも裾すそもしたゝか露に濡れて、つめたい雫しずくが襟もとまで沁み入るのであつた。

父は、小川に橋のかゝつた所へ来ると、それを渡つて、なお真つ直ぐにつゞいてゐる路の方へは行かないで、川のふちへ降りて、少しばかり河原のようになつてゐる砂地を、川下の方へ歩き出した。と、橋から一丁ばかり下のちよつと小高く盛り上つた平地に、土饅頭どまんじゆうが三つ四つ築いてあつて、それらはいずれも土が柔かです。新しく、頂上に立てゝある卒塔婆そとばも真つ白な色をしており、折柄の月に文字まではつきり分るのであつた。卒塔婆を立てないで、代りに小さな松杉などを植えたのもあり、土饅頭でなく、柵さくで囲

つて、石を積み上げて、五輪の塔を据えたのもあり、簡単なのは、屍体を一枚の蕙むしろで蔽おほうて、しるしの花を供えたゞけのものもあつたが、中には又、此の間の野分のわきで卒塔婆が倒れ、土饅頭の土が洗われて、屍体の一部が下から露出しているのもあつた。

何かを捜し求めるように土饅頭の間をうろくしている父の跡から、滋幹は殆ど踵きびすを接するくらいに附いて行つたが、父は附けられて、振返つたことを意識しているのかいないのか、さつきから一度も振り返つたことがなかつた。屍骸しがいの肉を貪むさぼつていたらしい犬が一匹、不意に叢くさむらの間から跳び出して慌て、何処かへ逃げ去つたが、父はそんなものにも眼もくれなかつた。彼が何かしら異常に緊張し、それに精神を打ち込んでいるらしい様子は、後姿からでも判

断が出来た。そして、程なく滋幹は、父の足が止まったので、自分もピタリと歩みをとどめた瞬間に、体じゆうが総毛立つものを眼前に見た。

月の光と云うものは雪が積つたと同じに、いろ／＼のものを燐のような色で一様に塗り潰してしまふので、滋幹も最初の一刹那は、その地上に横わっている妙な形をしたものゝ正体が掴めなかつたのであるが、瞳を凝らしているうちに、それが若い女の屍骸の腐りたゞれたものであることが領けて来た。若い女のものであることは、部分的に面影を残している四肢の肉づきや肌の色合で分つたが、長い髪の毛は皮膚ぐるみ鬢のように頭蓋から脱落し、顔は押し潰されたとも膨れ上つたとも見える一塊の肉のかたまりに

なり、腹部からは内臓が流れ出して、一面に蛆うじがうごめいていた。晝あざむを欺く光の下でそう云うものを見た凄すさまじさは、凡そ想像に難くないが、滋幹は恐さに顔を背そむけることも、身動きすることも、まして声を発することも出来ず、その光景に縛りつけられたようになって立っていた。が、父はと見ると、しずかにその屍骸むしろに近寄つて、まず恭うやくしく礼拝してから、傍に置いてある蕙むしろの上にするるのであった。そして、さつき佛間でしていたように凝ぎようぜん然と端坐して、とき／＼屍骸の方を見ては又半眼に眼を閉じて沈思し出したのであった。

その時月はひとしお研とぎすまされたように冴え、四辺の寂せき寞ぼくは前より一層深まっていた。風がおり／＼かすかに渡つて、すゝき

がざわ／＼する外には、虫の音が際立きわつてひゞくばかりであつた。そう云う中でひとり影の如く孤坐こざしている父を見ることは、何か奇怪な夢の世界に引き入れられた感じであつたが、でもあたりに鼻を衝つく屍臭びまんが瀰漫びまんしていたので、そのために滋幹は否いや応おうなしに現実の世界へ呼び戻された。

此の、滋幹の父が女の屍骸を見た場所と云うのは、何処のことか明かでないが、蓋けだしその頃の京都の街には、こう云う風な屍骸の捨て場が方々にあつたのであろう。当時は痘瘡とうそうとか麻疹はしかとか云う疫癘えきれいが流行はやつて死人が多く出たりすると、一つには伝染を恐れるのと、一つには処置に困るのとで、何処と云うことなく、空地があれば病人の屍骸を運んで行って、しるしばかりに土をかけ

たり、藁で蔽うたりして葬ったものらしいので、これもそう云う場所であつたかと察しられる。

## その十

父がその屍体と相對して冥想に耽ふけつていた間、滋幹はとある塚のうしろに蹲うずくま踞まつて息を詰めていたのであつたが、中天にあつた月がやゝ西に傾き、彼が身を隠していた一と東の卒塔婆そとばの影が地上に長く横よこたわるようになった頃に、父は漸く立ち上つて歸路に着いた。滋幹は又、来た時と同じ路を、跡を追つて行つたのであるが、彼が思いがけなく父から声をかけられたのは、さっきの小川

の橋を渡つて、すゝき原へさしかゝつた時であつた。

「和子わこ、……和子は今夜、わしが彼処で何をしていたと思う？」  
父はひとすじ路みちの途中で、今歩いて来た方へ向き直つて立ち止まり、滋幹が後から来るのを待ち構えていたのであつた。

「わしは和子が跡を付けていたのを知っていたのだよ。わしは少し考があつて、わざと和子のするようにさせていたのだ。……」  
そう云つても滋幹が黙つているので、父は一段と声をやわらげ、優し  
みのある調子でつゞけた。

「ねえ、和子、わしは和子を叱る訳ではないのだから、正直に云つて御覧。和子は今夜のわしのした事を初めから見ているのだらうね」

滋幹は、

「うん」

と頷うなずいて見せてから、

「お父さまのなさることが心配だったものですから、………」  
と、言い訳わけのつもりで附け加えた。

「和子はわしが気が狂ったとでも思ったのだね」

父は可笑おかしがるような口元をして、はっ、はっ、と力なく笑った  
ようではあったが、その声はあまり微かすかなので聞き取れなかった。  
「和子ばかりではない、皆がそう云う風に思っているようだね。」

……しかしわしは氣狂いではないのだよ。わしのしていること  
には訳があるのだ。和子が安心するように、その訳を聞かして上

げてもよいのだが、………どうだな、聞いてくれるかな。………」  
 そう云つて、父はそれから館やかたへ帰る途々、滋幹と並んで歩きな  
 がら次のようなことを語つて聞かしたのであつた。当時の滋幹に  
 は勿論それの大要だけでも会得えとく出来よう筈はなかつたので、彼が  
 日記に書き留めているのは、父の語つた言葉そのままではなくて、  
 後年、大人になつてからの彼の解釈が加わつているものなのであ  
 つて、それは要するに、佛家が云うところの不浄観のことである  
 が、筆者も佛教の教理には暗いので、誤りを冒すおかことなく伝え得  
 るかどうか覚束おぼつかない。筆者は此のことで、日頃眷顧けんこを蒙こうむつてい  
 る天台宗の某碩せき学がくなどにも尋ね、参考書なども貸して戴いたの  
 であるが、調べ出すといよ／＼深奥しんおうで分りにく／＼なるばかりで

ある。もつと尤もこゝではそんなに深く説き及ぶ迄もないのであるから、

たゞ順序として、物語の進行に必要な面にだけ触れて置こう。

不浄観のことが分り易いかなまじ仮名交り文で書いてある書物は、他にも

あるかも知れないが、筆者が知っているのでは、世に慈鎮和尚の

著とも云い、又勝月房慶政しようにん上人の著とも云う「閑居の友」が

ある。此の書はおうじようでん往生伝やほつしんしゅう発心集に洩れている往生発心者

の伝記、名僧智識の逸話等を集録したもので、その巻の上の、

「あやしの僧の宮づかひのひまに不浄観をこらす事」、

のをとこ野はらにてかばねを見て心をおこす事」、

「からはしかはらの女のかばねの事」、その巻の下の、「宮ばらの女房の不浄

のすがたを見る事」等を読めば、不浄観と云うのがどう云うこ

とか大凡その見当はつくのである。

今、同書に拠つて一例を挙げると、こゝにこんな話がある。――

昔、比叡山ひえいざんの或る上人のもとに召使われている中間僧ちゆうげんそうがあった。僧とは云うが寺男のような者で、上人に仕えている／＼な雑用を勤めるのであったが、平素主人を大切に、云いつけたことは一事をも違えず、まことに忠実な性質だったので、上人も少からず信頼していた。かくて月日を送るうちに、此の男が毎日夕刻になると何処かへ行つて見えなくなり、明くる朝早く帰つて来るようになった。それを知つた上人は、多分夜な／＼坂本へでも通うのであろうと思つて、内心その男を甚しく憎んだ。彼が朝

歸つて来る時の様子を見ると、何となく打ち沈んでいて、人と顔を合わすのを厭いとう風があり、いつも涙ぐんでいるので、大方通う所の女が心のまゝにならないのであろう、きつとそうに違いないと、上人を始め皆がそれにきめていた。然しかるに、或る時上人が使を遣やつてその男の跡をつけさせると、男は西坂本（江州の坂本ではなく、比叡山の西側の山麓、即ち現在の京都市左京区一乗寺いちじょうじ辺）を下つて蓮れん台だいの野へ行くのであつた。使は合点が行かないで、何をするかと窺うかがつてみると、彼方かなた此方こなたを踏み分けて行つて、云いようもなく腐りたゞれた死人の傍に寄つて、或は眼を閉じ、或は眼を開いて祈念を凝らし、たゞゞそれを繰り返しつゝ、声も惜しまず泣くのであつたが、夜もすがらそう云う風にして、暁の鐘の

声が聞える頃に、漸く涙を押し拭うて帰るのであった。使者は自分も感激して涙を流しながら戻つて来たので、どうであつたと上人が尋ねると、さあ、その事でございます、あの男がいつも打ち沈んでしおくとしていましたのも道理でございます、実はこれく／＼しかく／＼の次第で、夕暮になると見えなくなりますのも、そのためだつたのでございます、あゝ云う貴い聖ひじりの行いをしていた人を、妄みだりに疑つた罪の程も恐ろしゆう存ぜられまして、と云うので、主の上人も驚いて、その後はその中間僧を敬うて、常人のようには扱わなかつた。すると或る朝、食事に粥かゆをこしらえて持つて来たので、あたりに人がいないのを見すまして、お前は不浄観を凝らすことがあると云う噂だが、ほんとうかね、と尋ねると、

どう致しまして、左様なことは学問のある偉いお方がなさることです、私がお前のようなことの出来る人間かどうか、様子でもお分りでございましょう、と云うのであった。

上人が重ねて、いや、お前のことは今では皆が知っている、愚僧もかね／＼心のうちではお前を貴くも有難くも思っていたのであるから、隠さずに云つてくれるがよい、と云うと、左様ならば申しますが、と云つて、実は何事も深くは存じませぬけれども、少しばかり心得ていることがございます、と云う。定めし験げんがあるであろうな、試ためしに此の粥を観じて見せよ、と云うと、男は折お敷しきを取つて粥の上に蓋ふたをして、暫時眼ざんじを閉じて観念を凝らしていたが、やがて蓋を開けると、粥ことが悉く白い虫に化していた。それ

を見た上人はさめ／＼と泣いて、必ず我を導き給えと、男に向つて掌たなごころを合わせた。

——以上が、「あやしの僧の宮づかひのひまに不浄觀をこらす事」の説話であつて、「閑居の友」の著者は此のあとに、「いとありがたく侍りはべける事にこそ」と云つて、説明を加えて云うのに、愚かな者でも、塚のほとりに行つて乱れ腐つた死人のむくろを見れば觀念が成じょうじゆ就やすし易いと云うことは、天台大師も次第しだいぜんもん禪門と云う文に説いておられるくらいであるから、此の中間僧もそれを学んだのであろう。摩訶止觀まかしかんの中には、觀のことを説いて、

「山河も皆不浄也、くひものきもの又不浄也、飯は白き虫の如し、衣は臭き物の皮の如し」と云つてあるが、かの中間僧の觀念のい

みじさは、自然と聖教の文に合致しているのである。又天竺てんじくの佛教比丘びくも、器物うつわものは髑髏どくろの如し、飯は虫の如し、衣くちなわは蛇の皮の如しと説き、唐土の道宣どうせん律師も、器うつわはこれ人の骨也、飯はこれ人の肉也と説いておられるのであるが、かような人々の説き給うことなどを知る筈のない無学の僧が、その教を實行していたと云うのは、何とも頼もしい限りである。人はたとい此の中間僧のような境地には至り得ない迄も、そう云う道理が分り出して来たら、五慾の思いがだんくに薄らいで、心の持ち方が改まるであらう。——「此のことわりを知らぬもの、こまやかなる味はひには貪慾どんよくの心も深く起り、おろそかなる味はひ落ちぶれたる衣には瞋恚しんいの思ひ浅からず、よしあしは変れども、輪廻りんねの種となる

ことはこれ同じかるべし。(中略)それにつけてもあはれ無益に侍るべきかな、夢のうちのかりそめのこと故に、永き世に眠らんこと、辛くぞ侍るべきなど思ふべきにや」と云つてゐる。

「あやしの男野原にてかばねを見て心をおこす事」と云うのも、大体同じ趣意の教訓を含んだ説話であつて、或る男が野原で浅ましい女の屍骸を見て帰つてから、その形ぎようそう相が頭にこびりついて離れず、妻と相抱いて寝ながら、妻の顔をさぐり合わすと、額のありどころ、鼻のありどころ、唇のありどころ等々が、悉くその死人の相にそっくりであるように思われて、結局無常を悟るに至ると云う筋で、「止観のなかに、人の死にて身のみだるゝより、遂にその骨を拾ひて煙となす迄の事を説きて侍るは、見る眼も悲

しう侍るぞかし、斯かやうの文も暗き男のおのづからその心おこり  
けん事」は、猶なおく々有難い事であると云つてゐる。

そこで、その修行とはどう云うことをするかと云うのに、かの禅  
僧が坐禅する時のように独りしずかに座を組んで瞑目沈思めいもくちんしし、

一事に向つて想念を集注するのである。その一事とは、たとえば  
自分の身は父母の姪いんらく 樂の結果の産物であつて、本来は不浄不潔  
な液体から生れたものであると云うこと、大智度論の言葉を引用  
すれば、「身内の欲虫、人の和合する時男虫は白精、涙の如くに  
して出で、女虫は赤精、吐との如くにして出づ、骨髓あぶらの膏流れて此  
の二虫をして吐涙の如くに出でしむ」るのであつて、此の赤白の  
二涕にていの※合したものが自分の肉体であると云うことを考える。次

にいよく生れ出る時は、むさく臭い通路から出るのであること、生れてから後も大小便をたれ流し、鼻の孔あなから涕はな汁じゅうをたらし、口から臭い息を吐き、腋わきの下からぬるくした汗を出すこと、体内には糞や尿や膿や血あぶらや膏あぶらが溜たまりつてい、臟腑ぞうふの中には汚物が充満し、いろくの虫が集つてい、死んでからはその屍骸を獣が噉くちい、鳥が啄ついば、四肢が分離して流れ出し、腥なまい悪臭くさが三里五里の先まで匂におつて人の鼻を衝つき、皮膚は赤しやく黒こくとなつて犬の屍骸よりも醜みにくくなること、要するに此の身は生れ出る前から死んだ後までも不浄であると云うことを考える。

摩訶止観と云う書には、これらの思索の順序が述べられていて、人体の不浄なる所以ゆえんが種子不浄とか五種不浄とか云う風に、細か

く分けて説明されているのであるが、同書は又、人が死んでからその屍骸の変化して行く過程を描くのに委曲を盡し、第一の過程を壊相えそうとか、第二の過程を血塗相けつとそうとか、第三を膿爛相のうらんそう、第四を青瘀相しょうおそう、第五を噉相たんそうとか云う風に説いていて、まだこれらの相を諦観ていかんしないうちは、妄みだりに人に恋慕したり、愛着したりするけれども、もしこれらを諦観し終れば、慾心がすべて止んで、たった今まで美しいと感じたものが、とても鼻持ちならないように思えて来る。それは恰あたかも、糞を見ないうちは飯が喰えるけれども、一旦あの臭気を嗅かいたら、胸がムカ／＼して食えなくなるのと同様である、と云っている。

しかし、ひとり静坐してこう云う道理を考えたり変化の過程を想

像したりするだけでは、なお十分に体得出来ない場合もあるので、時には人の屍骸の放置してある所へ出かけて行き、止観に書いてあるような現象の起るのを眼まのあたりに見たりすることも、矢張一方法とされているのであつて、前掲の中間僧はそれを実践していたのである。かの僧が夜なく山を抜け出して蓮れんたいの台野へ行つたように、一度や二度でなく、何度も繰り返して屍骸の変貌するさまを観察し、壞相や、血塗相や、膿爛相を眼に馴染ませると、しまいには一室のうちにあつて端坐瞑目したゞけで、それがまぎ／＼と見えるようになる。いや、それどころでなく、たとい衆人の眼には絶世の美人と映ずる婦人を拉らっし来きたつても、行者の眼には一箇の忌まわしい腐肉や血膿のかたまりとして映ずるようにさえな

るので、修行の功を試すためには左様な美人を實際に連れて来て  
 眼の前に据えつゝ、観念を凝らすことなどもあると云う。で、そう  
 云う功を積んだ行者がひとたび不浄観を行ずると、生きた美人が  
 ひとり行者自身の主観に醜悪に映ずるばかりでなく、第三者の眼  
 にまでそう見えるようになる。かの中間僧が、主の上人に粥  
 を観じて見せよと云われて観念を凝らした時、粥が化して白い虫  
 の集団になったと云うのはその意味であつて、真に不浄観を成  
 就すればそう云う奇蹟を行うことさえ出来るのである。

さて、少将滋幹の日記に依れば、彼の父翁の老大納言も亦、不浄  
 観を行じようとしたのであつて、而も老大納言の場合は、かの失  
 われた鶴、——声を碧雲の外に断ち、影を明月の中に沈めた

佳人かじんの艶姿が、いつ迄も眼底を去りやらず、断腸の思いに堪えられないまゝに、その幻まぼろしに打ち克かとうとして一念発起ほつきするに至つたことは明かであつて、その夜の父は滋幹を相手に、まず不浄観の説明から始めて、自分は何とかして自分に背そむいた人への恨みと、恋慕の情とを忘れてしまいたい、心の奥に映っているかの人の美貌を払ふつしよく拭ぬぐして、煩惱ぼんのうを断ち切つてしまいたい、自分の行為は狂的に見えるかも知れないけれども、自分は今、その修行をしているのである、と、そう語つたのであつた。

「そんならお父さまは、あゝ云うものを見にいらつしやるのは今夜が始めてゝはないんですね」

父の長話が一段落へ来た時に滋幹が尋ねると、父はいかにもそう

だと云うようにうなず頷いて見せた。父はもう数箇月も前から、折々月の明かな夜を選んで、家の者たちの寝静まった時刻をうかゞい、何処と限ったことはなく、野末のすえの墓場などへ忍んで行つてひとしきり観念を凝らしてから、明け方にこつそり戻つていたのであつた。

「そうしてお父さまは、もう迷いがお晴れになつたんでしようか」  
滋幹がそう云うと、

「いゝや」

と云つて、父は立ち止まつて、遠い山の端はの月の方へ眼をやりながらほつと息をした。

「なか／＼晴れるどころではない。不浄観を成就すると云うこと

は、口で云うような容易たやすいものではないんだよ」

それきり父は、滋幹の方から話しかけても相手にならず、何かしら考とらに囚とらわれている様子で、家に着くまで殆ど一語を発しなかつた。

父のあとについて滋幹がそう云う夜歩きの供ともをしたのは、その一と夜だけであつた。父は前から人目を忍んで時々そんなことをしていたと云うのであるから、恐らくその以後に於いても、なお幾度かさまよい出たことがあるに違いなく、たとえばその翌日なども、夜更よふけて父がしめやかに戸を開けて出るけはいを、滋幹はそれと気づいていたけれども、父も滋幹を連れて行こうとはしなかつたし、滋幹も、再び父の跡を附けようとは思わなかつた。

それにしても、父があの時まだ頑<sup>がんぜ</sup>はない幼童を捉<sup>とら</sup>えてあんな風に自分の心境を語ったのは、どう云うつもりだったのか、滋幹は後になつてもいぶかしく思う折があつたが、彼は実に生涯にたゞ一度、父と二人きりでそんなにも長い時間を話し合つた訳であつた。尤<sup>もつと</sup>も「話し合う」と云つても大部分は父がしゃべり、滋幹は聞かされていたのであつて、父の言葉の調子は、最初は何となく重々しく、少年の心を壓するような沈鬱味を帯びていたけれども、語り進むに従つて、訴えてゞもいるような云い方になり、しまいは滋幹の思いなしか、泣きごえを出しているようにも聞えた。そして滋幹は子供心に、相手が幼童であることをも忘れて取り乱しているような父が、とても観念を成就することなどは出来ないで

あろう、恐らくいくら修行をしても徒勞に終るのではあるまいか、と云うような危懼きぐを抱いたのであつた。彼は、恋しい人の面影を追うて日夜懊惱おうのうしている父が、苦しさの餘り救いを佛の道に求めた経路には同情が出来たし、そう云う父を傷いたましいとも氣の毒とも思わないではいられなかつたが、でも、ありていに云うと、父が折角美しい母の印象をそのまま、大切に保存しようとなつたで、それをことさら忌いまわしい路上の屍骸しがいに擬ぎしたりして、腐りたゞれた醜惡なものと思ひ込もうとするのには、何か、憤いきどおりに似た反抗心の湧わき上るのを禁じ得なかつたのであつた。實際、彼はもう少しで、

「お父さま、お願いです、私の大好きなお母さまを汚さないで下

さい」

と、話の途中で幾度か叫びたくなつたのを、辛うじて<sup>こら</sup>憶えたのであつた。

そう云うことがあつてから十箇月ばかりを経、明くる年の夏の終りに父は此の世を去つたのであるが、<sup>さいご</sup>最期の折には果して色慾の世界から<sup>げだつ</sup>解脱しきれていたのであろうか。嘗て<sup>かつ</sup>あんなにも恋い<sup>こが</sup>焦れていたその人を、<sup>いっこ</sup>一顧の価値もない腐肉の塊であると観じて、清く、貴く、<sup>かつぜん</sup>豁然と死んで行つたであらうか。それとも少年の滋幹が豫想したように、結局佛にも救われないで、再びいとしい人の幻に<sup>さいいな</sup>苛まれながら、八十翁の胸の中になお情熱の火を燃やしつゝ、息を引き取つたのであろうか。——滋幹は、父の内部の闘争が

どう云う結末を告げたかについて確證は挙げ得ないのであるが、しかし父の死に方が決して人の羨むような安らかな往生ではなかつたことから推量して、多分あの時の自分の豫想が誤まつてはいなかつたように思うのであつた。

いつたい、普通の人情からすれば、逃げ去つた妻を諦めきれない夫として、その妻が彼に生んでくれた一人の男の子を、今少し可愛がつてもよい筈であり、妻への愛情をその子に移すことに依つて、いくらかでも切ない思いをやわら和げようとすべきであるが、滋幹の父はそうでなかつた。彼の場合は、彼を捨て、行つた妻そのものを取り戻すのでなければ、他の何者を、たといその人の血を分けた現在の我が子を持つて来ようとも、決してそんなものに胡麻ごま

化<sup>か</sup>されたり紛らされたりするのではなかった。それほど父の母を恋うる心は純粹で、生<sup>き</sup>一本<sup>いっほん</sup>であった。滋幹は、父が彼にやさしく話しかけてくれた記憶を一度も持たない訳ではないが、それは必ず母のことが話題になっていた時に限り、そうでない時の父と云うものは、凡<sup>お</sup>そ子<sup>よ</sup>に対して冷淡な人でしかなかった。だが又滋幹は、子を顧みる暇のないほど、母のことで頭が一杯になつていた父であると思うと、その冷淡を少しも恨む気になれず、寧<sup>む</sup>ろそ<sup>し</sup>うであつてくれたことを嬉しくさえ感じるのであるが、何にして<sup>も</sup>、あの夜のことがあつてからの父は、いよ／＼子に対して冷淡になり、滋幹のことなど全く念頭に見えないように見えた。云つて見れば、いつでもじつと眼の前にある虚空<sup>こくう</sup>の一点を視詰めたきりの

人のようであつた。そんな訳なので滋幹は、最後の一年間ばかりの父の精神生活について、父自身からは何も聞き得なかつたのであるが、でも、父が一時止めていた酒を再び嗜むようになったこと、依然として佛間に閉じ籠つてはいたけれども、もうその壁には普賢菩薩ふげんぼさつの像が見えなくなつていたこと、そして経きょうもん文ぶんを読むむ代りに、いつか又白詩を吟ずるようになっていたこと、等々には心づいていたのであつた。

## その十一

筆者は、老大納言がどう云う精神状態に於いて死んだかについて、

せめてもう少し委くわしい資料を得たいのであるが、何分にも滋幹の記録にはこれ以上のことを見出だせないので、たゞ、前後の事情から判断を下し、最後には遂に救われなかつた人として、——いとしい人の美しい幻影に打ち敗まかされ、永劫えいごうの迷いを抱きつゝ死んで行つたのであらうと、考えるより外はない。蓋けだし此のことは、老大納言その人に取つては傷いたましい結末であつたけれども、滋幹に取つては、父が母の美しさを冒ぼう流とくせずに死んでくれたこととなるので、何物にもまさる喜びであつたかと推量される。かくて、老大納言卒そつきよ 去の翌年に左大臣時平が死に、それから約四十年の間に時平の一族が次々に滅んだことは既に記した通りであるが、天子は醍醐だいご、朱雀すざくを経て村むらかみ上となり、世の中は藤原氏

や菅原氏の栄枯盛衰の外にも、いろ／＼な有為ういてんべん轉變があつた。その間滋幹は、何処でどう云う風にして人となり、少将の位にまで昇進したのであるか、日記は母のことを語るに忙しくて、自分のことは閑却されているのであるが、記事の様子から想像すると、父の死の直後何年間かは、乳人めのとの許もとに引き取られて養育されていたのであろう。かの讚岐さぬきと云う老女は、後に北の方の許へ走つて本院の女房になつたことまでは分つているが、それきり日記に現れて来ない。又滋幹の腹ちがいの兄弟たちや、彼等の母に当る人々のことは、何の交渉もなかつたのであろうか、此の日記の全篇を通じて何処にも消息は伝えられていない。しかし滋幹は、自分の胤たねちがいの弟に当る中納言敦忠あつたゞに対しては、餘所よそながら深い

親愛の情を寄せていた。彼と敦忠とは門地もんちや官位が違う上に、父同士の間に夫人のことでいきさつがあつたことが妨げになつて、何となく双方に遠慮があり、互に餘り接近することを避けていたらしいのであるが、にも拘かゝらずわ滋幹は、ひそかに敦忠の人柄に好感を抱き、蔭ながらその人の幸福を祈りつゝ、常にその行動を見守つていたのであつた。それと云うのも、畢ひつきよう 竟 敦忠が母親似であつたからで、中納言を見ると、遠い昔に会つた母の風貌ふうぼうを想い起してなつかしさに堪えないと、滋幹は幾度か記しているのである。そして、自分の容貌が不幸にして母に似ず、父に似ていることを歎き、母が逃げ去つてからの父が、母を恋しがるばかりで自分を可愛がってくれなかつたのは、自分の顔が母親似でなか

ったからであろう、と云い、敦忠が時平の死後も母と一緒に暮らしているのを羨み、母はあのめでたい男ぶりの敦忠をさぞいつくしんでいるであろうが、自分のような醜い顔をした子息は、たとい一緒に暮らすことが出来たところで可愛がっては貰えないであろう、母は父を嫌きらったように、必ず自分をも嫌きらったであろう、なごゝも云っているのである。

ところで一方、滋幹の激しい思慕の対象であつた母なる人、その後の夫人在原氏は、どんな風にして餘生を送つていたことであろうか。——彼女は時平に先立たれた時が二十五六歳だつたであろうが、それからは若く美しい未亡人として静かな生涯を生きたのであつたか、或は又も第三第四の男を作つたのであつたか。嘗かつ

て老大納言の妻として、平中へいじゆうと云う情人を持つていた女性であつてみれば、少くとも人目を忍んで誰かと甘いさゝやきを交すかわぐらいなことがあつても不思議はないが、そう云うことも今はすべて知られていない。父よりも母を偏愛した滋幹は、たとい母のことについて悪い風聞ふうぶんがあつたとしても、そんなことを記す訳はないが、こゝでは暫く彼の日記を信用して、母は左大臣の遺れわす形見がたみの敦忠の成長を楽しみに、佗わびしくつゝましく後家ごけを通して行つたのであるとしておこう。それにしても、前の夫の老大納言が彼女に焦れつゝ苦しみ悶もだえて死んだことや、平中が彼女に背かそむれた悔くやし紛まぎれに侍従の君を追い廻して、とう／＼そのために命を落す羽目になつたことなどを聞いては、どんな感想を持ったこと

であろうか。左大臣が権勢ほしいまを恣まにしていた間こそ、彼女も本院の北の方として多くの人の崇敬を集め、羨望せきじつの的となつていたであらうが、左大臣の死後は、恐らく昔日せきじつの榮華えいがも一朝の夢と化して、萬事に不如意ふによいを啣かこつ身の上となつたであらう。彼女に凄すさましい熱情を注いだ男たちが次々に死に、左大臣の一家一門が菅丞相の崇たりに依つて一人々々斃たおれ、最後にいとし子の敦忠までが取られて行つたのを見ては、彼女もそゞろに無常の風が身に沁みただであらう。

だが、滋幹は、そんなに母と云うものに憧れつゞけながら、どうして彼女に近寄ろうとしなかつたのであろうか。左大臣の存生中は兎とも角かくも、大臣が卒去してからは、逢うのに格別の支障もない

ように思えるけれども、敦忠をさえ避けるようにしていたとすれば、まして母を訪うことなどは、彼の地位として差控えなければならなかったのであろうか。それについて滋幹の日記は云う、——

——自分は十一二歳の頃、幾度か母に逢いたいと云う望みを洩らしたことがあったが、世間のことはそう簡単に行くものではありませんせぬ、お母さまはもう餘所のお家の人なのですと、そのつど乳人に戒められた。お母さまはもうあなた様のお母さまではなくて、われ／＼よりは身分の高いお方のお母さまなのですと、乳人はそうも云つて聞かした。——と。滋幹は又云う、——やがて自分分は成人し、乳人の膝下を離れて一人立ちするようになり、何事も自分で判断して処理する年齢に達したが、そうなつてからはい

よく乳人の云った言葉が本当であつたことが分つて、なか／＼母に逢う機会などは得られなかつた。自分は年が行けば行くほど、母と自分との距離が遠くなるのを感じた。たとい夫の左大臣は亡くなられても、矢張母は自分などの手の届かない雲の上の人、高貴の家の後室こうしつとして多くの人に册かすずかれつゝ、立派な居館の玉たまだ簾れの奥に朝夕を過しているものと想像された。そう考えると、まことに乳人の云つた通り、もうその人は自分などが「母」と呼ぶべき人ではなかつた。悲しいことだが、自分の「母」は既に此の世にいないものと思わなければいけないのであつた。——と。蓋しけだ、それでなくても、自分は父の老大納言と共に母に見限られたのであると思つていた滋幹は、母に対して一種の僻ひがみを抱いて

いたらしいので、そんなことが一層母との間を心理的に遠ざける因となつたのでもあろう。

そうこうするうち、天慶六年三月に敦忠が死に、それから程なく母は出家したのであつたが、その噂は滋幹の耳にも這入らない筈はなかつた。今迄滋幹と母との仲を隔てゝいた障壁の一つは、敦忠と云うものゝ存在であつたと察しられるが、今やその人が逝せい去よしたとすれば、凶はからずもこゝに機会めくは廻めぐつて来た訳で、もし

滋幹が欲するならば、母に逢う道は容易に見出されたであらう。

嘗てその道を阻はげんでいた浮世の義理おきてや掟おきてなどは、今となつては全く除かれていたであらうし、まして尼あまとなつた母は、西坂本の敦忠の山莊のほとりに庵いおりを結んで暮らしていたので、そう云う消息

も滋幹は、風のたよりに聞いていたに違いなかつた。もはや母の身の周りまわには監視の眼もなく、草の庵の柴の戸ぼそは近づく者を拒まないで、誰に向つても開放されている筈であつた。とすれば、定めて滋幹も心が動いたことであろうが、それでも猶なほしばらくは決心しかねて、ためらつていたらしい様子が見える。それは前に云つたような僻ひがみだの含羞はにかみだの、せいもあるうが、その外にも、滋幹には別に何か、現実の母に会うことを恐れる気持があつたのではなからうか。

思うに、昔父の老大納言が不浄観ぎようを行じた時に、母の幻影ぼうつの冒流くされることを歎いて父を恨んだ滋幹、——四十年来その人と隔絶しながら、おぼろげな記憶の中にある面影を理想的なもの

に作り上げて、それを胸奥に秘めて来た滋幹は、いつ迄も母を幼い折に見た姿のまゝで、思慕していたかつたであろう。然るに、それから四十年の星霜せいそうを経へ、さま／＼な移り変りの末に世捨て人となつて佛に仕えている現在の母は、どんな風になつていであろうか。滋幹の記憶する母は、二十一二歳の髪の長い頬の豊かな貴婦人であるのに、西坂本の庵室あんしつに隠栖いんせいする尼僧の母は、すでに六十歳を越した老嫗ろうおうであることを思う時、滋幹の心は自然冷めたい現実の前に出ることを尻込みしなかつたであろうか。彼にして見れば、永久に昔の面影を抱きしめて、あの時に聞いたやさしい声音こわねや、甘い薰物たきものの香や、腕の上を撫なで、行つた筆の穂先の感触や、そう云うさま／＼な回想をなつかしみつゝ生き

て行く方が、なまじ幻滅の苦杯を嘗めさせられるより、遙かに望ましいことのように思えたでもあろうか。滋幹自身は格別そう云う告白をしている訳ではないが、母が尼となつてから後、なお数年の歳月が空しく過ぎたのには、多分以上のような事情があつたのではなからうかと、筆者は推測するのである。

出家した滋幹の母が住んでいた西坂本、即ち今の京都市左京区一乗寺のあたりに敦忠の山荘があつたことは、拾遺集しゅういしゅう卷八ぞう雑上の部伊勢の歌に、「権中納言敦忠が西坂本の山庄の滝の岩にかきつけ侍りける」として、

音羽川せき入れて落す滝つせに

人のこゝろの見えもするか

とあるのにちよう徴して明かで、その頃の京都の市中から馬を走らせて行く分には、左程さほどの道のりではなかつたであらう。あたか恰も当時滋幹は、しばらく叡山の横川よかわに定心房じようしんぼう良源を訪ねて佛の教を聴いていたので、彼がもしその帰るさに道を雲母坂きらくざかに取つて下山したならば、つい母の住む麓ふもとの里へ出られたのであつた。そして實際、彼は折々山の上から西坂本の空を眺めて恋々れんくとしたこともあり、足が知らず識らずその方ほかへ向きかけたこともあつたが、いつも自分で自分を制して、ことさら外の道ほかを選ぶようにしていたのであつた。

が、それから又何年かを経た年の春であつた。横川の良源の房に一宿した滋幹は、翌日、日もたけなわの頃に房を出て、峰道から

西塔、講堂を過ぎて根本中堂の四つ辻へ来た時、ふと、急に心が惹かれるようになって、雲母坂の方へ道を取った。「急に」と云うのは、その時ゆくりなくそんな気を起したと云うのではなくて、前から一度その道を行こう／＼と思いつゝ、何となくそれを引き止めるものがあつて、果たさずにいたのに、その日は春も弥生半ばで、霞の罩めた遠山のけしき、ところ／＼の谷あいの花の雲などに誘われて、つかうか／＼と逍遙してみたくなつたのであつた。そして、それには外に此れと云う目的があつたのではなかつたけれども、そつちの道を下つて行けば西坂本へ出るのであるから、母の住む里はどんな所か、それとなく様子を探っておきたい、ぐらいなことは念頭のない訳でもなかつた。

滋幹が坂路へかゝつたのは、日がよう／＼西に傾きかけた頃で、水呑峠の地藏堂のあたりを過ぎ、音羽の滝のひゞきを耳にしながら麓に着いた時分には、いつしか空になまめかしいおぼろ月が輝き初めていた。かの壬生忠岑みぶのたゞみねの歌に、

おちたぎつ滝の水みなかみ 上年つもり

老いにけらしな黒きすぢなし

とあるのは、此の滝を詠よんだのであると云うが、滝の末が音羽川と云うひとすじの流れになつており、道はその川の岸に沿うて下つていたので、何心なく辿たどつて行くと、低い籬まがきを結ゆいめぐらした構えの向うに、前栽せんざいの木立こだちを透すかして別荘風の家の見える所へ出た。滋幹は、垣根が朽ちて倒れているのを跨またぎ越え、構えの

内へ二た足三足這入って行つて、暫くあたりを窺っていたが、森んかん閑として人の住んでいそうなけはいもない。東の方には比叡の峰つゞきの丘が聳え、西の方がだら〜と緩やかな斜面になつてゐる地勢を占めて、池を掘り、石を据え、築山を作り、遣り水を引きなどした庭の趣は、むかしはどんなにか結構を極めていたのであろうが、今は凄じく荒れ果て、地面には雑草が生いしげり、木々の幹には蔦葛の蔓が網のように絡み着いているのであつた。

此のあたりは山に近い上に木立が深いので日が遠く、まして黄昏時なので、冷え〜とした空氣が身に沁むのであつたが、去年の落葉の積つてゐるのを掻き分けながら、母屋と覚しい建物の

所まで行つて見ると、そこも今は廃屋はいおくになつてゐるらしく、格子こ子が固く鎖とぎしてあつて、夕ぐれであるのに一点の灯ひも洩れてはいない。階きざはしに腰をおろして疲れを休めていた滋幹は、妻戸ちようつの蝶ちようつ番がが損がいじて扉はが一枚外はずれかゝつてゐるのに気がつき、床とこに上つて中を覗のぞいて見たけれども、内部は真つ暗で、黴臭かびい湿氣しつの匂におがするばかりである。滋幹は、以前は誰の住まいであつたのかしらんと思ひ、或はこゝが亡き中納言の山莊ではなかつたらうか、と云うことに心づいた。いかさま、中納言が逝去してからは誰も住む人がなくて、朽ちるにまかせてあるのであろうか。そうだとすれば、嘗かつて中納言と共に此の山莊に起き臥ふし、中納言の死後も何処いか此の近くいに庵いおりを結んでいたと云う母も、今は恐らく此の地

に住んでいないのではあるまいか。いかに世を捨てたからと云つて、女の身で此のような淋しい所に暮らしていらはしないであらう。……滋幹はそんなことを考えながら、耳の奥がじーんとするような静かさの中になお暫く憩うていた。その間にも四辺の暗さと寂寥せきりようさはひし／＼と加わつて来るのであつたが、一度は母が住んでいた跡かと思えば、矢張直ぐには立ち去りかねるのであつた。

と、その時、梟ふくろうの啼く声に交つて、微妙かすかにせゝらぎの音が聞えるようなので、その音をたよりに、彼は漸ようやく身を起して遣り水の流れに沿いながら、池を廻り、築山を越え、植込みの間をくゞつて行くと、果して崖がけに一条の滝が懸かつていた。崖の高さは七八尺も

あるであろうか、急な断崖ではなくて、なだらかな勾配こうばいのところ／＼に形の面白い石を配置し、落ちて来る水がそれらの間をくつきよく屈曲くつきよくくつしつゝ、白泡しろあわ立って流れるように作られてい、崖の上からは楓かえでと松が参差さんしと枝をさしかわしながら滝の面へ蔽おほいかぶさつているのであるが、蓋けだし此の滝は、さっきの音羽川の水を導いて来て、こゝへ堰せき入れたのであろう。滋幹はそう心づくくと、あの、「音羽川せき入れておとす」と云う伊勢の歌が胸に浮かんだ。なるほど、此の歌にある「滝つせ」は、此の流れを詠んだものであることは明かで、此の山荘が亡き中納言の別業べつぎやうの跡であることは、今は疑いを入れないのであった。

滋幹は、黄昏の色が又一段と濃さを増して、水の面さえ見分けに

くゝなつて来たので、こゝらあたりで引き返そうかと思ひながら、  
 なお何となく心残りが感じられるまゝに、川瀬の石を跳び越え、  
 \、いつか滝の落ち口より上の方へ登つて行つた。もうその辺は  
 構かまえの外であるらしく、泉石のたゞずまいも人為的な庭園の風情ふせい  
 はなくて、次第に殺風景な山路になつていたのであつたが、ふと  
 向うを見ると、溪たにがわ川の岸の崖の上に、一本の大きな桜が、周囲  
 にたゞよう夕闇を弾はじき返すようにして、爛らんまん漫と咲いてるので  
 あつた。「見る人もなくてちりぬる奥山の」と云う貫つらゆき之の歌は  
 紅葉を詠じたものだけれども、かゝる時、かゝる谷あいには、人知  
 れず春を誇つている花も亦また、「夜の錦」であることに変りはない。  
 恰あたかもそれは、路より少し高い所に生えているので、その一本だけ

が、ひとり離れて聳えつゝ傘のように枝をひろげ、その立っている周辺を艶麗えんれいなほの明るさで照らしているのであった。誰でも経験することであるが、人通りのない暗い夜路などを行く時、たまく美しい妙みょうれい齡れいの女の一人歩きをしているのに出遇うと、男の人に出遇つたよりも却つて無気味な恐怖に襲われる。それと同じに、こう云う無人の境にあつて静かに咲き満ちている此の夕桜には、何か魔物めいた妖麗ようれいさが附き纏まとつていようように思えて、彼は我が眼を疑いながら、左右さうなく近寄ろうともせず、遠くから眺め渡していた。桜のある崖は、それが殆どひとかたまりの大きな岩の苔蒸こけむしたもので、川のおもてから一丈程抽ぬきんでいるのであるが、ひとすじの細いく清水が、何処からか出て来て、その崖

の下をめぐって、下の溪川へ流れ落ちてい、崖の中途から一と叢むらの山吹の花が、清水の方へしなだれかゝっているのである。でも、そう云えばさつきから餘程の時間が過ぎているのに、滋幹たくずのイन्दたいる所から、向うのこま／＼とした景色がこんなに鮮かに見えるのは、——花が雪あかりのような作用をして、あたりの物象を暗まぎれから浮き上らせているのであろうか、——と、ちよつと滋幹はそんな気がしたが、それは花のあかりではなくて、花の上の空にかゝった月が、今しも光を増して来たのであった。土の上はしつとりと湿しめっていて、空気の肌ざわりはつめたいのだけれども、空は弥生やよいのものらしくうつすらと曇ろうくつて、朧々と霞んだ月が花の雲を透して照っているので、その夕桜のほの匂う谷あ

いの一郭が、まぼろし幻じみた光線の中にあるのであった。

嘗てかつ滋幹は幼少の折に、父の跡をつけて野路を歩き、青白い月光の下でせいさん凄惨な場面を目撃したことがあったが、あれは秋の真夜中の鋭く冴さえた月であつて、今日のようなどんよりした、綿のように柔かく生暖かい月ではなかつた。あの時の月は地上にある微細な極小物までも照らし出して、屍骸の腸はらわたにうごめいている蛆うじの一匹々々をも分明に識別させたのであつたが、今宵こよひの月はそこらにあるものを、たとえば糸のような清水の流れ、風もないのに散りかゝる桜の一片ひとひら二片、山吹の花の黄色などを、あるがまゝに見せていながら、それらのすべてを幻燈の絵のようにぼうつとした線で縁取つていて、何か現実ばなれのした、蜃気楼しんきろうのように

ほんの一時空中に描き出された、眼をしばだくと消え失せてしまふ世界のよう感じさせる。……

そんな不思議な、特殊な明るさの中のことであるから、いつからそこにそう云うものがあつたのか判然しないのであるが、やがて滋幹は全く思いがけない或るもの、——何か白いふわ／＼したものが、その桜の木の下でゆらめいているのに眼が留まつた。一杯に花をつけた枝の一つが、ついその上あたりまで垂れ下つていたので、最初はそれに見紛まじうて分りにくかつたのであるが、花にしては餘りに大きく白いふわ／＼したものは、或は彼が心つく前からそこにひらめいていたのかも知れなかつた。実を云うと滋幹は、それに眼を留めてから間もなく、それが非常に小柄な僧侶そうりよ、

——その背の低さと肩の細さから判断して恐らくは尼僧、——  
——と推定される人物の、桜の幹に寄り添うてたゞずゐるのである  
こと、そしてその尼——かも知れない人は、年老いた僧がしば  
く防寒用に用いるあの白い絹の帽子を、頭からすっぽり被かぶつて  
いるので、それがあゝ云う風にゆらめいているのであることに、  
大体気がついていたのであつたが、それでもそうと気づいた途端  
に、いやく、これは夢なのだ、こんな所にどうして尼などがい  
るものか、自分は夢を見ているのか、そうでなければあの魔物じ  
みた夕桜の妖精ようせいが現れたのだ、……と、そんな風に、内心自  
分の視覚の世界を否定しようとするものがあつて、確かに我が眼  
で見つゝあるものを故意に信じまいとしていたのであつた。

でも、彼がしきりに否定しようとするにも拘かわらず、月の面を蔽おう  
ていた雲うすものの羅うすものが少しずつ剥はがれて行くに従い、だん／＼とその人  
影は刻明になつて来て、半信半疑であつたものが、今は尼である  
ことに紛まれもなかつた。彼女が被おつている帽子は、ちようど後世  
のお高祖頭こそずきん巾きんのように首の全部を覆おい隠かくして、肩の上まで垂たれて  
いるので、顔はこゝからは分らないけれども、しよんぼりたゞずいで  
空の方を仰いでいるのは、花に見惚みとれているのであろうか、花の  
上にある月にあこがれているのであろうか。……と、尼はしづ  
かに花の下を去つて、その崖を下り始めた。そして清水のほとり  
に来て身をかゞめながら、手をさしのべて山吹の枝を折ろうとす  
るのであつた。

尼がそうしている間に、滋幹も亦我知らず歩みを運んでいた。彼が出来ただけ足音を忍ばせながら、そうつとうしろに近寄って行くと、尼は手折たおった山吹を持って立ち上り、又崖の方へ引き返そうとするところであつた。いかさま、こゝへ来て見ると、その崖の上の苔こけの間に微かなひとすじの坂路があつて、そこを登り詰めたあたりに傾きかゝつた小さな門が建っているのは、多分その奥が庵室あんしつになつていたのであろう。

「もし、……………」

身近に人のけはいがするのに驚いた尼の、はつと此方を振り返つた時に、滋幹は何かの力で背後から突かれたように尼の方へめり出ていた。

「もし、……ひよつとしたらあなた様は、故中納言殿の母君で  
はいらっしゃいませんか」

と、滋幹は吃りながら云った。

「世にある時は仰おつしやる通りの者でございましたが、……あ  
なた様は」

「わたくしは、……わたくしは、……故大納言の遺わすれ形がたみ身、  
滋幹でございます」

そして彼は、一度に堰せきが切れたように、

「お母さま！」

と、突然云った。尼は大きな体の男がいきなり馳はせ寄つてしがみ  
着いたのに、よろ／＼としながら辛かろうじて路ばたの岩に腰をおろ

した。

「お母さま」

と、滋幹はもう一度云った。彼は地上に跪ひざまずいて、下から母を見上げ、彼女の膝ひざに靠もたれかゝるような姿勢を取った。白い帽子の奥にある母の顔は、花を透かして来る月あかりに暈ぼかされて、可愛く、小さく、圓光を背負っているように見えた。四十年前の春の日に、几帳きちょうのかげで抱かれた時の記憶が、今歴々と蘇よみがえ生えつて来、一瞬にして彼は自分が六七歳の幼童になつた気がした。彼は夢中で母の手にある山吹の枝を払い除けながら、もつとく自分の顔を母の顔に近寄せた。そして、その墨染すみぞめの袖に沁みている香こうの匂においに、遠い昔の移うつり香かを再び想い起しながら、まるで甘えているよ

うに、母の袂たもとで涙をあまたゝび押し拭ぬぐった。



## 青空文庫情報

底本：「少将滋幹の母」中公文庫、中央公論新社

2006（平成18）年3月25日初版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十六卷」中央公論社

1982（昭和57）年8月25日

初出：「毎日新聞」毎日新聞社

1949（昭和24）年11月16日～1950（昭和25）年2月

※表題は底本では、「少将一滋幹《しげもと》の母」となっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年2月28日作成

2017年4月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 少将滋幹の母

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>